も佛門に入たりける小比丘尼を強て犯さんとせしのみあらず淫慾よりて害したる其罪輕きよあらぬども其身も舌を咬切れて俱に即死に及びしかば今更是非の沙汰に及バず妙汐の亡骸は尼が隙意葬るべき又武太郎が亡骸ハ妻の阿蓮に取するあり皆是旨を得よかしと嚴重に言渡して三好の城にぞ回りける鄉人等ハ思ひしより事安らかに果たるは原來小比丘尼妙汐が兩親は世を去て親類もあき者あるに武太郎も又墓々しき親類もあく緣者もあらず剩さへ弟武太郎は阿波の國へ赴きて折柄此地よあらざれバ障りを言べき者もあく妙潮の謀計思ひの儘に行はれて啓十郎ハ夜毎〳〵に武太郎が宿所に來つゝ阿蓮と忍び合まく思へど阿蓮が爲には織娘なる琴柱ハ今年十一にて殊に悧怜ものなれバ波石に憚りあきにあらず然れども小夜更て彼が能眠りし折或と遠く使に出され或は墓參りなどに行し折などには合圖をなか出て來て阿蓮と忍ひ逢けるを鄉人等は未だ知ぬど武太郎が老實ある美顏妻を持あがら小比丘尼を犯さんとて供に命を落せしい日頃の氣質に引氣もなき思案の外の珍事あり別に譯ある事ならずやと怪きつ眉顰めて疑かふものもありしかど然とて見留し事あきに事に出きんハ偵に苦々しくぞ思ひけ

る○去程に大原武二郎武松は向に主君の供に立て阿波の國へ赴きしに往彼の事ありけれバ彼地に久しく召も置れず一月餘りにして身ハ暇を賜ハりけれバ頓て尼が崎へ飯り來て歸城の由を當家の執事船館幕右衛門へ屆けおとして此日は休息する程に兄武太郎の横死の由を暗に告る者ありけれバ武二郎聞つゝ驚きて且疑ひ且哭くのみ此日ハ已に暮よけれバ次の日一個の奴僕を隨へて兄武太郎の宿所に赴き事云々と音問するに阿蓮ハ此日琴柱をば父の墓參りに遣したり兼て合圖をしたりしかバ啓十郎が來るあらんと思へバ髪あけ化粧して今か〳〵と待程に待人は來ず武二郎が早く阿波より歸り來て門邊に行みたりけるを阿蓮は垣間見驚きながら手早く髪を解ほどきて櫛笥に去わがれ紅に白粉を洗ひ落去て漸くに出迎へ所ハ武二ぬし恙もなく何の程にか飯り給ひたる琴柱は御寺へ遣えたるに妾は今朝より病勞りて打臥てありしかバ暫く待せ侍りたり卒此方へとさりげなく座敷へ誘ひ茶を進めて恙なきを祝するにそ武二郎愁ひの眉を顰めて某昨日當所に飯りて人八噂に驚き思ふ我兄ハ不慮の事にて世にあき人になり給ひしといふは實に候かと問れく阿蓮ハ涙を拭ひ世に耻かしき頁夫の不所存人の噂さに聞給ひ

なバ今更貝ゑ告るゑ及バず思案の外とい云ながら面目もなき非業の最期跡に殘りし此身の行末察し給へと許りによゝと泣つゝ伏沈めバ武二郎も慰めかねて吾兄は老賈よて白痴き所爲をきず人ならず夫ゑは別に譯ありて人ゑ計られ給ひしが心得がたき事なれど毒餌ゑいふ死人ゑ口なし彼小比丘尼も諸共ゑ命を落せしよしなれバ仇ありとても今更ゑ知べきよすがいとゞきものから天道祟を照し給へバ遂ゑ顯實現はれて耻を消むこゝ折もあるべき和女は年弱若かれバ再びよそがい幾等もあらん又こそ音信申さんとて兄の位牌ゑ回向しつゝ暇乞して立出ゑけり○斯て又武二郎は菩提所へ赴きて歸城のよしを兄武太郎の墓ゑ告んと思ひつゝ其方をさして急ぐ程に琴柱は寺より歸るゑ逢けり武二郎は益々ゑ好折なりと思ふゑぞ奴僕には花を買取て早く菩提所へ赴きて墓の掃除をさて待べき我い暫く用事あれバ後より行んと必得さきて此所より前へ走らせ其後琴柱を木蔭ゑ招ぎて昨日阿波より歸りし事且武太郎が横死の赴き日頃の事其日の悲況聞たる事はなかりしやと問ゑ琴柱と打泣て問せ給へる事ながら正しく聞たる事はなき御身の兼て父様ゑ阿波より飯り來ぬるまて商賈ゑな出給ひそと止めて金を送り給ひしその甲

斐もなく母様の進めて日毎ゑ商賈ゑいつもの如く出給ひき然るに彼日是等ゑて癩病と呼るゝ乞食が妙潮庵へ赴きて庵主の尼と何事やらん物爭ひをしたる事あり我父様の事ありげるを同じ庵同じ折ゑそ侍るめり然ちバ件の癩病を敵かバ知よし有もやせん　噂せし人ありけるを思ひず漏きゝ侍りゑきといふゑ武二郎點頭て开は宜事を聞つるかな其事必ちず故あるべし扨癩病は何處に居る歟一く告ゑ如何ぞやと問バ琴柱は四邊を見返り彼癩病ハ這樣〳〵云々の乞食ゑて野臥あれバ宿所は侍らずさをとも此等で隱さなければ暑ぬ給はゝ紛れはあらじといふに武二郎ハ又點頭て然らバ言にて申別れん件の事に忘れても繼母御ゑも其他ゑ人ゑも秘めよ知すゑ事あかれ母ゑハ早く死に別れ一個の親は非業の最期飯らぬ死出の山吹の身ゑあそなら繼母ゑ浩る哭さは和女の不幸さぞあ苦しき事多からめ又こそ逢ん耐忍せよと慰められつ慰むる爰ゑ親身の叔父姪か對きは同じ憂ことを云も霧さて別れけり已にして武二郎ハ暫て琴柱ゑ立別れて行こと未た百歩ゑ過ず忽ち後ゑ人ありてやよ暗旦那待給へ侍せ給へと呼かくるを武二郎急ゑ見返れバ君則ち他の人ならず又彼乞食黒五郎あり其時黒五郎は聲を暗めて只今姪子の噂

に聞れば某い此等の人ゝ癩と呼るゝ野囚なり和女が姪子と密談を圖らす彼所で立聽て武太郎ぬしの飼舍弟ゝて大力武勇隱れもあき大原武二郎樣なる事を初めて聞知たりければ御爲と思ふて呼掛たり暫し木蔭ゝ寄せ給へといふゝ武二郎點頭て盲るゝ趣き心得たり吾も其方に逢まく思ひし好折からにて幸ひなるかな卒々と云ながら供に木蔭に立寄けれバ黑五郎壁を暗めて某い日頃より武太郎ぬゝの情を受て賣殘り〜餅のある折は幾度か給はりて飢を凌ぎし事多かり然るゝ往る日武太郎主の暗に我等ゝ宣ふやふ我妻阿蓮は何乃間ゝか西門屋啓十郎といふ浪華に名たゝる大豪商の此地の出店に逗留してあるゝ忍び逢こと度々なり其仲宿い程遠からぬ庵主の尼妙潮なり我已ゝ臭付たれば彼等が密會しぬる折尼が庵へ蹈込て押捉へんと思へとも身一ツゝて不便なりよりて其方を賴むあり爭て我等ゝ力を戮して此憤を晴させ呉よと他事なく語ふひ給ひしより某日頃の情を感ぜて異義なく賴まれ奉つり偖其折の相圖と定めて彼啓十郎が妙潮庵へ忍び來て武太郎ぬしの內室と忍ひ逢ぬる折を窺ひ裏表より押竄て某い仲宿の庵主の尼武二郎を捉へぬしは奥へ蹈込奸夫淫婦を捉へんとし給ひけれバ口惜や啓十郎が手練乃

當身ゝ武太郎主は胸を打れて仰反倒れ給ひしかバ某一個三個ゝ敵すべくもあらざれバ引外ゝ逃れ出て辛く命を取留たり斯いふ譯ていゝへバ武太郎主は奸夫淫婦ゝ殺されたるゝ疑ひなし汗を這奴等が惡巧みゝて小比丘尼さへ縊り殺しく事云々と拵へて後難を遁をしあり某此義を知と雖も柔弱不具なる乞食の身ゝて勢ひ高き豪家を相手ゝ訴へんよしもなく專無念ゝいひき兄の仇を報はんとし給はゝ某を証人ゝして訴へ給へ何方までも罷り出て件の由を申すべーといふゝ武二郎悅びて吾推量ゝ違ふことなく悼ゆや吾兄い奸夫淫婦ゝ害されてとゝなき耻は濡衣い乾ゝ去とてい難かりしを幸ひゝして好証人を得たるは方に天の賜物哭きの內乃悅びなり其義を以て訴へ申しく兄乃恨を返さべ去其方は常に何所ゝ居ぞと問バ黑五郎さんい某は因果橋の土手れ邊りゝ起臥すれバ彼所に至りて尋ね給へ浮用の折は何時ゝても呼せ給へ何所へも行てとゝいずと盲ゝ武二郎其意を得て後日の手配兎に角と牒合して別れけりさをバ黑五郎は武二郎を武松と知るとい雖も彼ゝは其身乃素性を明さず只妙潮等ゝ彼折の恨みを返さん爲ゝのみ賣言空盲打雜て事云々と武二郎ゝ告て証人ゝありたるあり又武二郎ゝ黑五郎が面影の變りし

故よ彼を伯母聟黒五郎がなれる果とは思ひもかけず且妙潮は其身の故主彼鎌倉なる大彿屋五文次が雛縁乃妻沖見なりしと未だ知ず況て件の啓十郎を黒五郎の子の黒市なりと神あらぬ身の知る由なけれと正き証據を得たりしかバ獨憤り胸よ滿たり兄の恨を返さんと思ふ心の忙がれたを其日は先墓參りして兄武太郎の墓よ花を手向程なく恨を返すべき便りを得たる由を告て其靈魂を吊ひ慰め次の日一通の訴書を以て啓十郎阿蓮明潮等が惡事乃趣き証人を引子細を演て兄の恨を返させ給へと事審かに聞ね上げり此時三好長莨は阿波に在國なりけれバ第一の郎等船舘幕左衛門景春件の訴書を一覽まて次の日大原武二郎を問注所へ召出し諸役人列座よて船舘幕左衛門の云けるやう其方の兄武太郎が横死の事對手の小比丘尼明汐も諸共よ死したれバ容子定かよ知るよしなけれどそのまとの爲体外よ仇あるべくもあらず然るに其方証人ありとて強て訴へ出はるより猶また疑義を遂げらるべし其証人をともなひて明日また〳〵罷り出べき此義心得候へと嚴重に言渡されけるされバ又西門屋啓十郎は大原武二郎が阿波より皈り來て彼乞食の起癈がまとの証人と申したて〻啓十郎阿蓮と密通乃事ならびよ明潮とともよ

暗かに計りて武太郎を殺したる惡事乃趣き這樣〳〵と審かよ訴へ出て兄の恨みを返さんと願ふよしを幕左衛門が家の老管目谷小内といふ者より忍びやかよ告にけるバ啓十郎深く驚き怕れてよきを妙潮阿蓮等よ告知せ兎よ角と商量するよ所詮起癈を押片付て証人だよなくならバ武二郎如何よ思ふとも彼が願ひと立べからず此義を早く計ひ給へと詞等きく進め〻を啓十郎沈吟玄て起癈めを殺せは安けれども乞食仲間の知る事あらバ又々事の難義よなるべし三好殿の家來人なる蔦松加闍太い吾妻呉服と内縁ある船舘殿に取立られたる者なりけれバ彼人も我と原より疎からず這樣〳〵に計ひて彼起癈に情をかけて遠く他郷へ走らせおバ後よ用ふる事もあらん吾等よ任せ給へとて走りて加闍太が宿所よ赴き爭の機密を私語けれバ加闍太異議なく頼れて其夜一兩人の奴僕を從へ因果橋へ赴きて土手の筵よ臥きたりける黒五郎を引出さして新刀を試すと詐り己よ奴僕よ取籠さして斬て棄んと犇めくとり啓十郎と妙潮は牒合せし事なれバ其等を過る面地して事乃容子を見つるよより憐む体にもてなーて之は我等が兼て知る乞食よて侍るあヲ人を救ふハ佛の慈悲尼に給へと種々よ詞を盡きて詫よけり加闍太是を打聞

て流石い出家の衣よかけて命乞をせらるゝを聞ざらんい無慚なるべし命冥加のある奴かなと嘯きつ睨まへて白鞘引提げ跡り行を須臾見送る妙潮啓十黒五郎よ打對ひて犬畜生でも恩を知る其方は必死を救ひしは頼むべきよしあればなりされば以前の恨みを棄く我々が荷擔人よならんとならば今爰よて金三十兩を取ずべき今霄の内よ何所へなりとも早く影を隱せかし若武二郎が追かけて遁れ難き仕義よあるとも其折い寂返りて初めと口を違へあば諺よいふ乞食よ棒打武二郎は詮方あくて彼身の難義よ及ぶべし能せよかしと密語示して啓十郎い懐中より件の金を取出して黒五郎よ取もるよゞ慾に目のなき黒五郎は我子と知ねば仇となり味方ともある惡徒根生一義よ及ばず承引て早くも影を隱しけり啓十郎は証人の難義を已よ遁れきかども又妙潮を庵よ留なば武二郎に尋ね來る事あるべしと阽みて彼をば浪華へ遣しく便利よき所に忍ばせ偖武二郎を除く手術を暗に幕左衛門よ頼を置て驚く事の治るまて有馬へ行て遊んとて通し駕籠よ打乗つゝ早く彼地よ赴きて暫く湯治したりけり

○第二編

去程よ大原武二郎は次乃日因果橋乃邊りへ赴きて彼癩病を尋ぬるに何地へ行しか居らざれば猶此所彼處と尋ね歩行て人よも問ひ他乃乞食にも問つゝ只管尋ねけれども行衛を知者なかりけり武二郎深く不審ながら是非なく由を聞あげ彼証人い病發りて打臥いあば今日は相俱き難し兩三日よて癒すべしと予立て日延を願ひ次の日も此所彼所となく乞食の所在を尋ぬる事早二三日よ及びきかど絶て行衛の知れざりければ深く心よ疑ひて若啓十郎が聞知りて癩病を殺きやきせん假令癩なくありたりとも彼仲宿け尼を打かば惡事を白狀せざらんやと思案をしつゝ妙潮が庵室よ赴きしよ彼も又庵よれちず事曾喰も違ひては獨疑ひ迷ふのみ其夕暮よ宿所に歸れば折から幕左衛門より使をもて頼みやきた度一義あれば此使と諸俱に只今沒出給いるべしと忙きげに言せければ武二郎是を打聞て何事やらんと思へども當家第一の執事ある船館乃所用とあれば否と言れず使と共よ幕左衛門此宿所よ來よけり其時船館の家乃老曾なりける目谷小内の出迎へて客座敷よて茶を進め主人の口狀を演るやう招ぎやす事他の義よあらず往る夜より此所よ變化の物の出るあとあり宛から女の幽靈よ似たり是により陰陽師よ占こせゝよ

船館の家の重寶なる鹽竈の香爐あり此崇りならんといへり香爐い元より非情の物なり崇をあさん物にあらず和主は武勇の譽れあれバ暗ゑ頼み參する願ふは今宵止宿して見届けて給はるべき此義面談にて申すべきを右ゑ付昨日より物忌ゑて籠り居れり失禮あから老管をもて頼み申に成り彌々香爐の崇りなるや事の虛實を知れん爲に香爐を預け參らする是を此等ゑ預れて御試し下さるべきと懇に演示ゑて携へ出たる件の香爐を武二郎に見せ抔ゑて盃を勸めて欵侍けり武二郎い心得ぬ事ありけりと思へども固辭て臆したりと云れん如何許り事あるべきやと思ひあからもさりげなき御賑みの由承知せりさらバ今宵は通夜致して御厄介ゑなるべけれと答へて香爐を側に差置その欵侍と辭めとも早種々の肴を出ゑて小内並びに若徒等が盃の對手にありて交代ゑ強けれバ武二郎い困玄果て思いずも醉にけり斯て雙鶴爭果て此夜も已ゑ更ゑけれバ稍杯盤を取納めて皆々辭して退きけり斯て武二郎い只一個客座敷に通夜ゑて居り深更になる儘ゑ酒の醉いたく上りて頻りゑ眠を催ずを猶睡らじと氣を勵ませども次第〳〵ゑ堪がたくて暫時目睡其隙ゑ忽まち一個の曲者あり客座敷に忍び入て武二郎が側に置たる彼鹽竈の香爐を取りて走り出んとせゑ程ゑ武二郎早く目を覺しく其方を佶度見返れバ白き衣着て髮を乱し其さま女の幽靈にやと思ふ許りゑ怪〻き曲者件の香盧を搔攫いて逃るを透さず武二郎は曲者ゑてと呼かけて刀を取りて追蒐れバ彼幽靈い椽側より早廣庭へ逃出るを猶逃さゑと逃蒐る折から二十日餘りの事ゑして黑白も分ぬ暗ゑりけるバ武二郎は追縋りて走り出たる庭面ゑ掛繩あるを知ざれバ件の繩に足を搦まれ忽ち動と伏轉めバ待設けたる若徒奴僕盜人入ぬと呼はり〳〵前後左右の木蔭より等しくいつと走り出て起んとしたる武二郎が手を取りそ生め足を捉へて折重りて縛りけり其時主個幕左衛門い手燭を取つゝ奥より出て事の容子を尋れバ若徒奴僕詞等ゑく今宵盜人の入ひしを我々早く眠り覺て追掛出つゝ辛くして生捕てひなりと云いせも果ず武二郎い怒れる聲を揮立つて人々鹿忽の事をないひそ我は大原武二郎なり今宵船館どゝゝお頼みにより當所れ變化を見屆けん爲客坐しきゑ通夜しく在ゑゑ果ゑて怪しき曲者あり側ゑ置れし香盧を奪ふて走り出るを捕へんとて追蒐たる此庭面ゑて物ゑけしどひ轉びゑのみといふを幕左衛門冷笑ひて我家にい變化なんとの出たる事は絶てなく又武二郎を招ぎゑ事あら

ず論より証據懐中に盗みし物ありもやせん皆々早く詮索せよといふ程に一兩個早挑灯を燈さ來つ見るには果して鹽竈の香盧は碎けて武二郎が邊りよあり偖は此香盧を盗まんとて忍び入しよ疑ひなき侍士よ似氣なき惡事あるとて言解よしを些とも聞ず曉の朝武二郎を獄舍へ遣し繫せてよしを阿波へ聞るあげ死罪よ行ふべき者ありとて禁獄等閑ならざりけり扨有也幕左衛門は啓十郎と内緣あれば兼て暗よ牒合をして彼が爲後々まで後安くすべけれとて計ひて斯は武二郎を無冤の罪よ陷しけり○されば琴柱は叔父武二郎が盗賊の罪ありとて禁獄せらるを趣きを傳へ聞つゝ驚き歎きて繼母阿蓮が漏目を忍びて船館幕左衛門が宿所よ赴き慈悲の御赦免を願ふこと再たび三たびよ及びしかば幕左衛門立出て汝が願ひ不愍あれども武二郎が罪輕からず何條故なく免さるべき但志上れ御物を盗みたるにあらざるども我秘藏せる鹽竈の香盧を盗を剩さへ打碎たる事なれは其償ひとして今二百兩速かに納めあは死罪一等を赦さるべき此義を心得いへと嚴重に言渡さけり這は船館が難題よて所詮小女娘の分際よて二百兩は扨置十兩の金も調ふべからず若又餘處よ金主ありて二百兩を差出さい安陶器の香盧の價よ過分の利を得

る事あれば其折よ又詮方あらんと思案をしたる貪慾の答へを琴柱と曉ねども其金あらば叔父の命を助けられんと言れしを切てもの事よ思ひて宿所よ罷りて獨心を碎けども二百兩といふ大金の調ふべくも有ざれい此上い神佛の冥助を祈る外なしと思案をしつゝ原を窺ひ宿所より程遠からぬ因果橋の邊りに赴き川水に身を浸さて垢離を取あと七日ばかり心よ天滿天神の冥助を祈り丹精を凝し願くは叔父の爲に二百兩の金を得さして無冤の繩目を解しめ給へと祈念する事已よりて七日の結願よ及びし程よ思はず琴柱が足の邊りよ流れかゝる物ありさを何ぞと思ひて取上見るよ奇なる哉編の財布よて確も最重かりけをば忙しく其紐を解回して中を見るよ這は二包の金よして其高二百兩餘りなり琴柱い是を見てしより夢かと飾り嬉さの天へも昇る心地さて打戴き〳〵岸へ上らんとせし折から由緣ある武家に給事する女中おらんと覺くしく年い五十餘なるが從者五七人從へて橋をば後邊よつらせ因果橋を渡り來る程よ琴柱が水垢離をとり容仔を橋の上より倩々見て心得難く思ひけん供若徒を走らせて只今汀へ歸り上りて忙さく身を拭ひつゝ岸に木に枝よ掛置たる衣物を着て帶引結ぶ琴柱を邊りへ招ぎよせて

其方に十か十一まある女童まて似氣もなき今水垢離をとりし容体如何なる大願あるやらん若や親の病氣平癒を祈んとての所爲あるか如何なる者の娘ぞやと問れて琴柱は隱すまよしなく妾に此里の餅商人大原武太郎が娘まく琴柱と呼るゝ者まに侍る產の母は世をさりて繼母御まに養ばる父と去る日横死をてまだ光陽も果ざるまに親と頼む一個の叔父大原武二郎武松と呼なす侍士に領主三好殿お仕へをつるまに無冤の罪まに捉はれて殺さるべしと聞え志かば夫を救はんと欲するまに二百兩の金なくてに願ひ叶はずとあるにより日頃信ずる天滿宮の冥助を禱りやさん爲まに母まには隱して日毎〳〵まに此川水まに水垢離をとる事今日に七日に及ひて不測まに御利益侍りまきといふお驚く件の女房さては和女に我姪の落葉が娘でありしよな傳聞たる事もやある吾身に則ち和女の大伯母京なる菅領家の夫人まに年來仕へ奉まつりて葉戸と呼るゝあり初めに最下ざまなる下婢ものでありけるを給事等閑なく早年頃まになるまてまに次第〳〵まに御取立御恩まによりて思はずも今は女老まにおされたり然るまに管領家の夫人と三好殿の内室とに御内緣あるまより這回使を承にり此地へ來つるも昨日今日逗留の内閑を得て此地の名所を見ばやとて漫ろ歩

行をせし程より此地にありとい思ひもかけぬ姪聟なる武太郎の娘より逢しい互ひの僥倖委
しき容子も聞まほし此方へ來よと伴ひて道の邊りの茶店より憩ひ偖武太郎が横死の趣き
又後妻の阿蓮がおと又武二郎が人と爲禁獄せられし罪の始末並びに琴柱が孝順を神も
憐み給ひけん不測に得たる金の事聞に涙ぞ玉はしる世に云親身の涙よりやかたみに積
る物語に時の移るを知ざりけり栞戸僅に涙を止めて落葉といひ武太郎殿さへ世を早く
せられたる所い哭くとも返すよよおなし琴柱私女が孝順の信心空しからずして武二郎
殿の罪を贖ふ二百兩の金を得たらんには先仮人を救ふべし我身宜しく圖はんに諸俱に
船館の宿所へ行ぬと密語示してそが儘琴柱を伴ひつゝ偖幕左衛門の宿所へ赴き即ち主
個に對面して武二郎の姪の琴柱が叔父の死罪を贖とん爲に兼て云れおき數の如く二百金
を調達して持參せおよしを告て件の金を渡おけり爰に於て幕左衛門は今更否と言よよ
しなく其賄みを受入て浩れば武二郎が死罪を宥めよしを主君に聞えあげて阿波に國へ
送り遣し淡路の領地へ配流べしといふに栞戸其意を得て然らば妾は武二郎に暫時對面
をせまくほし都歸りも程遠からぬば今日對面を赦し給へと只管に頼をけり栞戸は管領

家よて給事する老女あれバ幕左衛門は詳みかねて頓て大原武二郎を獄舎より引出さして栞戸琴柱等よ逢せけり夫程に武二郎ハ初めて栞戸よ對面して助けを得たる事を喜び且琴柱が孝順世よ勝れて得難かるべき許多の金の不測にも手よ入て其身の必死を救ひたるよしを聞つゝ涙汲まて感ずる事大方あらず某當家の譜代よあらねバ幕左衛門は啓十郎と内緑あるを知らざりきに獄卒等か噂よて聞しる事を得たりしかば遂よ彼等が奸計よ陥されたるを悟ると雖も今更脱るゝよしなかりしを圖らず琴柱が孝順よて死罪を宥められし事是切てもの僥倖あり然れども某ハ淡路へ流罪の罪定まれバ再會は計り難かゝ頼みやすは栞戸殿琴柱が上を兎も角も宜しく計らひ給ハれかしといふよ栞戸點頭て其義ハ心易かるべきを妾都へ携へ飯りて宜しく養ひ侍るべしと懇切よ慰めて琴柱を宿所へ歸し遣し偖武二郎よ別を告て又從者を從へつゝ武太郎が宿所へ赴きけり尋るに琴柱が因果橋乃邊りよて水垢離をとりし折不測よ得たる二百兩ハ向に黒五郎が都よて綿市山樹を斬殺して盗み取たる二百金なり彼折よ黒五郎ハ丸木橋を踏落して大和川に溺れし程よ財布と共よ件の金を失ひし由ハ第二輯よ見えたり然るよ其金ハ川筋を流れ

〳〵て海よ入り大物の浦よりして又尼が崎の枝川よ入まゝらん汗は彼財布よて知るゝよし後よ北野の神の示現あり此折は浩るべしとハ悟る者あかりまなり遣は後々の巻よ到りく説分つべき事なるを詰めて後よ知すのみ善悪必らず應報あり因果橋の名空まからずと言べし○されバ又姪婦阿蓮は去る日大原武二郎が阿波より飯り來つるより易き心もなかりしに啓十郎が計ひて本妻呉服の伯父幕左衛門の手を借て彼をバ盗賊の罪よ陥して獄舎よ繋れしと聞えしかば後易まと思ふのみ啓十郎は事の治るまで有馬へ行て湯治せんとて假初よ別れしより徒然よ堪ざりしよ或日琴柱は寺參りよとて朝より出て久しく飯らず啓十郎も此地よあらず汗も亦却つて僥倖なれども彼と湯治よ行て暫く逢よしあき折なれバ心よ疑ひ思ふ程よ七ッ下りよなりし頃琴柱が歸り來よけれバ阿蓮ハ強く罵り怒りて遅きを咎めゆくてを侮り嚴しく折檻する折から栞戸ハ轎よ打乗つゝ尋ね來て頓て阿蓮に對面しつゝ琴柱が爲よハ母方の大伯母なるよしを具よ告て琴柱を都へ伴ひて養はん事を言しかバ阿蓮ハ暗よ悦びて一義よも及ばず其意に任して琴柱を栞戸よ渡まけり○かくて栞戸は此地の所用果しかバ則はち琴柱を伴ひて都へ飯へり上り

けり是より琴柱に辛き目を見ず伯母の局に養なはれて上さまの事を見習ふに其性賢かりければ栄戸愈々愛悦びて年十五六になるあらば願ひ申して諸共に給事をさせんとて萬の事を教へけり去程に武二郎は幕左衛門が計らひにより僅に死罪を宥められて附波の國へ送りやられて淡路嶋へ流されぬれば是より後啓十郎阿蓮い憚る方もなし今須臾日柄もたゝば浪花の居宅へ引取れんとて其日を遅しと待程に妙潮も又武二郎が罪定りて阿波へ送られたるよしを傳へ聞て元の庵へ立回り日毎に阿蓮と酒打飲て啓十郎か有馬より飯るを俱に待たりけり○爰に又黒五郎は去る夜啓十郎に一味して金三十兩貰ひし折早く尼が崎を逐電して浪花の方へ赴く程に猥心に思ふ樣今圖らずも三十兩の大金を得たれども人に忌るゝ難病の身に齎緣たる此ざまにては活業はなし難し所詮有馬へ赴きて湯治して病を癒し元の身体になるならばよしや資本を失ふとも日雇を取ても人並に世を渡る事安かるべしと思案をまつゝ然るべき身の衣を買求め暗に旅裝ひを調ふるに有に任せし心さへ驕りて旅駕籠に打乗つゝ頓て有馬へ赴きて第一番の湯屋に至りて些少なる座敷一間を借切りて起臥しつゝ暫らく湯治をたりけり○されば又西門屋

啓十郎は去る日尼が崎の出店より通し駕籠に打乗て有馬の温泉に赴きたれども詞かたきまなるよしもあき供人一個二個にては蕩づに不自由なる事も又い旅の事なれば盗賊幷びに悪徒の防ぎにとて浪花へ人を遣して親文具兵衛の時より店定抱へにしたる處の若者頭なる飛藏を呼けるに日頃啓十郎の躰間をそつ喜田意庵祝屋念藏等は啓十郎が尼が崎の店にありて久敷く歸らざりけるを忌元なく思ひたるに彼處より有馬へ行て湯治してありと聞て飛藏と諸共に有馬の宿に來にければ啓十郎悦びて彼等を對手に遊び暮し遊興に日を重ねるを覺えず日毎に麗しき湯女を集めて彈せもしつ唄はせもして樂みありと思ひけり去程に黒五郎が座敷を借て湯治をしてある宿も啓十郎と同じ宿にて紙門ひとへに隔てたれども黒五郎は偵に恥く啓十郎に言かゝず啓十郎も又彼赴藏が湯治の爲に同じ宿に逗留をしてあるよしを知れども知ぬ面色して人には告る事もなければ飛藏意庵念藏等は黒五郎が素性を知ず同じ宿なる旅客なりと思ふによりていつとなく物を言かけ言かけられて心易くなりにける斯て或日黒五郎い啓十郎が湯に入を見るに彼が臀に痣ありて形ちはつれ雪に似たりしかば心に深く不審て獨倩々思ふやう稚き

時天滿よて親知ずの約束にて人の養子に遣はたる我獨子なる黒市も彼人と寸分違はぬ臀に痣ありけるに是彼よ似たるハ不測あり尋ねて見ばやと思案をさつゝ或日飛藏と百ふ序よ啓十郎が素性を尋ねて御身の旦那と實子か養子か親御ハ今も居ますかとさりげもあらず問れたる飛藏は旅客を昔し天滿の邊りにて文具兵衛ハ文字八の頼みよりて媒介ーて僅かの金に其子を賣せし物貰ひの涙人ありとは思ひもかけぬ事あれバ後語ひの興よ任して漫ろよ口を走らせて啓十郎ハ貰ひ子ある事一伍一什を私語示して養ひ親の文字八は俄豪富ありし事啓十郎が代よ到りく家は益々繁昌すれバ涙花にて一といふども三とは下らぬ大豪富なる事ハ趣き云々と落もなき物語りて現よ人の僥倖ハ計り知られぬ物ゆかし今乃旦那は物貰ひの涙人の子てありけれども宿世よりの果報よや大身代の子とあり上りて榮耀榮花をせらるゝなり眞の親は如何にありけん主と實の親あるよ志を今も知ずよおはするならんと言に黒五郎は偖と計り或ハ驚き或は悦ぶ腹の裏よは種々よ思ひ計るよしあるを惡徒なれば色にも出さず唯餘所〳〵しく回答をさつゝ其幾運をぞ羨ける斯て其夜さり黒五郎ハ更に又思案をするやう那西門屋啓十郎は吾

子黒市なりし事今更に疑ふべからず然るとも啓十郎が最稚かりし折相別をたる我身あるよ彼ハ養父よ誑かされて身よ恨みハ親あるよしを今も知ずは名乘あふとも却つて實とすべからず又彼飛藏とやらんいふ男ハ往昔西門屋の主個よ頼まれて天滿て我等よ說勸めて黒市を貰ひ取たる其人よて有たりよ吾面影の變りまよ年經て彼も頭の毛の都て眞白よなりしかバ我さへ見忘をたりけるに彼が自ら口走りて事云々といひけれバ是も脫さぬ証人あり要あるべしと出入の魂膽千々よ枕を碎きけり○去程に啓十郎は尼ケ崎なる船館幕左衛門より密書到來して大原武二郎を阿波へ送り遣ハせし由を告知せ兼て死罪よ行はんと思ひたる事なれども主君三好殿の沙汰として淡路へ流罪よ行ふべしと阿波より下知せられしかば止事を得ず法の如くよ取行ひたりけるなりされバ大原武二郎ハ死なざる事を得たれども已に流人よなりたれバ繩の切たる釣瓶よて世に出る事なき者あり此義を心得給ひねと事審かよ書たれども武太郎が娘琴柱か二百兩の金をもて叔父の死罪を贖なひたる夫等の事は猶隱して主君の下知と偽ハりしと親疎よよらず利よ傾むく是小人の擬方便油斷のならぬ人心をよくも思ハぬ啓十郎は見つゝ暗かに悦

びて意庵念藏飛藏等をそが儘浪花へ歸し遣ーー其身は尼が崎へ赴きて幕左衛門と其輩ゑ音物を多く遣し偖阿蓮妙潮にハ猶又阿蓮を娶るべき手段を暗ゑ談合して支度金を多く取せ迎ひの人をれゐさんとて浪花の居宅へ歸りけり斯て西門屋啓十郎ハ浪花の居宅へ立回りて本妻呉服幷びに力對卓二茹藻三個の妾等ゑ告るやう吾尼が崎ゑて圖らずも阿蓮と呼ゐす妾を得たり彼ハ妙潮といふ尼の姪ゑて此外ゑは親類なし迎への轎を遣して早く對面させんとて服心の手代を使として三四人の迎ひ人を尼か崎へ遣しけり去程ゑ阿蓮は萬を妙潮と談合しつゝ彼仕度金をもて衣服調度を求め調へ又武太郎が家具雜具を賣代なして其金をハ謝禮の爲に妙潮ゑ皆取せて浪花の便りを待程ゑ迎ひの轎來ゑけれハ其供人を慰勞て此日浪花へ赴くにぞ妙潮も差添て早本宅へ來にけれハ啓十郎ハ酒宴を設けて婚姻乃儀式宛から本妻に異あらず其夜ハ阿蓮と共ゑ臥床ゑ入て偖老同穴の契りを重ねゐり斯て其次の日ゑ啓十郎ハ阿蓮を本妻呉服と三個の妾どもに引合ハせて阿蓮を本妻の次ゑ居らせ妾部屋をも阿蓮が部屋ハ萬不足なくものせしかハ方野卓二茹藻等は心の裡に悦こハず各々妬く思もへども威勢爭そふへくもあらざれハ表向ばかり

睦まじげゑ恨みを隱ーて交りけりされハ又黒五郎ハ有馬の温泉ゑ湯治する事二三十日ゑ及びしゑ其身の難病此時ゑ平癒すべき命運ゑやゑりけん次第〳〵ゑ本腹して只其瘡の跡あるのみ面も肌も人並ゑ名殘あく癒たりければ悦ぶ事大方ならず浩をハ早く浪花へ行て彼西門屋の啓十郎と產の親子の名乘をせんさる時は一生涯左り團扇で安樂ゑ養はれん事勿論なり然なりとて頓く準備をきつゝ次乃日有馬の宿を出て殊更道を急ぎつゝ早く浪花に來ゑけれハ西門屋の居宅ゑ音信取次の者ゑ打向ひて我等ハ此家ゑ主個と い脫れ難き親類あり面談すべきよしわりて來つるよしを傳へ給へといふゑ件の取次人は心得がたく思へども云れし儘ゑ告ゑかハ啓十郎を不審ながら先客座敷に迎へ人さして頓て對面ずる折ゑ見をば去る日有馬ゑて同じ宿ゑありて湯治をきたる那野臥ゝ癩病あり其時啓十郎も思ふやう此奴は我取せたる金を早くも遣ひ果ゑて强談ゑ來つるあるべし見知ぬ面色ゑて吾等と親類あるよしを云れゑは和殿なるか吾等と些とも覺へあらず門違へゑばしんはすやと云せも果ず黒五郎ハ阿々と打笑ひて否喃さあ云給ひそ滿皿見知ぬ中てもあゑ尼が崎ゑて逢し折ゑ我も和主を骨肉の親類ありとは知らざりきゑ有馬

で湯治したる折見れば和主の臂よとつれ雪の形したる最大きなる一ッの痣あり是ぞ確
か親子の証據我は和主の實の親ありと許りいふて猶疑はゝ審かよ說示さん我い元山城
國大原の郷人にて篠部黑五郎と呼ぶ者あり其後ゆゑありて妻と一個子を携へて和泉
の堺へ移轉しつゝ九四郎と名を改めて商賣の爲よ西國へ赴きたる折瀨戸の築山の邊り
に埋め置たる貯金八百兩ありけるを用心の爲埋め置しよ我妻遲馬は知ずして土取に其
土を賣たる折に件の金を搔攫はれて行衛も知ねば是より困貧身よ迫りて妻の遲馬は果
敢なく世をさり六才といいへど年弱なり黑市和主を携へて誘ひ歩行し程は只天滿の
邊りに袖乞の僅かに其日を送る程よ吾子を貰いんといふ者あり親知ずの約束よて果敢
なや二歩と八百の手切金よて遣したる養の親の町處も名さへ定かに告ざるば逢瀨はあ
らざと思ひ絶て其錢金を資本よまつゝ小商賣でもせばやとて一個都へ赴きたるに憂で
や鄕病にて面影さへよ變り果て八交りのならざれば愈々乞食よありはてゝ此年來を過
せしよ又世よいづる時節到來有馬の湯にて病難本復剩さへ我子黑市此所在を知りて廻
り逢悅び何事かこよ增べき斯ても疑ひ解ずやと一伍一什の物語を啓十郎い實とせず打

聞ながら冷笑ひて怎は云るゝ事ながら吾親のありさ時吾身は貰ひ子あるよしを露バか
りも聞たる事なさ此身と當家根生の一個子誰とて知ぬ者いあらず臂よ痣ある者い廣き
浮世に幾等もあらん夫が証據よあるべきやと云せも果ず黑五郎い怒れる聲を揮立て分
口說ても無待心親を疑ふ不孝もの天罰思ひ知らせんと罵りあがら懷中よ隱し持たる出
刀庖丁を取出さ閃かしく啓十郎が左れ腕を二寸バかり斬たりける浩る折から次の間に
容子を窺ふ飛敎は叫嗟とバかり走り出て頻りよ狂ふ黑五郎を抱すくめ漸く宥めて啓十
郎よ密語やう日那は知て在さんが此黑五郎とかいふ人の兎よ角と云るゝも滿皿よなき
事でもあさ今更隱すよしもなし過去れし大旦那の何に付てもやぶさかなる貰ひ息子の
手切金二分で濟せと云れしくを自腹を切て八百文增せしは我等が當座の計らひ其折証
文の何處にか納めて有あらんと盲を黑五郎打聞て其証文を見るよも及バず親子分明あ
らざる時い互ひよ其血を合じて見るよ實の親子い其血潮必らず一ッよ寄あとあり親子
あらねバ一ッよ寄らずと往昔よりいふ世の言種極めて由緒ある事ならん將々と云つゝ
も出刀庖丁を取上て自ら腕を裂きて啓十郎が疵口より流るゝ血潮と其身の血潮と合し

て見るべ果まて遂はず磁器の衝をすふ如く血潮と血潮は凝つきて何れを分ずありしかべ啓十郎は今更に驚き思ふ親子の再會不測〳〵と詐りに又いふ由もあかりけり此時阿蓮は表の方よて物騒がしかりけるを若我上よあらゴやと思へべ胸の安からず拔足しつゝ出て來つ次の間に身を潜まきて一伍一什を立聞べ母の山樹ハ物語よて兼て聞しる黒五郎の事の頗未親子の名乘よ心晴よ驚きて啓十郎は我父方ハ從弟どちよて有けるよを曉るよつけて一方ならぬ妹背の緣なりけりと言に云れぬ此場ハ容子ゑ愈々耳を側てけり暫くして啓十郎ハ飛藏よ打向ひて已よ親子の証據顯はれ我疑ひ解たれどもさべとて今更よ我身の實の親ありとは家内の者にも知せ難く且親知らずよ貰はれたる養父の位牌へ義理立す凡そ初めよりの趣きを知たるは和殿のみなれべ扱ひを頼むのみと云つゝ側へよ招ぎ寄て私語こと半時ばかり談じ果て恭々しく黒五郎に打對ひて吾身幼き頃ハ事は何ごとも辨へ知らねど已よ血潮の證據あれべ今更よ爭ひ難かと然れども親知ずの約束よて貰はれたるよしれあべ親にして親ならぬ義理あるを如何はせんされば とく心强く御身を粗畧よせんとにいあらず委しき事は飛藏よ聞給ひねと押宥めて其身

ハ奥へ退きて飛藏をとて黒五郎よ盃を勸めさせ大方ならず欵待てさて金をもて手を切んとせしを黒五郎は承知せず猶六ヶ敷言寡りて事果べくもあらざりけり

第三編

斯て西門屋啓十郎は彼惡徒篠部黒五郎と親子の証據分明にて脫るゝ道のなかりしかども骨肉ありとて親を思ふ孝心は雷べかりも絶て是なき邪見の本性原來者り者の癖あをハ外聞惡しと思ふのみ手切金もて親子の緣を切あそよけれと思案をしつゝ年來抱への鳶頭飛藏よ心を得させて金よて面をはらんとしたれど黒五郎は得心せず生涯此處よ居しかりく身を老樂よ養ないれずば啓十郎が惡事の趣き彼阿蓮か事までも官廳へ訴へ申まて思ひしらせんと言よより啓十郎ハ驚き怕をて出しやる事を得ならず折柄飛藏が隣長家よ寶家ありと聞ゑしかば其家店を贖ひ求めて黒五郎を其處よ住ハせ月毎に金三兩を賄ひ料に送らんとて扱ばせたりけれべ黒五郎稍納得し件の家を住家としつゝ只酒を飲賭よ耽りて已が隨意日を送れば彼三兩ハ賄ひ金ハ半月よだも足むとて屢々本家よ赴きて强求とと乃多かれども啓十郎は今更に爭ひかねて二兩三兩其度々よ取せて不身災

禍となるぬべき彼が口を塞がせける○去程に啓十郎い思ひの儘に計ひて負せて鍛金の阿蓮を娶りし頃國らざりける親黒五郎の災禍の起りまに夫もら無異に治りければ頓て阿蓮を第一の妾にまつゝ寵愛して他處へも出ず有げるに諺に言ほしき物い隣の味噌にて我物あらぬ折ふあそ人目を忍びて逢事の樂みい八汐にましたれ己に手活の花になりてと趣き初めの如くにもあらそされべとて秋風の早く立べき中ならねども彼にも増たる婦女の世になかちずやと思ふ程に今年の冬の中旬にありぬ折から道頓堀なる歌舞伎俳優の顔見世狂言繁昌まて評判高く聞ゑまかべ例乃 悪友喜出の意菴祝屋念藏を伴ひて芝居見物に行たりけるに隣栽歟に一個の美人あり年の程い十八九あがりて二十にもやあるべからん物の言ざま野敬獻れて三十二相足ざる處なく玉をのべ金を束ねず造るとも及び難きと見ゑたるに連なる男い頁夫あるべし年の頃は二十二三にて醜男にいあらねども其妻の麗しきに競べて見れべ強く劣りて錦の表に擦ひ八丈の表を着たるに事ならずされども彼も富たる者にや茶屋の歓待大方あらず處席まで食物を幾度となく持來り啓十郎い初めより件乃美人に心迷ひて今日の眺めは是れなりけりと思へべ其日

の狂言は中々目に止らず意庵念藏等が袂を引て事の心を知せをべ意庵い早く其意を曉りて隣棧敷へ馴々しく屡物を言がけて女子の喜ぶ役者の評判何くれとなく語らふ程に啓十郎も其尾に付て這い憚りて侍れども持合せたれべとて美人の夫へ盃をさすを流石に辭みかねけん是より互ひに打解て各々茶屋より肴を取寄或い菓子を取寄て夫を勸めつ送られて隔もあらずなりしのど件の美人は啓十郎を只見返りて打笑のゑ未だ物をべ言ざりしに其日の芝居乃果まかべ茶屋が迎ひに慌しく暇乞せら言あへず別れ〳〵になりけり○斯て又啓十郎い此夜宿所に歸りても彼美人の事をのみ兎に角心に懸りしかべ次の日念藏を遣して彼が茶屋に問せしに今日初めての客なれべ名さへ定かに聞ざりき況て宿所い何所やらん知ずといふに詮方あけれべ是にて後も忘れ兼て密に意菴念藏等と謀をしつゝ慰めがたき今年を仇に暮しけり○斯て其次の年の春如月乃初めつかた例れ意菴念藏が慌しく來て告るやう未だ知せ給いずや昨日最珍しき散しの摺物を引來れり是見給へと云つゝも懐中より取出すを啓十郎請取て開きて見れべ大奉書に最麗しき花鳥乃畫を彩色摺にしたる其裏に一編の和文あり事の心を讀見るに我等近江の觀音

寺より近頃此地へ移轉したれど未だ親しき友もあし其友垣を結ばん爲め金彌會を興行す詩歌連俳琴棋書畫此他も遊藝淨瑠璃長唄踊り下曲の艶曲に至るまで世に一藝あるみやび男達どもに我家に來臨して各々藝を施し給はゝ是より交りを結ばんと欲す會日い二月十五日席を設けて待奉つる長堀の空花屋何某とありけるを啓す郎は冷笑ひて實に珍しき物好なり此空花屋は如何なる者ぞと問れて意菴は膝を進めてされば其事あれ此空花屋と聞ゑーは近江の觀音寺に隱れあき糠利名四郎といふ大盡の一個息子にて名は浮吉と呼るゝ者なり彼が父親名四郎い觀音寺にて一二を爭ふ大富家なるをそて觀音寺の城守佐々木殿の金銀の所用を承はり山吹色の光りをもて重き格式をさへ給いりて威勢肩を比ぶる者なきに然るに其子浮吉は今年二十の若者なるが佐々木殿の寵愛し給ふ瓶子とがいふ婦女を物の隙より垣間見て戀慕の思ひに堪ざりけん便りを求めて艶書をつけしに其事早く人に知れく無慚や浮名の立ちかば佐々木殿怒らせ給ひて速かに浮吉を搦め取て其罪を糺ずべしと仰せをを思慮深き役人諫めヤして今浮吉を罪ち給はゝ彼が親名四郎も上を恨を率りて必らず他處へ移り住べし然る時は誰か又軍用諸役の御

用金を調達仕る者候べき願ふい瓶子を浮吉に賜りて彼が妻になす事を得させ給はゝ彼身の喜びのみならず名四郎も又御恩を感じていよ〳〵出精仕らん是兩全の御計ひ是に增ることゝ言語を盡したりきりば佐々木殿良思ひ返して遂に其儀に任せられ頓て瓶子を浮吉が妻にせよとて給りけり去程に浮吉い闘らず瓶子を見染しより思ひに絶ず艶書をつけしにまだ一言の返事も聞ねず早く浮名を立られて如何ある祟りに遇もやすらん易き心もなかりきに誰か計らん彼瓶子を佐々木殿より賜りけゝば愁ひを返せし悦びば只是夢かと思ふのみ頓て祝言を取結びて日頃の望みを遂たるが親名四郎は思慮ある者にて倩々と思ふやう今般上の沒高恩は譬隱るゝ物なけれども怪夫婦を此處に置ては世の評判も後めたかりようあそあると思案をゑたる用意も已に調ひしかば或日浮吉を呼ていはやう其方に兼てより毋の姪にて都に居るお靜を嫁にせんと思ひて許嫁をしたれども上より妻を賜りければ辭みヤす事に得ならず瓶子を嫁にしたれども猶又思ふよしもあれば暫く浪華へ移り住て彼處にて活業せよ吾長堀に邸宅を求めて物不足なく調のへ置き如資本に一万兩今般殘らず渡たすべき世渡たりに油斷なく資本を失なひ

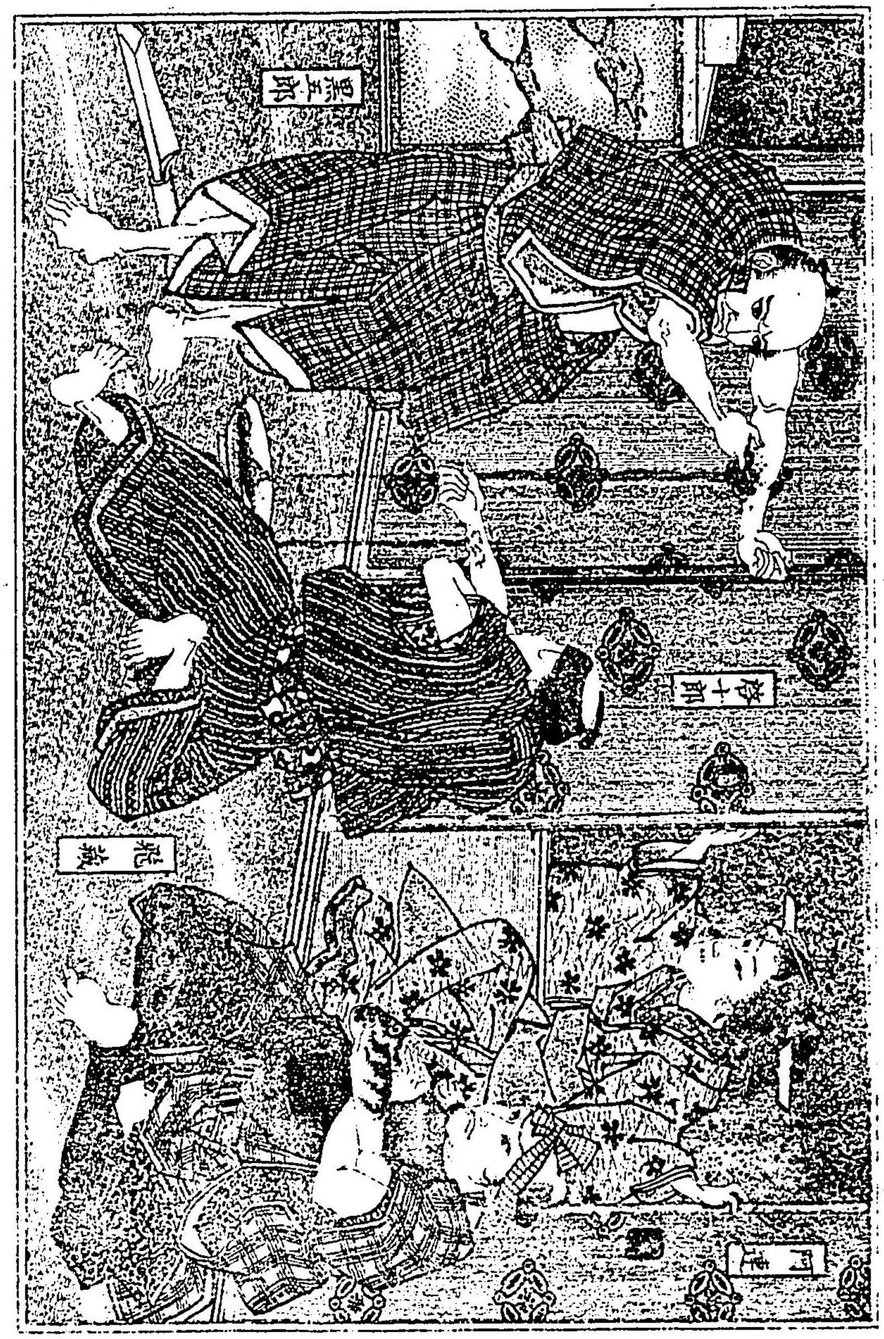
ぞと懇切に教訓してにい子の手代淨六といふ者と其他の手代下女小厠まで大方ならず諭し添て浮吉夫婦を長堀なる抱へ邸宅へ遣しやり是よりして浮吉は家名を空花屋と唱へつゝ一所の主人になりたれども富る家の一個兒なれば錢金を物とも思はず世渡る業に疎ければ近江より附られたる老管淨六が幾度とあぎ諫言は世にいふ空吹風にて昨日は芝居今日は花見と遊ぶに務めにしたりーが只名聞を好む癖あり當時名高き人々を一網に招き寄て早く交りを結ばんとて此會を催ふすよし能其由來を知りたる者の噂さよりて具さに聞ふき旦那何も慰みあと若此會に赴き給はゞ我々兩個附添行て這條〳〵に計いん此義は如何と勸むるに子啓十郎も笑壺にいり所白き我々が仕組て行ば其日乃坐頭曾主に膳を濟させん然らば兎せん斯し給へ〳〵牒合して此日より暗かに用意をしたりけり○去程に空花屋浮吉は去年の冬瓶子を携さへて道頓堀なる歌舞伎芝居を見に行きしをり隣り坐敷の若者は兩個三個幇間を伴なひ又達ものゝ役者等も狂言の際ある毎に件のさじきへ來ざるもなかりしを最浦山おく思もひしかば獨倩々思もふやうわれも又錢金に乏き〳〵もあらぬ身なれども馴染もあらぬこの浪華に未まだ輔助る友もあらず世に聞えたる人々と早く交際を結ぶ手術い金禰會を催ふすに如まとあらぬと思案をしつゝ次の年の春如月の初めより其會席の日を定めて最麗はしき摺物を殘る隈なく散せしかば此地の諸人是を見て這は珍しき會觸なり諸先生乃書畫會い只是錢を取んためにて摺物をせらるれども緣あき人には配る事あし是と彼とは事替りて錢取病の能書にあらず知も不知も押あべて只交際を結ばんために世に一藝ある人々を集へて馳走せんとあれば曾行べしと思へども藝なし猿の悲しさは盲立にせんよしもなしと囁くもあり喜ぶも多かり凡そ一藝ある者は其拙きをも見返らで行んと思ふも少なからず斯て其日にありしかば書畫詩歌連俳の類立花茶の湯に至るまでんそ一藝ある者は皆空花屋に集ひ來て姓名を通ぜ好みを結び各々藝を施したる其中に空花屋の老管淨六が知音に て尼が崎の浪人四九見櫂佐有實といふ若人あり和學漢學の達人にて其詩文章玉を連ねて確も手跡い俗あらず畫かゝ事にも拙からぬば今日の園居は大先生は此人ならで誰やとて皆耻かきく思ふにぞ其身の藝い施さで只有實が書を求め畫を求むる者のみありければ浮言も亦彼を敬ひ行末永く斷金の交りを結ばんとて歓待大方ならざりけり○浩

る處よ西門屋啓十郎は意庵念藏兩個と水木綱之助といふ歌舞伎の娘子を隨へて廬花屋へ尋ぬ來つ主個浮吉よ對面して某は此涙華にて僅少世の人よ知られたる西門屋啓十郎なり伴ひ來ぬるは朋友よて喜田意庵祝屋念藏と呼あす者あり又是なる少年は都より呼寄たる水木綱之助といふ娘子あり今日の御盛會よ鳴呼がましく候へども彼等が拙き遊藝を御笑ひよ供ん爲よ推參してあそ候なりといふに浮吉も悦びて挨拶しつゝ倩々と見れば此啓十郎は去年の冬芝居よて假初あがら酒酌かはせ去隣坐數の客なりければ是はく〳〵と斗りよ早其事を言出るよ啓十郎意庵念藏等も此折初めて彼美人の良夫い此の主個浮吉ありしを問でを去るき心の喜び譬ふるに物なかりしをさりぬさまよ欵待て先朋友等が拙き藝を御笑ひに供へんとて意庵は淨瑠理念藏は三絃よて綱之助がひとかあでの振ゆ妙なる二拍ゞ揃ひも揃ひし艶曲よ彼有實が席書の面白は忽ち蹴落されて皆此處へとぞりつゝ浮れて等去く響る聲皆しは鳴も止ざりしを有實と爪彈きして腹立しさよ暇も乞とず暗かに出く行よけり斯て此日も暮しかば諸人は押あべて家路をさして飯りしかども浮吉い啓十郎等を止て離席よく再び酒宴を催ほしければ客も主個も醉臥て其

夜の明るを知ざりけり然るよ水木綱之助は原身京八娘子なるが故ありて近き頃涙華へ來つゝ母と共よ親子兩個借家に居り猶又啓る事ありて歌舞伎の座へは出ざりしを意花が兼て知りたれば彼が母よ談合して月三兩よて身を雇ひ空花屋の金欄會よ伴ふて來よけるよ此の會主は彼美人の良夫あるを知りしより意花は早く綱之助に私語示せし巧計あり此故よ綱之助は其夜離席みて浮吉よ馴親しみ啓十郎等が眠り〳〵隙よ頻りに枕をすゝめしかば浮吉は醉に紛れて思はず契を結びけり斯て其曉八朝啓十郎等い別れを告て歸らんとしたる折此綱之助は某が小姓にせんと思ふをもて彼が身を償ひて召連たる者なれども老御心よ叶ひなば浮身よ參らせいたん止め置せ給へかしといふゝ浮吉悦びて然らば其身代は某償ひいばんといふを啓十郎聞あへず爭でかい其義よ及ばん斯交りを結びし上は千金なりとも惜むに足ず只此儘よ遣はせ給へと信實擬せし心よ一物意花念藏諸共よ別を告つ再會を契りて宿所へ歸りけり○されば又啓十郎い向よ見染ゑ美人瓶子の住家と知りたるのみ奇らず其夫浮吉と交りを結びしより程なく親しくなりけるども未だ件んの瓶子とい面てを合する便りを得ざればいよ〳〵胸を焦さつゝ例ば意

庵念藏と密談を凝し手術を運し爭で瓶子を手よ入んと思ふより外他事なきを知る人と
ていかりきよ獨阿蓮が立聞しつゝ譯い具に知らぬとも忍よからぬ談合なれば是より
兎よつけ角よつけく啓十郎を餘處へ出さず此故よ啓十郎は暫らく病氣と僞りて空花屋
へは意花念藏をのみ遣きて物を贈る事再々なりければ浮吉深く悅び感じて或日啓十郎
が病氣見舞よ初めて西門屋へ來よければ啓十郎對面して某此頃脚氣發りて歩行不自由
なるよより思はず疎遠よ打過きに自ら來臨ゑ給ひしい喜び是よ增ものおしと盃をす
ゝめ歡待て酒半醉よ及びし折本妻呉服を始めとして阿蓮卓二力野刈藻あんと四人の妾
どもを呼出して都て浮吉よ引合せ醉たるふりして云けるやう見給ふ如く某い本妻の外
四五人の召使ひあれと雖も未だ忍よ飽足ず御身も必らず幾個乃妾たちの有なるべし世
よ錢金の不足なき者の妻一個を守りて寡さい富と雖も貧しきよ同玄男に生れき甲斐も
あらずさは覺さずやと窘めて傍若無人よ誘りしかば浮吉と此爲体よ耻て答へんよしも
あく最口惜く思ひけり○斯て其次の日よ又意花念藏が空花屋へ來よければ浮吉と昨日
西門屋にて主個啓十郎よ言れたる事の趣むきを言出てゝ吾も又麗しき女を多く召抱へ

て先途乃耻辱を淨むべきを願ふい御身等吾爲に媒介して善妾を求め得さして給ひぬかき
と賴めば意庵念藏い兼て巧みき懸罠よ早入たりと思ふ悅びを色よは出さず點頭て詞等
しく答ふるやう宣ふ趣き理りありなれとそ都は應仁以來數度ぬ戰ひに荒しかば彼所よ
は麗しき妾奉公人いなし今は周防の山口おそ西の都と世よ稱へて傾城町わり藝妓も多
かゞ旦那彼處へ赴き給とゝ我々兩個ゐ俱して思ひぬ儘ある上婦人を撰み取に取せ任さ
ん此義よつかせ給へかし懇く言ていなけれども西門屋の啓印は其身の富豪よ誘るのみ
兎にも角にも狡猾しふて旦那の如く温和にあらず此故に我々い牛に馬を乘替たる主の
爲よは唐きても御供は厭はしからず疾々思ひ立給ひぬと手よ取如き敎唆せば專浮氣の
浮吉い此口車よ乘られて喜ぶ事大方ならず然らば老管淨六等よは唐物を仕入のため周
防の山口へ赴くと云拵へ四五千兩携へて舩路よりして彼處よ到らん願むは御身兩人
のを約束を違へ給ふおといふよ意庵念藏も其旅立の日を問合せ一日早くと忙しく暇乞
して出て行く○去程よ意花念藏は空花屋にて談合よ日を暮きて其夜九ッ過る頃宿所を
さして歸る折から街の物の隱れより現はれ出たる二個の曲者問てもしるき追剥しの打



扮さへよ不畏き眼動頭巾よ面を隠まて腰よさ志たる剛刀を左右等しく引抜て跡先より引爽とやをれ木兎入一文野郎命惜くバ身の衣類を殘らず脱て疾々渡せと言れて駭く意花念藏齒の根もあはぬ壁揮はして嗚呼是ぬしたち逸り給ふな見らるゝ如く我々は此べんべらゝ身よ纏へど七ッ下りの黒羽二重乞食仕立乃下着のみ一分と價打物はあしやよ見逃して給ひねと云せも果ず二個の盜賊眼を怒らし聲焦燥て此期よ及んで分説きかんや脱ずバ斯して脱すぞと左右等しく揮上る刃に恐るゝ意花念藏爭ひかねて諸共よ身ぐるみ脱て身震ひしつゝ襦袢バかりと赦してよと詫るを聞ぬ盜賊等は鼻紙袋よ小脇差手拭びまでも奪ひ取さて一個の賊の言やう這奴等ゝ野暮間よて人の褌で相撲をとる口最惡き者どもなれバ今宵の事を諸人よ告なバ遂よ我々が身の災禍よありぬべし殺まて仕舞バ後腹やめずさと思はずや如何ぞやと問はれて點頭一個の盜賊賞よ言るれバ其理あり追片付んと又揮上る刃よ意花念藏は魂ひ再び身よ添ず脱れ刀の下よ立かゝる折よも邪智逞しく惡弾逸ある意花が頓策我身替りよ遣ふべき者こそわれと胸巧み分別早く定まりけれバ些とも騒ず盜賊等よ打向ひ跪きて主たちさりとは鬼ひ深し我々が斯剝れも

を手柄らしく人よ語らば損せ志上にこよなき恥なる命を助けて給らば其報ひよは四五千兩乃仕事を手引仕つらん此談合よのり給はずやといふよ点頭兩個の盗賊开は滿血でもあき事あがら結構過て賢しからず其譯きかん如何ぞやと問ば意庵は聲を噤めて主たちハまだ知ざるか長堀あるる空花屋浮吉と申しは近江に名だゝる富豪の子なり色よき妾を娶らんとて四五千兩の金を乘て船路より周防ある山口へ旅立の其日も已よ定りぬ楽内の爲我々兩個附從ふて行なれば主たち後を付て彼山口よ程近き湊よて脅かし金を奪ひ取給へ夫より別に我々は外して陸よて主等を待ん勿論金は山割よして半分渡志給ひなば一生勒ハ世まで人よは告ず譯を知たる者とては我々兩個のミなれば後々までも世の人よ知らる憂遊ひ些ともなし此談合は旨からずやと毒氣を吹込秘密の魂膽命惜さの出來心身ハ損代よ盗賊の仲間入もる惡巧みを傍へ聞する念藏も命よ換る者あ志と思へば俱よ節を合せる密談細かなりければ兩人の盗賊喜ひて今いふ由よ偽りあくば山分は承知なり奪ひ取たる其次の夜よ彼湊にて出逢ん汝等も仲間よ入たれば今更隱すべきよあらず我々は白波駝太郎緑野早四郎と呼はるゝ者なり夜稼ぎこそすれ約束を違へたる

事はなし汝等當座を脱れんために無事いい〻暗討よまして其折思ひ知るべし能せよかしと期を推て剝取たる衣類を殘らず兩個に投返まして行衛も知らぬありよけりされば意庵念藏は手早く着物を取上て砂打拂ひ帶引結ひ大息吐つゝ顔見合せて命換りと思ひまより切な細工も物怪の僥倖那駝太郎とやら早四郎とやらが約束を逆へずまして其次の日よ山分の金を我等よ渡しなば千兩つゝとメ子共兎角間世渡りせずとても一生涯い安樂なり此事秘ずべしと私語あふたる相談は諺よい曰小田原提灯導ぬて取上ても明に消て身は暗き慾よ不欲の胸巧を宿所をさして急ぎけり○斯て意菴念藏い次の日西門屋へ趣きて啓十郎よ浮吉が旅立の事の赴き教唆またる事のよまを這樣〳〵と告たれども彼盜賊よ剝れたる惡巧みをヲ深く隱して云ざりけりされば又啓十郎は意菴念藏等が働きよて浮吉を遥々と周防へ行する事のよまを聞悅びよ堪ざれば小判十兩を取出まして意菴念藏よ之を取せて猶此後の計事を暗よ談合したりける去程よ浮吉は意菴念藏等に教唆されて早く周防へ赴きて世よ麗まき婦女を多く抱へ來て啓十郎よ誇らんと思へば心急がれて老管淨六には唐物を仕入の爲よ自ら周防の山口へ赴く由よ云拵へて淨六が諫めてと〻

むるを些とも聞ず旅立の用意の外よ他事をあく船出の日さへ早く定めて翌首途と聞えまかば啓十郎は仕濟したりと思ふ心を色にも出さず三種四種の餞けを齎まして空花屋へ赴き是を浮吉よ贈りていふやう今般の御首途に何ヲ御役よ立べき品を參らせんとい思ひしかどもさりとて思ひ付たる物なし彼水木網之助が某向よ身を償ひて自由よ任する者なれば此品々よ差添て彼女も餞けよ參らすべし長き旅路に從へて船の内の徒然を慰め給へと懇ろなる人の情よ浮吉い喜ぶ事大方ならず互ひの挨拶事をいり與座敷へ伴ひて先盃をすゝめつゝ心の内よ思ふ樣向よ我西門屋へ行し折啓十郎は本妻と四五人の妾をも呼出して對面させしよ今此折よ及びてを瓶子を識る人よせずもあらば胸狹しと笑はれん我よは未だ婦女の只一個もなけれども斗い周防よて撰み抱へて立回り來て後にこそ見せめよしや妻只一個ありとも標致は彼が幾個の本妻妾に劣らんやと思案をまつゝ與よ至りて面を瓶子よ私語示まして座しきよ伴ひ來て啓十郎に引合して留守の事さへ頼むよヲ啓十郎は既に早望み協ひし心地して躍く胸を押鎮め再び爰よ對面の喜ひと浮吉が旅立の祝きを演ていふ樣向に計らず芝居よて御目に掛りしい假初にて何所

の人とも知ざりしに御線藍せず不測の再會御主人さまと斯まで交りを結びし上は兄弟よ殆思ひあり然るとも女主の御留守よは憚りあきよあらず我身い疎遠よ過るとも女子共を參らせて御徒然を慰めやさんは不自由なる事もあらば何事なりとも承らん心隈なく仰せよといふに瓶子も喜びを演盃をすゝむるれみ流石に詞少なにて頓て奥よりて入よける○斯て空花屋浮吉は旅立の用意調ひければ譜代の老管淨六と一兩人れ手代を留守居に殘し置其身い空七といふ一人の手代と荷持の奴僕兩人を供に從へ又案内の爲にとて彼意庵念藏と網之助さへ引連て已よ宿所を出る程に仕入金と偽りて金五千兩を荷造らせ此餘も衣類手道具なんどい乏しからず船よ運ばせ最大きなる海船一艘を雇ひさりよして一人を乘組の旅客を免さず已よして其曉の朝船場をさして立出れば淨六並びよ近きあたりの里人も見送る者多かり去程よ啓十郎も最早く船場まで來つゝ茶店よ待て居り彼是頓て打集ひて用意ハ割籠を開きつゝ暫時留別の盃を廻らず程に追風よしとて船子等が催促頻りなりければ浮吉い諸人よ暇乞して忙しく意庵念藏網之助等と諸共よ船よ乘ーかゞ空七も荷持等も續きて船よ主從七人頃は如月の末つかた空猶寒き朝

風よ押上る真帆引きーく西をさしてぞ走らせける○斯て日毎に日和よく追風さへ打續きまかゞ浮吉等の乘たる船は僅や障る事もなく海上の日數僅よして周防乃國山口なる鴻の峯の城よ程近き港へぞ着よけり其時意菴念藏と共よ浮吉に對いていふ樣我々い其昔此山口の鴻の峯にも暫く仕馴去者あれば旅宿の善き悪きも又貸座敷のある處も悉く能知たり御身い船にて待給へ我々兩個城下よ至りて宜貸坐敷を見立問て遲くば翌の朝飯り來つべし其折彼處へ趣き給はゝ萬よ便りよるべしといふよ浮吉點頭て开い能心付れたり兎も角も宜らん樣よ取斗ひて給ひねと賴めば意菴念藏い心得顔に船より出て城下さまて急ぎけり○斯て其日も暮しかば浮吉と意菴等を待つゝ今宵も船よ居り斯く其夜も浪靜にて人皆眠りし丑滿頃小船よ乘來る海賊あり同類僅か兩三個眼動頭巾よ面を包みて港よ繫りし上吉が船よ釣繩を打かけて早乘移る足音よ驚き覺る空七よ荷持等這は何者と云せも果す揮閃かす海賊等が氷の刃に苦と叫べば艫に臥たる船人等も驚き怕れて頭を擡げず其時件の海賊等い腰より繩をたぐり出して上吉が供人と船人さへよ一個も漏さず皆船柱よ縛り付たる勢ひよ獅子の暴たる如く面を向んよーもおければ

皆々頭を打低く念佛の外なかりけり浩りし程よ上吉は今宵も網之介と枕を並べて客乃間よ臥またりまよ思ひがけなく海賊よ供人舩八一個も殘らず縛しめられまを見てまより魂しひ更に身よ添ず慄き慌てる網之介を小舩よ圍ひ身を縮まして赦ま給へと叫ひし海賊等ハ冷笑ひて汝等驚き騒くべからず船に乘て持て來ぬる金の高まで能知たり命惜くバ五千兩 此所へ出まて疾々渡せ否といハゝ片端より芋刺よまて水屑とあさん疾々出せと左右より俱に刀の尖先を突付〳〵責たりけれバ上吉辭む事を得ず寶よ其金ハ三ッ四ッのあけ荷の中よ入てあり御苦勞ながら沒頼を予す皆斬解て持て行給へといふよ點頭兩個此海賊手よ〳〵あけ荷を引出して奪ひ取たる五箱の金を小舩へ取入て大吉和市とさゞめきつゝ早同類ハ艫をおさせ行あと白浪となりよけり○斯て其次の日に意庵念藏兩個と城下より歸ると來よけれバ浮吉は昨夜海賊よ五箱の金を殘りあく奪ひ取れし事乃趣き這樣〳〵と告知するを意庵等ハ打聞つゝ开ハ彼駝太郎早四郎か所爲あるべしと猜するとみ聞よ打驚きたる面色まて俱よ頭を病したる談合果まもなかりけり暫くして意菴念藏がいふやう此所にて物を思はんより先旅宿へ赴き給へ宜貸座敷を求め置

たり彼處よ到りて談合の又詮方もあるべきよと慰められて上吉ハ其義よ任せ船より出て設けの宿よ赴きまが持て來まを金を失ひたれバ此處にありても何をかすべき空七と荷持一個を又船よ乘せ浪花へ遣し淨六よよしを告て再ひ金を取寄んとて手形を齎まて空七等を浪花へ返し遣まけり浩りけれ共うは吉は路用並びよ小遣ひの爲にとて懷中よ入て持て來たる金七八千兩ありけれバ今更路頭よ伸吟よもあらず是を遣ひ果す頃よハ又浪花より取寄る金は必ず來ざらんやとて日毎に出て山口の街を見物したりけり○去程よ森菴念藏は去る頃浪花にて盜賊駝太郎早四郎と約束またる事あれバ奪ひ取せし彼金を山分よなす時ハ二箱半の所得あり智閑よして時を過さバ寶の山よ入ながら手を空しくする後悔あらんと密談しつゝ其次の日に事よ假托夕暮より件の港へ赴きて小夜更るまで兩個の賊の出て來ぬるを那處此處と待も尋ねもまたれども夫かと思ふ影もあらず若やと思ひて二夜三夜同じ港を殘る隈なく尋ね巡りたりけれども如何して出て來べき逐よ便を得ざりしかハ諺にいふ犬骨折て鷹よ取せまを身の愚さを咳き合のみ又更よ行衛を尋ねんよしもおし腹立しさは限りあけれど人よ告べき事あらねバ只彼折の命代りと

思ひ絶ても忘れがたさに浮ぬ心を茶碗酒只鼻唄に紛かして味氣なき日を送りけり○去程に上吉は意菴念藏を伴ひて鴻八峰此町々なる神社佛閣各所舊跡を見物のため出歩行しに實に此地の繁昌は京浪花にも立勝りて街を九條に開きたり此故に人押なべて西の都と言なるべき其六條に傾城町ありされば爰をも六條の廓とは呼なしたり斯て或日上吉は又意菴念藏と諧俱に六條の廓に至りて廓の景況を見物せしに壮麗一き傾城等が花よも勝る玉をも欺く打扮の妙なるに糸竹の調べ耳にそちて實に慾界の仙境なりきと思へば忽ち心迷ひ魂ひ浮れて歸る事を忘れ此夜い廛屋の糸柳といふ廓第一の全盛なる太夫を揚て遊びーに其面白さ得もいいれず只偽りを旨として客を蕩かす遊びの手管に遂乗らるゝ上吉は夜毎に通ひ來て路用の嵩る事を思はず已にして七八千兩の金を遣ひて果したれども浪花より又便りもあらず然りとて今更に思ひ止まるよしのけなれば先當分の凌ぎにとて浪華より持て來たる衣裝手道具あんどをば意菴念藏に計はせて賣もしつ典物にも置せて猶廓遊ひをなすより其金も又疑たりければ今は早家宝代なる正宗の脇差のみ暫く是を質にいれなば其内には浪花より必ず金をよこすべきとて又意菴念

藏に談合をして持せやりしに質にてい金多からず此地に來て居る旅客に買んといふ者ありとか聞きよりて其媒介人を頼みて五十兩に賣たりとて件の金を持て來つゝよーを告て渡すにそ浮吉は呆れ果て世れ諺にいふ如く寶は身乃さし替あれども五十兩といふ餘りに安しと思へども此外にすべきよしのなければ打呟くのみ云甲斐なしされば意庵念藏は向にも浮吉が衣裝手道具を價ひよく賣ーかど半ば押隱して浮吉に渡さず又正宗の脇差も價百兩に賣たれども五十兩ありと偽りて又半金をくすねけり其時意庵念藏い或日暗に談合するやう彼二千五百兩の儲け口に兩個の盗衆にだー抜れて鉦一文にもあらざれば其後衣裝手道具なんどで些の儲けはありと雖も所詮又浪花より金を送ぬべくもあらず這樣〳〵に誑りて又儲けあば言拵へて我々兩個は浪花へ飯らん若浮々と此處に居らば諸俱に飢に望みて身の禍ひにありぬべしとて計較已に定りければ其後浮吉に進めていい脇樣儘か四十か五十の金によて夜毎に廓へ通ひ給いゝ忽ちに代盡て詮方もあくあり給はんよりて思ふに彼君を身請の談合に增ことなし其身の代は幾白兩でも只今手打金百兩を親方に渡して代呂物を引取さて浪花より來る金をもて其殘金を渡し

給ハヽ万に便りよかるべし偖身の代の内金よと網之助を賣給ひ彼と西門屋より餞多よ贈られたる者なをバ賣ても障り有べからず此義よ任せ給はずやと詞巧みよ進めしを浮吉聞つヽ打案じてされバとて網之助を賣んハ賊よ不愍の事よて西門屋へも彼が母親よも聞へあバ何とか言ん此義計りハ隨ひがたしと辞むを兩個ハ押返さて夫も又只暫しの程よて涙花より金の來ぬる折買戻すと最易かり我等に任し給へぬと屢々進めて獄頭かせ偖網之助にを這樣〳〵と身賣の事を告知それバ網之助は聞敢ず強く嵯き打泣て开ば思ひかけなき事なり我身は親を養はんため月三兩の約束よて西門屋へ雇とをふを再び此處へ倶せられて浮吉ぬしに仕ふれとも身を賣るヽ科はなし其義ハ決して隨ひ難ゑと固辞を意庵念藏ハ穏々よ嫌し拵へ一且其身を賣るヽとも涙花より金たよ來ば買戻されん事遠かるべからず今更辞む事かはと只管よ勸むる折から縁談なんどの媒介して世渡りよすなる阿世話といふ口入老婆一丁の駕籠をつらせて網之助の迎ひに來つヽ意庵念藏を呼出して事云々と告しかバ意庵念藏ハ浮吉よよしを告證文を認め是を阿世話老婆よ渡して身の代八十兩を請取しを又三十兩押隱して五十兩なりと偽り網之助が行じとく泣をわりあく引立て件の駕籠よ打乗をバ兩個の駕丁合肩いれて行よ引添お世話婆も飛が如き走よ馳さりゝり○斯て又意庵念藏は糸柳を迎へ取んとて浮吉よ由を告金百兩を請取て共よ廓へ赴き去が开も如何よ育拵へけん糸柳を駕籠よのせ遣手若者さへ附添て送りて旅宿よ連く來にけり浮吉は些酌りよ男色を好まねどもされバとて糸柳が身の代は才覺よ彼を賣こと本意ならねバ心よからず思ひ去よ意庵念藏が働きよて糸柳が身請け金を五百兩と定め僅よ百兩渡せ去に早く伴ひ來よけれバ其悦び大方からず是より宿よ籠り居て折々糸柳に三絃を彈せ酒打飲て偵よ永き日を面白く浮々として送りけり

○第四編

されバ又空花屋浮吉は糸柳を身請け内金其日百兩は正宗の脇差と水木網之助を賣たるとは彼五十兩宛なれを已よして其金を意庵念藏よ齎して靡屋へ遣去たれバ殘れる金ハ些ともなし如何にすべきと思ひかねつヽ猶も賣べき物もやあるとて空葛籠あけ荷なんどを開ひて尋ね求むるに思ひがけなき皮胴乱よ紙よ包みし小粒あり不審くも又嬉しさよ押披きて數へ見るよ其金九兩二分ありけり賣よ古川に水絶ずといふ世の諺も故あり

けり何時乃程から此胴亂に此金をゞ入置けん是だよあれば當分小遣ひよは事足るべし
と喜びて廓より糸柳を送り來ぬ遣手若者よ祝義を取せ俄よ酒肴を調へて人よも進め已
れも打飲て乏しからず物せまかゞ來ぬる廓の者共は多く得難き大盡になりきと稱へて
俱よ壽を演て六條に皈りけり○斯て其次乃日よ喜田意菴念藏ハ浮吉よ密語やう向よ
空七等を浪花へ返し給ひしより已に日頃を經たをども今日までも彼處よりそよと乃風
の便りもなきは淨六が疑ひて此處へは金をれこさぬおらん所詮覺束おき便りを待んよ
り我々兩個浪花へ皈りて淨六よよをを告兎も角も言拵へて早く金をおこさゞべしさて
も老官がしぶかりて事乃調はずゞ西門屋へ賊難の趣きを密語告て啓十郎よ五六百兩の
金を借て持て來るべし身請の金だよ調ひおば彼跡金四百兩を靡屋へ遣ーて糸柳どのを
伴ふて其折浪花へ歸り給へ西門屋ハ御身の爲よ年久おき友おらねども利を取て貸金な
るよ証文だよ渡し給ハゝ些とも障りあるべからず我々浪花へ赴かば二ッに一ッ金調へ
て遠からず又歸り來つべし此儘よ日を送ゞ給はゝ愈々路用の才覺つきて人の物哭ひに
なり給はん萬一の爲なれゞ西門屋へ握ちする借用証文一通を我等預りく持て行べし此

頃より枕を碎て我々談合したりしよ是より外に詮方なし早く此義よ付給ハずは後悔そ
およ立難しと百巧みに解すゝひるを浮吉聞つゝ點頭て开は能心付れたれ淨六が何とい
ふとも我身浪華へ歸りなゞ金の出おを入自由なり只失ゞでの凌ぎおれば面目のおき事お
から啓十郎よ五百兩の借用証文を書て渡さん兎よも角にも宜らんやうよ取計ひく吉
左右を早く知せて給ひねと回答をしつゝ忙しく硯引寄一通の証文を書認め印形を押て
渡そよ意菴は是を請取て念藏と共にいふやう既よ了せし譯なれゞ我々ば一日を早く
浪花へ赴くべし翌朝未明よ發足して駕籠を急ぐよ如おといふよ浮吉は其義に任して懷
中なる紙入より小判三枚取出しく件乃兩個よ取せくいふ樣知らるゝ如き懷中なれば切
ては路用の助けよと思ふ許の寸志なり最恥かおき事にこそといふを意菴と念藏は聞を
得果ず請戴きて浩る折から此路用は千金よおす御悪み何條多少を論ずべき翌の出船に
便船して乘走らせおゞ此三兩にて往復よ事足べおと最忝けなくいと悦ひを演用意をお
つゝ其曉の朝打連立て旅宿を出て葦が散る浪華へとてぞ急ぎける現よ悪徒の邪智深き
ハ計り知られぬ事多かりされゞ意菴念藏ハ山口の宿を立出たる其日路よて談合するや

う彼五千兩の山分は空だのめゝ成たれども些の儲けあきゝあらず先正宗ハ脇差ゝて五十兩又綱之助を賣せたる彼が身の代ゝて三十兩又糸柳が身ハ代の内金と云拵へたる彼百兩ハ内ゝて七十兩是彼合せて百五十兩丹を兩個ゝ分たれば己ゝして一人前と十五兩の働き代あり夫より向ゝ浮印ゝ進めて衣服手道具あんどを賣せたる度毎に二分三分宛ハ儲けありけれバ我も和殿も懐中ゝ百兩餘りの福の神ありよしや今日より路を急ぎて浪花へ歸り付たれバとて如何ゝして淨六が些の金も渡ずべき却つて那奴ゝ恨みられて元根ゝし難き事もあるべしさをバとて啓印ゝ此証文を見せるとも五百兩といふ大金を我々兩個ゝ渡さんや是も又無益の業なり浩れバ暫く浪華へ歸らで浮印の成行をよく見定めて其折ゝ此証文を西門屋ゝ見せて内緒を吹込て貸金出入ゝかバりなバ貸ぬ金でも借ずとは些とも云さぬ証文あり又五百兩丹ゝ入ば西門屋をも一口のせて三ツゝ分ても百五六十兩また〳〵儲かる樂みあり先嚴嶋へ參詣して歸りは金比羅白峯なんど打巡るのゝ能折なり急くバ要あき事ありけりと再び計較秘密の魂膽頃ゝ卯月の中旬なれば空暖かき旅衣一ッゝ脱て風呂敷ゝ包みて脊負兩個つれ慰み詣の嚴嶋安藝ノ方へ立きけ

る○兩頭話說爰に又西門屋啓十郎は向ゝ意菴念藏等ゝ謀合せて浮吉を教唆させて遠く周防の山口へ旅立せたり其日より爭て瓶子ゝ馴親しみて思ふ心を打つけゝ知する便あれかしと頻に胸を苦めしが漸くゝ思ひ起せー計事を得たりとかば先尼が崎へ人を遣して尼の妙潮を呼寄て暫く居宅に止めれき人なき折を窺ふて浮吉が串瓶子が事心の秘密を密語示まて此戀の媒介にゝ御身の外ゝ頼むべき者なし猶我家ゝ逗留志て這樣〳〵ゝ計ひ給へと言ゝ妙潮點頭て汗は六ケしき媒介ながら昔よりしてさる筋をやり損なふたる事はあし然らバ兎せん斯ー給へといふゝ啓十郎喜びて事成どきは骨折代ハ何まれ彼まれ望みゝ任せん能ゝ給へと密語たる密談頃ゝ調ひ志を知者絶てあかりけり○去程ゝ妙潮ゝ啓十郎が用意をしたる干菓子蒸菓子なんどを折詰二ッバかり齎志つゝ空花屋へ赴きて啓十郎が本妻呉服ハ使なりと詐りて瓶子ゝ對面を請しかバ瓶子ハ是を打聞て最不審しく思へどもうちも置べき事ならねバ與座敷へ呼入て對面志つゝよゝ志を問に妙潮答へて妾ことは西門屋ゝ族縁あり此年頃尼が崎なる草ノ庵ゝ住侍れども折々此地ゝ來ぬる折ゝは西門屋へ逗留して所用を果し侍るなる法名ハ妙潮と呼るゝ比丘尼ゝ

侍るかし偖も此程此家なる旦那は御活業の爲遙々と周防へ赴き給ひまとか御留守の徒然なる嘸な淋しく坐するならんと啓十郎も旦暮よ御噂をし侍れども女主の留守居の宿を問奉まつるい後護かりされバとて浮吉主とと向よ友垣を結びしより兄弟にも異あらぬよ疎遠よ過んは本意よあらず男を使ひに遣しなば瓶子どのも遠慮あるべし御身彼處へ赴きて是等の由を告給ひねと他事なく頼まれ侍りまかバ尼法師よい相憑からぬ彼處乃使よ立侍り這は珍きからぬものよは侍れど西門屋の本妻呉服どのか參らせよとて齋志侍りと言つゝ件の折詰を恭々しく先出せバ瓶子と喜び受頂きて這い思ひがけもなき彼御夫婦の御深切きとよ心を用ひられたる御使といひ賜といひ最有難く侍るかし既よ知らせ給ふ如く良夫の旅の留守の宿よは盲がたきも侍らねバ打くつろぎて語ひ給へと止めて頓て茶を進め菓子を進めて欵待たり○是よりして妙潮は日毎よ空花屋へ赴きて或は呉服の使ゝ詐り或い其身の所用よ假托物を贈る事も屢々あるゆ原來談話上手よて世乃中の事何かれとなく長物語よ日を暮して最懇ごろよ慰めけれバ瓶子は興ある事よ思ひて歸さの遲くなる折とわりなくも宿處よ止めて一ッ臥床よ枕らを並べ小夜更るまで打語らせて共よ目暁天もあり又或時は妙潮よ酒を進め對手よなりて其身も深く酔たる日もあり斯何時となく親みて迭よ思ふ胸の内を語りもしつ語はせて世に隔なくありよけり斯て又妙潮は或日一樽の銘酒と重詰の肴さへ齋ゝ來て是を瓶子に贈りて云やう此頃い幾度かゆ欵待に逢侍りしよ僧侶の事にしあれバ浮報ひをせんよしもなき這い僅少よ侍れども妾が土產よ侍るあり折柄の浮氣晴しよ用ひさせ給ひねといふよ瓶子は辭をかねて歡びをのべ妙潮を止めて其夜件の酒肴を開きて兩個さし向ひ献つ酬つ小夜更るまで最面白く語ふほどよ妙潮は啓十郎が噂をひたと言出て彼人は好色にて四五人の妾ありと雖もされバとて本妻を些とも粗略にし給ハず夫婦中の睦きは萬浮氣よあらずして心よ臓あれバあらん又浮身の旦那浮吉ぬしの浮噂も聞知り侍りぬ最いひ難く憚りあれども啓十郎ぬしよい品變りて斯麁きき浮内室を巣守の鳥よなし給ひて網之助とかいふ娘子よ現を抜かして剩さへ世よ勝れたる妾を撰ミ抱えんとて餘多の金を船よ積ミて周防の國の果まで遥々と赴き給ひ忘他心餘所よ聞だよ腹立きさよ浮身はさしも思ひ給ハで最をとなしく留守し給ふは世に珍しき貞女よあそと云れて瓶子は紅ある

顔よ紅葉は酒の咎そが儘醉よ紛らして云るゝ如く我夫は萬浮氣で頼母しからず水臭さあと多かれども我身よは親兄弟の一個もわらねバ歸るべき鄉さへなきを如何はせん心を察し給ひはかしと言を妙潮慰めて主の浮氣は是非もなし汚身の貞心悼えければ翌貸參らする物侍り所は邯鄲の枕と号けたる世に二つとなき寶あり若戀しきと思ふ人ある女子共枕をえて寐る時は荒夜の夢よ戀しき人よ逢て無量の樂みあり向よ故ありて都人の我庵へ納められ妾暗かに試し見たるに實に不測の枕よて些とも違ひ侍らずかえと言に瓶子い打笑て所い奇妙なる枕にこそと答へはもれど疑ひて猶實とはせざりけゞ斯て曉の朝早く妙潮は別れを告て忙しく飯ゞ去えが又其日の黄昏に件の枕を撰へ來て所を瓶子よ見せていふやう昨夜咄しゞたる邯鄲八枕は即ち是なり今宵はゆ身此枕をえて旦那よ逢て夢の内に樂み給へ空言よゝ侍らずかえと密語バ瓶子は顔を赤うして回答は得せず其枕を見るよ實よ麗しく硝子よて造りたるが中よ男女兩個あり枕を並べし容体の透明りて見えよけり瓶子は夫を能も見ず元の如くに箱よ納めて心此内よ思ふやう云るゝ如く此枕よ奇特あるや無やい知らぬども浩る物さへ貸れしよ昨日うけたる酒肴の

の報ひを社すべけれとて今宵も亦妙潮よ盃をずゝめて欵待り去程よ妙潮は醉たる体ふ紛えて其身の若かりし時の色狂ひ初め鎌倉にありける程密夫さへよ物したる不義密通を耻をせず懺悔ばなえよ假托て猥りがはしき事までも忍びやかよ說示せバ瓶子も醉たる上あれバ最興ありさと聞聲て枕淋しき留守の宿男戀しゞ思ひつゝ頻りに重ぬる盃の數も覺えず醉よけり斯て其夜の深しかバ何もの如く妙潮を止めて俱よ寢るをり妙潮は件の枕を忘れ給ふなと取出さして今宵は夢よ汚夫婦兩個絶て久しき添ぶしのさあそ樂み給いめと打戲れつゝ一つ座敷の臥床へ頓て入しかバ瓶子い獨り邯鄲の枕引寄夜着打被ぎて我にもあらず醉臥タり既よして妙潮い瓶子が醉て睡りたる寢息を篤ど親ひて忍びやかよ起出つゝ宵より早く引入て行燈部屋に忍バせ置たる啓十郎が手を取て瓶子の臥床へ案内をしつゝ獨り被ぎし夜着を揭げて其懷へ入れども瓶子は今宵常よもまえて醉て臥たる事あれバ久しくなるまて知らざゞけり斯て瓶子は丑滿ごろよ醉も眠も僅に覺て見れバ不潮や身は男よ抱かれて有けるよ燈火の影幽よて迷ひは深き夢心我夫なりさと思ふのみ日頃乃恨みも云あへず愛てや枕をかはしけり既よして事果しをり瓶

子は初めて心付て能く見れば臥たる男は其身の夫浮吉あらで啓十郎よてありけるば遁
开も如何にと驚き狼狽て起んとせしを啓十郎は些とも放さず引止めて驚き給ふな今更
よ逃るとも匿るゝとも元の白地になるべきや抑も去年の冬の頃初めて芝居で逢し日よ
り千萬無量の心を竭きて本意を遂しは夢あらで宿世よ結びし妹脊の奇縁これ仮初の事
あらず不義い承知の小夜衣重ねし妻を結びし上は命も絶て惜からずやよ喃々と掻口説
ば瓶子は我を怪しむまでよ呆れ果つゝ茫然として返す詞もなかりけり折から屏風の那
方よ立て容子を窺ふ妙潮は進み入つゝ微笑て濡ぬ前こそ露をも厭へ賃よ爭はれぬ枕の
奇特己よ斯あり給ふ上は此儘よして止とても不義ならずとい誰か言べき浮氣乃夫を思
ひ捨て男振さへ情さへ世よ多からぬ啓十郎主と末かけて契を給へかし逢夜八首尾は妾
よだよ任し給はゞ人よい知せず思案よ及ぶ事かはと勸むる悪事を悪事とい思ひあがら
も女子乃水性つい今宵より濡染て深き中とぞあるよける○男女の情慾品多かれども彼
人妻を偷めるい其罪殊よ輕からざるを思はざりける啓十郎い向よ瓶子を見染しより戀
慕ひ思ひ止事なく意巷念藏を助けとしつゝ浮吉を敎唆させて遠く周防へ旅立せ其後又

妙潮を助として瓶子が心を動かせて勸むるよ酒を以て志終よ硝子の枕を贈りて彼を愚
よしたりしかば瓶子は思いず其挑罠に乃せらるゝ由を曉ず未だ一言も交へずして早く
彼が懐に入し事無慚といふも餘りあり去程よ妙潮は已よ瓶子を敎唆して件の枕を貸た
る折其黄昏より啓十郎は空花屋へ忍び來て背戸の方よ行みを妙潮暗よ立出て手引を
志つゝ啓十郎を行燈部屋へ匿志瓶子が彼枕を志て醉臥たりし折啓十郎を出し來て瓶
子が臥床よ入たるなり是より後も啓十郎は妙潮と合圖を定めて彼を空花屋へ遣して彼
處に泊る其夜さりは啓十郎を忍來て脊戸の内よ隱て居り其時妙潮は人目を窺ひ立出て
啓十郎を行燈部屋へ引入て隱し置小夜更て瓶子が臥床へ忍する事屢々あれども初れ程
は心腹の侍女乃外よ知ものあしされば又浄六い周防より空七と一個の荷持が皈り來て
彼港よて浮吉は海賊乃爲よ五箱の金を奪ひ取れたる其事具よ聞えあかば或は驚き或は
疑ひ空七を押止めて周防へ金を遣さず其後又浮吉が廓遊ひの爲に重代れ腰の物さへ賣
代なせ志事まで也風聞此處へ聞しかば浄六等い呆れ果て近江へよ志を告知せ身乃用心
をなす程に瓶子が不義の爲体を人もしり已も曉て最苦々敷思ども主個の留守にあら立

て罪を糺さゞ毛を吹て疵を求むる事あらんと思ひ返さつ暫くゝ知れども知ぬ風色して
逃る空七其餘の手代の妬を暗に押止て折々密談したりける○爰に又周防山口の旅宿な
る浮吉は物貢蟲せし其後に尋ね出せし金九兩二分ゝ糸柳を送りて來ぬる廓の者へ祝義
に取せ又意庵念藏が路用にも與へしかゞ殘るゝ僅に三四兩に過す然れども浪花より金
の着く日を心當に酒を求め肴を調へ日毎に糸柳と遊び暮まて有ける程に五七日たつや
經ぬに件の金さへ遣ひ果して如何にせまじと思ふ其翌日一個殘し止められて炊きの業
を勸めたる荷持の男逐電まて飯を焚そのなくなりければ浮吉いよ〳〵難義まて手づか
ら水を汲おとしつゝ小竈にて飯を調へ糸柳と取膳にて味噌菜の外に物もあきわび住居
も亦風雅に近しと口にはいへど糸柳が思ひん程も耻かしく凡そ十日許り過す程に六條
の廓なる靡屋の老管靡八と云者が一丁の駕籠をつらせ抱の者を引連來て浮吉に云樣御
約束の日限も昨日迄なれゝゞ太夫の迎に參りたりと言を浮吉不審て心得ぬ事をな言
そ彼ゝ身の代五百兩にて身請の相談調ひて内金百兩渡せまかゞ彼身を此處へ呼とりぬ
されば浪花の本宅より金だに來ぬゝ殘金を渡さんといふ對談ならずやさるを日限まて

たれゞ迎に來しとゝ何事ぞと云せも果す靡八は冷笑ひつゝ懷中より一札を取出し今更
論は無益なり糸柳を十日貸て呉れよと云るゝ由の聞えゝかば一日三兩の揚代にて意庵
念藏の兩個より金三十兩渡されたれば止事を得ず十日の間貸參らせたる太夫なるに迎
いにかしとて咎めらるゝと逆夢にても見玉ひまか此一札のあるものをと云つゝ頓て押
披くを浮吉と請取て見れゞ果して糸柳を十日借たる証文にて其身の印形押てありさて
は意庵念藏が巧みにて甘言も我をゝめたるよと初めて嘆て腹立しさに猶かに角を論ず
るを靡八と冷笑ひていふ事あらゞ彼人だちに逢て何とも云玉へさる事を聞除はあらず
サア〳〵太夫立玉へといふに糸柳微笑て昔の虎が曾我の邸に逗留まて居る樣なる食客
に逢てつらかり老に漸く年期が明いゝた浮さんさらゞといふ程に早搔寄る迎の駕籠に
乘るを遲しと靡八等は後につき又前に立て廓をさまて急ぎたり浩る折から此貸坐敷の
家主は浮吉が爲体心得がたく思ひしかゞ家たてをせんと思案して咳吹ながら出來つゝ
浮吉に打對いて此家俄かに入用あれゞ今日明渡し玉へかし付て家賃の勘定も只今請取
いはんといふに浮吉又驚きて宿賃の義ゝ浪花より取寄る金の來ぬるまて暫く待て猶暫

く此處ゑ居らせて給ひねと詫るを聞ぬ火急の催促丼は來る事やら來ぬ事やら知れもせぬ金を心當に何日まで貸て此ゑ待べき勘定たゝずバ是非もなし諺にいふ百貫の方に錐笠一蓋ありとそたゝやは止んと敦圉て浮吉が實殘したるあけ荷胴乱後るゝ物着物さへゑ上着をバ脱せて殘らず取上てそが儘に追出しけり○去程に浮吉は重ぬ〳〵し負債ゑて衣さへ剝ぎ〳〵羽拔鳥爭で浪華へ歸らんと思へども路用なき如何ゑすべきと思ひかねて暫く街ゑ行む程ゑ向ひより來る伊世話婆が早くも打見て走りより其爲体を不審りて事の由を尋ぬるにぞ浮吉い面目なゝれどさて止べきゑあらざれバ慈庵念誠に計られて斯なり果志始め終を這樣〳〵と物語て今更思へバ吾正宗の脇差を賣し時も又網之助を賣志身の代も彼意庵念藏が價五十兩コヽなりと云しが胡論なり御身ゑそ能知つらめと思ふを阿世話い聞あへず夫も又彼人達ゑ半金儲けられ給へり脇差と彼娘子も百兩にあそ賣たりきと言に浮吉又更に意恨ゑ意恨を重ぬれども後悔此ゑ立ゑしもなし僅か阿世話が情ゑて笠と手杓と草鞋とゑ錢五百文貰ひしかバ拔參りの姿ゑ打扮或は往復の袖ゑつる或は人の表にたちて乞食して行旅あれバ路いかどらず日を重ぬて漸く其年の秋

の頃浪花の家より飯り來て見れば家と何の間よか空家となりて人氣なく賣居といふ紙札の門の戸に張てありしかば這は〳〵如何よと詐りよ呆れて暫時ぞみたり○其時此邊の町代何某思はずも出て來て浮吉を見て駭き怪み這は空花屋の旦那殿いつの程にか返り玉ひし其爲体い如何ゑやと問れて浮吉耻かしさに暫時顏を背けまがさて有べきよあらざれば進み寄つゝ聲を密めて周防の旅宿よ在し折伴ふたる兩個の友よ敎唆さをたる若氣の誤り遂よ此身の破滅となりたる始め終りを告知せて抑も吾此居宅は何者ゆゑよ空家となりて賣居にとせられけん心得難き事よこそといへば町代眉を顰めて諸は未だ知ず給はずや御身が周防ゑ山口にて數多ゑ金を泡賊よ取れ給ひし事又彼地よて放埒の風聞此地へ聞えしかば老管淨六を始めとして行末忘元あしどて身の覺悟をしたりけん空七も其餘の手代も小厠等よ至るまで皆悉く慣合て貯への金幾千か錢一文も殘せ事なく皆搔攫ひて逐電したり跡よ殘りしは内室と一個二個の侍女のみ取殘さをて詮方なきよ〳〵其聞えありまかば即ち當所の年寄中より觀音寺へ飛脚を遣し由を親御よ告たりければ名四郎殿駭き怒りて兩三個の供人を引連て觀音寺より來給ひて年寄衆に談ぜられ悴

が放逸言語同斷彼をバ則ち勘當すべし女は良夫よつく者なれば嫁は瓶子も離縁せん此義を心得玉ひねとて侍女等よは暇を取せて人を附て近江なる親里へ送り遣はし嫁御は由縁ある人の引取んといふに任せて頓て其人よ渡さ遣はし家財道具ハ賣拂ひて家をも賣ゐよそべきとて我々に頼み置て近江へ歸り給ひしが其後買んといふ人あり近江へ掛合商量調ひ昨日金を渡されたれバ汝を又近江へ遣はしたり浩きハ其人遠からず移り住よそわらずらん已よ賣たる家あれハ賣居といふ札を今取捨んと思ひつゝ計らずも此へ來て和殿よ御目よ逢る事誠よ笑止千萬よて最悼しく思へども畢竟は和殿の不所存服立給ひ志親御の心を察すれハ無埋あら中爭で心を改ためて便を求めて勘當の詫ゐを肝要なるべけれど繰返志たる長物語よ浮吉いよ〳〵驚きて塞がる胸の當惑に暫時回答せざりしを思ひ返しつ太息を吐きて言るゝ趣き心得たり兎にも角も此身の誤ち人を恨みんよ志もなし惜我妻ハ如何なる人に引取れて何處へ行けん其義も聞知玉ひしかと問バ町代さハいとよ尼が崎ゑ庵を結びて年頃彼處よありといふ妙潮花主とか聞え志尼丘尼が逗留して此地に居ゑ事のよしを傳へ聞けん此人和殿の内室よ古き由縁ハあるよし

よて引取て尼が崎の花室へ伴志て行よき彼處よ至りて尋ね玉はゝ對面難くもあらじと言を浮吉打聞て悅ひを演別れを告て尼が崎へ赴むく程よ路よて日の暮ければ此夜ハ路の邊りなる寺堂に野宿して寢られぬ儘よ思ふやう我妻瓶子は近きわたりに親類は絶てあし況て此丘尼よ聞人のありとは聞も及バざりしよ汗も如何ある由縁よて彼身を引取たるならん夫ば兎もあれ角もあれ今此ざまよて阿容〳〵と尋ねて彼處よ行ん羞恥を知さる者よ似たれど遂で此儘千水の永き別れよなるならバ愈々瓶子が恨みやせん面目もなき事なから一度逢て今生の暇乞をすべけれと思案よ惱き胸の暗ふた路かけて早晩ハ心勢りて寢失と二世の契をを結びたる妻とし知らぬ恩さの又今更よ憐れなり○斯て浮吉ハ次の日よ尼が崎へと急きつゝ妙潮ハ庵を尋ねて折戸の内へ進み入て尋問こゑよ妙潮は立出てよしを問よ浮吉對へて某ハ瓶子が良夫空花屋の浮吉でハなり斯なり果し事の由ハ告づとも知れん瓶子は此所へ引取をてありと人傳に聞しかバ恥かゝやかしき所爲ゐながら妻の爲に一言の喜びをもア入るべく又瓶子よそ對面して身ハ誤ちをも詫バやと思ふよりて參りたり抑も貴老は我妻と如何ある由縁ゐハしましけん思ひがけゐき

御深切辱けなくそしへと言を妙潮打聞てさては和主は兼てきく浮吉主でおいせまよあ妾も元は京の者なり那の子も都よりあり走折ゆえありて懇切よせられし好をあるよりは立はよ迷ひ給ひぬる家の破滅の痛しさよ人を救ふは佛の慈悲原より出家此役あれば止事を得ず俱して來て今日まで養ひ侍りたりといふ聲與へ聞えけん瓶子も頓て出て來つ浮吉を見て涙ぐみ喃我良夫か淺猿や變り果たる其容体心柄とは云あから餘處に見る目も耻かしやとて漫ろよ濡す袖の雨心誠か空泣か思ひかねたる浮吉は慰めかねて諸俱よ涙さまぐむ斗なり其時妙潮は浮吉よ打對て今は此子の良夫の尋ねて此處へ來ませしよ若き女中を何迄か尼か庵よ養なひ置べき喰雑用の仕拂ひして疾々連て行給へと言れて愈々當惑の　吉僅かよ頭を擡げて某今は此ざまよて妻を俱して諸俱よ乞食よせんは不愍なり離縁の外よは詮方なき此上あからお庵さま爭て瓶子が身の片付を宜きく頼み奉つると言よ妙潮點頭て开は悼ましき事あから良夫ありてい又餘處へよすがを求む事も得あらずされいとて尼が鉢米にて此後々を養ひがたし畢竟此子の身詰りあるとは離縁狀を渡き給ふとも縁だに盡ずい又元の夫婦よなる事ありもやせんと妾も思ひ侍る

かしと言よ浮吉又更よ頼むよしあき妹背の別れち硯をかりて墨摺流き書てぞ渡す離縁狀はお定まりなる三條半妙潮請取篤と見て是だよあれば那子のよすがは妾か宜しく世話すべきトハ言物の行末さへ專惇ーきい御身の事乃み向よ那子の手道具の無意氣な物は賣きたり其金此よ三兩あり是を御身よ恭せん是が妹背の手切金是を資本よ取付て笑ひし人も見返き玉へと云つ、渡す件の金を浮吉は今更よ辞みかねつ、受頂きて喃瓶子只今聞き給ふなればあかぬ別れになりよけり面目なさよ言べき事も言ぬ心を察してよさらば〳〵と暇乞瓶子い始終伏沈て泣か笑ふか時烏一個は此處に有明の月あらなく影さへや後暗きを得ぞ知らぬ愚男は妙潮よ一禮演て寂々ど庵を出て行よけりされば又啓十郎い計りし事の皆行はれて空花屋の家分散乃折瓶子を妙潮よ引取せて尼が崎へ遣き其身も彼處へ赴きて久しく出店よ逗留きつ、夜い妙潮が庵へ通ひて瓶子と俱よ樂みを極めずといふ事あく既に日頃を過す程よ浮吉が尋ねて來ぬる折啓十郎は來合して尼が庵よ在ければ隱れて容子を立聞きつ、既よして浮吉が離縁狀を殘し止めて出て行きを暗に歡び三人與よ寄こぞりて更よ祝きか酒宴しつ、只三兩の手切金い最とも安き

物なりとて妙潮が働きを稱賞て骨折金十兩を取せ其後瓶子を浪花へ伴ひ阿蓮が次の妾
として樂み多きと思ひけり兩頭訝觀是より前ゑ意菴念藏い浮吉を欺きて周防の山口
を立出て其次の日に郡野といふ一里許りの荒野を過らんとせし程ゑ村雨俄ゑ降注ぎて
笠宿りせん家もなければ最大きなる樅の木の本へ暫時と立寄て晴るゝを待つゝ過ゑし
事ゑ兎ゑ角と言出て浮吉が罪其日の巧策迄ゑ憚りなしと思へば聲高やかに語ひながら
供に伴へゑ庭返れば此木の邊りゑ大きなる石の地藏菩薩あり念藏態と舌を吐て聞人な
きと思ひ志ゑ爰ゑ地藏のお座ましたり只今つひ口走りし我々が巧策を必ず人ゑ告給ふ
なと戯れて打笑へば甘むべし此石佛忽ち聲を發き玉ひて己は言ぬが聞人やり覺悟を
せよと罵られて驚き怕るゝ念藏意菴逃んとしたる後より聞にれ出る兩個の侍士深網笠
も一對の朱鞘の大小いかめしく走り蒐りつ是彼兩個が襟髪掴んで引寄て急所をメて懷
中へ右手を差入念藏意菴か襟ゑ掛たる金財布を双方等き奪ひ取て悶搔を頓て引擦ぎ
て左右へどつさり投退けて供に怒れる聲も等しくやをれ不敵の惡徒共汝は早忘れしか
我は白浪駝太郎我は綠野早四郎昨日よりして後をつけて來ぬるを知ぬ愚さよと言れて

意庵念藏い痛みを忍んで身を起して備い先度の盜衆よゐ五千兩の山分を無沙汰にしな
がら我々が路用を奪は是重悪天罰思ひ知せんずと諸聲立て敦圍は兩個は供ゑ冷笑ひて
汝等ゐそ天罰を思ひ怕れぬ白徒なれ向ゑ奪ひ去五箱ゑ金い原より譯ありて遣るべき方
へ渡ゑたり又此金も汝等が浮吉を誑して掠取たる物ゐれは今取返ゑ天の冥罰ゑ手を爭は
ば兩個ゐから押ゐべて首打落さん浮吉を鈔唆ゑたる汝等が惡巧みハ一伍一什ゑ白狀せ
よ是でも云ぬゐ云すやと踏付られて念藏意庵く苦痛ゑ堪ず諸供ゑ始め啓十郎ゑ頼れて
浮吉を愚ふしたる其巧業を終りまで具に白狀ゑたりしかば駝太郎等い冷笑ひて然らば
今汝等が腰ゑ付たる小遣ひ錢も皆浮吉が物なれば此方へ渡せと腰を探りて彼訝文さへ
取上て又呵々と打笑ひて赦すまゑき奴原なれとも猶又思ふよゐあれば首は暫く預けて
置ぞ此後を屹度慎めと罵り懲して座打拂ひ卒と斗ゑ是彼兩個打連立て悠々と何處とも
なく立去けれは意庵念藏は金を殘らず奪ひ取れて詮方のなき儘ゑ存負たる着物と合羽
上着を賣代なきて當分の路用を調へ辛ふして播磨なる室の津迄たどり着ゐゑ此津ゑ
識人ゐましかは暫く其處ゑ足を止め秋乃頃ゑて室い近所の割間をして身裝りゑ繕ひ些

の路用を設けて後に供よ涙花へ歸らんとて客を求めて稼ぎけり○去程よ浮吉い瓶子と
あかぬ別れをせしより又倩々と思案をするよ迚も斯てゝ此二兩よて再び花咲よすがは
あし皆是親の恥なをは死んと覺悟を極めしい切てば忍ひく故郷へ飯りて那處の土とも
あらんと思ひ定めて金二兩よて新しき衣類を買調へ殘る一兩を路用にして近江の觀音
寺へ返り來て日暮て親の家近く涙と共に伏拜み又伏拜足ばやよ一町ばかり退きて慈愛
川ある恩愛橋のたゝ中よイみて口に稱ふる念佛の聲諸供よ欄干へ足を踏かけ水底へ飛
入んとせし程よ後よ伺ふ兩個の侍士ありやよ等給へと呼止めて走り寄つゝ抱き止め有
無を言せすつりもて行て人なき處へ下したる折柄隈なき月影に浮吉い其人々を見れば
一人と見覺ゑある向に金蘭會の日よ淨六乃知寄ありとて來ぬる那書畫の先生四九見權
佐のなりければ遁いそも如何にと手りよ不審げに顏打守れは其人も又篤と見て始め實
の姓名を告ざりければさも有へし此春の金襴會よ四九見權の佐と名乘しは假の名よて
實い和殿と從弟どち都の阿靜が兄風間權七郎友影なり聞及び給ひけん我總角の頃より
志て商人の業を好まねい文學書畫よ心を委ぬ武藝も又習ひうかめて忍ひの術さへ得た
りしかば兩親乃世を去し頃妹阿靜をば堂上方に給事に參らせて我身い東へ赴きしより
相摸の北條家に仕へたり然るよ此春主君京涙花西國まで地の容子を見て來よと仰付ら
れたりければ是なる同役隙間誰乃郎景好と諸共よ西へ赴く路の便機に此處へ立寄て叔
父御の安否を問志よ和殿が涙花へ移轉の事のよしも具よ知ぬ其折叔父御に和殿の事を
頼まれし密議あれは誰次郎と共よ涙花へ赴き未だ顏面も見知らぬと四九見權之助有實
といふ變名して和殿の金襴會よ出席したるが和殿い只管名聞を好みて人よ驕らんと欲
せし心の迷ひより西門屋啓十郎といふ徒者と親しく交はり其悪友意庵念藏等い教唆さ
を歷志き妾餘多を求めん爲に五箱の金を携へ周防ある山口へ赴くよ志を我々早くも聞
知れば彼意庵念藏を脅して虛實を探らんと思ひ計りて或夜さり彼等が歸さへ伺ふて
誰次郎と諸供に白涙院太郎綠野早四郎といふ盜賊の体よもてなし意庵念藏を退赫志て
命を取んと敎圍しかば意庵等い驚き怕れて命を赦し給らば浮吉か周防へ持行五千兩の
金あり所を手引して奪ひ取せん事成る時は山分よして我々よも賜へといふ彼等が惡心
顯然なれば其巧策よついて事を行ひ彼折和殿の跡をつけて山口の港よて海賊よ打扮て

五箱の金を奪ひ取たゝ是我々が所爲なれども原より身の慾よしたるよわらず和殿が意庵念藏等よ詐られて許多の金を失ないん事を思へばありされば件の五千兩と觀音寺へ送り遣たて名四郎殿に此由を告知せば我々ばゆ山口の里よ忍び居て和殿の容子を伺ひしよ餘多の金を失ひても懲て浪花へ歸る事なく六條の廓なる糸柳といふ傾城に打込て衣類手道具賣果たゝ斯ても金の續かねば重代の脇差と啓十郎が餌に付たる娘子綱之助を賣るゝよし我々忍びの術を以て事濟かよ知たれば阿世話婆を廻し者よ使ふて彼脇差も又綱之助をも買取たるゝ是則ち我々ありよりて綱之助よは送り人をつけて彼が母親よ歸し遣して其後此地よ忍ばせ置ぬ是等も後よ災禍の起らん事を怕るゝ爲よて正宗八脇差も人手に渡さじと思ふが故の所爲なりき然るよ意奄念藏は和殿に勸めて綱之助をも賣戻るあとよ價を盜みて半金ならてゝ和殿よ渡さず已に掠めつくすよ及びて猶も和殿を欺きて浪花へ歸る事のよしさへ我々窺ひ知たれば暗よ彼等が跡をつけて次の日報野どいふ荒野よて意庵念藏を打懲て掠めし金を取返たて又其悪事を問しよ事の起りゝ去年の冬芝居見物の折啓十郎が和殿の内室瓶子どのよ深く思ひを掛ゝより便りを求めて本意を遂んと心を暗よ碎く程よ金禍を僥倖よして和殿よ親たく交はりたゝ妻を盗まん爲なるよ去さへ具よ白狀したりしかゞ雖次郎をれみ山口よ止めて我ゝ浪華へ赴き又忍びの術をもて和殿の居宅と啓十郎の立擧動を窺ひしよ果して啓十郎は妙潮といふ比丘尼を媒介よして瓶子を欺き陷し入て或夜枕を替せしより魚と水との思ひをなして夜毎々々よ啓十郎を引入て忍び逢ぬる其事已よ紛れあれば我又暗よ淨六等と談合して和殿の居宅の有金をゝ或夜暗よ觀音寺の本宅へ遣し淨六等七其餘の者をも都て近江へ遣して世よは逐電のよしを披露し名四郎叔父御の計ひよて長堀の家藏をゝ賣居よせられたゝ有然るに和殿は路用つきて山口の貸座敷を追出され袖乞をして漸くよ浪華へ歸り着たれども妻の悪事を猶曉らず只三兩の手切金を受て離別の悲さよ堪ず耻も思はで故郷へ飯りて死んとせられたゝは迷ひの上入迷ひなり斯ても未だ悟らづやと吉は又誰次郎も言を竭ー意見を加へて我ゝ又山口より和殿の跡を追て來たれと和殿の慚愧を見つゝ知つゝ救はざりしゝ理左やうさせて誠の人よあさん爲なり懲て仕ひを改めゆば我々親子へ勘當の詫して對面を願ふべゝ和殿の胸は如何ぞやゞ詞等しく論ずよ吉ハ良此時

よ始めて夢の覺たる如く只感涙に噎びつゝ土地よ頭を堀埋めて誤り入てしなり以後い
心を改めて屹度慎みしいん爭で〳〵と希願ば風間隙間も亦喜びてさらば此方へ來玉へ
とて浮吉が親名四郎の本宅へ伴ひけをば淨六空七綱之助其餘乃者も出迎へて恙なきを
祝せしかば浮吉は面目なさよさし俯向て居たりけり其時糖利名四郎は都のれ靜を伴ふ
て奥の方より出て來つ浮吉を佶と白眼で不埒者思ひ知たか愚のくせに名を好み色を好
みて女腰ある國の守の妾よ艶書をつけしよ僥倖よ其咎めを蒙らて却つて妻子賜りた
れば其方が心いよ〳〵驕りて遂よ其身の破滅よ及ぶ災禍を引面さんと思ひよけれを一
万兩の資本を授けて涙花へ遣し其行ひを試みしよ飽まで盡せし白痴の舉動自業自得の
憂き艱難世の胡慮になるべきを折よく東の風間氏が相役障間殿と連立て此本宅へ立寄
れ去かば密談して助けを求め彼人達の情よて金を多くも失はず乞食をするまで難難は
却つて其身の僥倖よて錢金の貴き事を今こそ思ひ知つらん赦し難き奴あれど思深き人
々よ託られたれば默止難くて斯對面に及ぶものなり瓶子ハ上より賜りたる嫁あるをも
て私しに故なきては離縁しがたしされいとて不義密通の事のよしを戸立あば是も双方

夫の恥なりよりて病死と披露して空葬式を出すべき其根生を磨き直して親の家を繼ん
とならば是なる元の許嫁の阿靜を妻よ持すべし心得たるか白徒奴がと懲して諭す親の
慈悲に浮吉益々後悔きつゝ感涙漫ろよ止めかねて身乃誤ちを詫にけり親子の和順調ひ
なれば風間隙間の兩個は其次れ日よ別れを告て東へ歸らんとせし折名四郎は餞けよ金
を多く送りしかども兩人共よ些とも受ず風間が妹阿靜ハ事を名四郎親子に頼みつゝ相
扶路さして急ぎけり此兩人の心性智惠も氣振も世に得難しよて聞者感心きたりける

新編金瓶梅第四輯

○第一編

散花を惜みし人乃仇心移るも早き春の青山さても其後西門屋啓十郎ハ空花屋の浮言を思ひの儘ゑ計り負せて其妻瓶子を手に入しかバいざ浪華の本宅へ伴ふて皈らんとて軍の用意をなす折から此尼が崎の出店なる西門屋乃支配人寒八と呼あす者尼妙潮が庵ゑ來て啓十郎ゑ告る樣只今船舘幕左衛門樣より御狀到來して啓十郎ゑ折入て頼みたき一義あり委細ゑ書面に記してあり相違なく屆けよと仰越されしとて携さへ來ぬる革狀箱のいと重やかなりけるを其儘啓十郎ゑ渡そゑ啓十郎ゑ不審あがら其狀箱を開きて見るに内用と小書をしたる八重封じの狀一通ゑ差添たゑ縞の財布に小判二百兩ゑ其書面ゑ我一個の子なる苦四郎ゑ知らるゝ如く阿波にあり走ゑ此度主君三好殿より軍用金千兩を受取來つり此地をさきて來ぬる程ゑ播州室の津の傾城ゑ心迷ひて逗留して今に皈らず若件ハ軍用金を遊興に爲ゑ失ふ時は彼が不覺といふも更なり其崇り我等ゑ及ぶべし和殿ハ浩る事にそら心得たる人なれバ聞に頼みゲすなり早く室乃津ゑ赴きて

苦四郎は異見を加へ伴ふて帰り給ひぬ定めて主君の用金に手を付たる事も有べき其頃の消費を塞がんためは金子二百兩遣はすなり和殿是を預りて揚代金は滞りあらば宜しく計ひ給へかき偏は願み参らする心得給へと言れあしぬ抑も件の苦四郎遠景は幕左衛門が一個子にて二十餘りの弱冠あるが其心性親に〳〵して身の行ひ正しからず酒を嗜え色を好めども極めたる醜男にて女は好るべくもあらねど親の權を笠に着て且銭金を物とも思はず驕る恥る白徒なれば今度主君の軍用金を預りて尼が崎の城へ來ぬる程は或日室は津に船繋りせし逗留は徒然は此津は名たゝる浮世袋屋の二見路といふ遊女は相馴染もより忽ちは現を抜して其身の破滅となる事を思はず主の物を我物顔は金銀を費散しぬる遊興れのみ驚夜を分たず尼が崎なる親の元へい路より病起りきかば暫時此津は保養して本服せば参らんとて從者をのみ尼が崎へ遣して親は告させしかば幕左衛門不審て其從者に問糺せしは果ぞて苦四郎が詐りの事は趣き定かは知れて憎しと思へど愛子の事あり其儘にして猶難さに啓十郎を暗は頼みて彼を迎ひは遣するありけり猶件の幕左衛門は前々の者は見ぬたる如く啓十郎が本妻吳服が母方の叔父にて三好の家の執事あれば尼が崎の城を預りて威勢肩を並ぶる者なき浩る内縁ある上は啓十郎は當城内の用を達あと常は多く幕左衛門を拵へて非分の利德を得ぬる事も幾度といふ事あければ今更に辭み難くて心得たる由の返り言を記し遣しさて瓶子妙潮に件のよきを說示して遣様〳〵の譯あれば我身室へ赴きて彼所の所用を果してあそ瓶子を涙華へ伴ふべけれ其折までは妙潮尼は預けて置ん暫時の程を歸り來る日を待給ひぬと慰めつ出店へ歸りて旅粧ひを調へつゝ從者一個を從へて播磨路さして急きけり（作者曰く第三輯は啓十郎は瓶子を手は入しより涙花の本宅に伴ひ歸りて妾はせきよし配せしは後々の事はして此折きかせきは有ず瓶子は尼が崎なる妙潮が花にありき程猶是彼と物語り多くあり并は此編に具なり）去程に啓十郎は播磨の室は趣きて便り宜しき旅宿を求めて船舘苦四郎が逗留しぬる廓の宿所を尋ぬるは浮世袋屋と呼なしたる遊び宿てありけれは兼て用意の衣裳を着飾りて最風流なる打扮しつゝ浮世袋屋へ赴きて苦四郎に逢まくせた折思ひがけなく喜田意庵は祝屋念藏が此津はありて歓濃をして其日を送るは逢けり互ひは不測乃再會なれば膳を濃しつ客のあき空坐敷に立寄ひきて過去を問とはるゝに

先意悲念藏と往る頃浮吉を計りし事は遂はぬども後談に至りて齟齬ひ儲けし金も浮吉を教唆して書せたる五百兩の借用手形も盜人此爲に奪ひ取れ剩へ身の衣服まで剝れて詮方なかりしかば辛苦為て此室此津まで來ぬる事は來たれどとさる身のさまにて阿容〳〵と浪花へ歸る面目なさに 諺にいふ藝は身を助けばへなき港の客の幇漢して漸くよ露の命を繋ぎしかども京浪花の全盛なる廓と遊ふて客人と一夜泊りの旅客と船繋りする船頭のみ錢には經てならざりきよ此頃よき客一個わり那の夕霧伊左衛門の浮瑠理よはあらねども亦是阿波の大盡にて此家の二路といふ傾城よはまり込て碇を卸し逗留よ日を重ぬるまゝに些はお蔭を蒙りて見給ふ如く身の衣服も何やら斯やら出來たりされば今宵も坐敷を勤めて只今褥へ納めつゝ退き去んとせし程よ圖らず浮国よ掛りしい地獄で佛の方便より劔有難き浮利益よて是より浮み上るべし偖又御身は何等の爲よ此津へは來ましたると問ば啓十郎聲を密めてさればとよ聞給へ我い僅よ三兩ゐて甘く瓶子を手に入たり其故い遣樣〳〵と浮吉が西國より尾羽打からまて來つる事其日の手段を始めより終りまで密談示して斯の如く上首尾なれば已に瓶子を伴ふて浪花へ歸らんとしたる折船館氏より頼れて居綿け客を迎ひの爲相勝からぬ堅劍役今和ぬし等が阿波ナ蠱といひまは則ち我尊ぬる船館氏の一個瓶子今級阿波より千兩の軍用金を預りて尼が崎の城へ來ぬる船館苫四郎の學なるべし此所にて浮々遊び過して那用金を失いヤ其身は更なり親御まで中蹤立がたかり然ふば又其上汁ゑ緊りたる和ぬし等さへ祟りを蒙れ難かるべ〜先此由を彼人よ告て對面させ給へ疾々せずやと脅さるゝ念藏意庵は驚き周章て走りて二路が坐敷へ赴き偖苫四郎よ這樣〳〵と啓十郎が迎へよ來ぬる事の由を密語告れば苫四郎ゐ驚きながら起出て對面しけり其時西門屋啓十郎い意庵念藏よ案内させて二路が坐敷よ入て苫四郎よ打向ひ父幕左衛門が慣りの趣きを告知せ 私儀旅よあらぬ主君の軍用金を預りながら遊廓遊留は若氣の誤り是非よ及ばず遠かよ立去て尼が崎へ赴き給へ是まで遣ひ失ひたる金い如何斗よいを押懸してはゆ爲にあらず有つる儘よ宣はゝ某宜敷く計はん如何ぞやと問詰らるゝ苫四郎い頭を搔つゝ暫くは兎や角と陳じしかど包ミ果べき由のなければ其身の路用はいふも更なり彼軍用金千兩の内凡そ三百兩斗り遣ひし由を私語告ぐるを啓十郎打聞て然らば是大金なり 某とても

旅あれば然るかりの金い用意せず浪華の宿所へ云遣はして取寄て貸参らせん翌より他處へ旅宿を替て金の調ふを待給へ今より後も此遊廓に逗留の事聞るあば假令金い調ふとも元の華へい納め難かり何れの道よも今宵一夜が此里よ名殘なと我等を俱よ飲明さんさのみよ鬱ぎ給ひそと心雲ごかしに慰めて二路よも飲込せ其身は一個の新造を對方に呼上して諸俱に遊びまかば意花念藏い啓十郎が捌きを妙と譽美て酒宴の興を添しなども苦四郎い二路よ惜む別れの悲しさと親の怒りも心に掛れば巡る盃を取上げて酒すら咽喉よ通らぬどもさらぬ顔して調子を呼び肴を多く取寄て啓十郎を待遇け浩りし程に啓十郎い二路を倩々見るに京浪華よも多からぬ標致といひ仕あしまで最憎からぬ趣きあるは又色好みの病起りて腹の中よ思ふやう我身偶々此所に來て此傾城を餘所に見ば寶の山よ入ながら手を空くして歸るよ似たり此所よて遣ふ錢金は皆苦印の遣ひ込と云あして算用を合する時い我懷中よ一文もわく事いなき幕左衛門より送されたる二百兩は此にあれども三百兩の遣ひ込を償はんにい百兩足らず原より富たる人の子なればよまや三百四百の金を遣ひ失ひたればとて一個の子の事なれば兎も角もせら

るゝならん預られたる二百兩を生す仕方をあるべしと思案をまつゝ苦四郎よと相の送せし金ありとは初めよりして告もせず其夜は一日賑しく諸共よ遊び戯れて曉の朝苦四郎を伴ふて旅宿よ歸りまが己に心よ計較あれば苦四郎よ利語やう御身が遣ひ込たりし三百兩を償はぬば尼か崎へい伴ひがたき我等は江花へ立回りて金を携へ再ひ來ん今日より旅宿よ閉籠りて何方へも出給ふな又廓遊ひをし給はば我等は世話を仕難しと誠しやうに制めて浪華へ歸る面色しつ頸て旅宿を立出しが昨夜意庵念藏よ密語示せしよしあれば願て浮世袋屋よ趣きしよ二路も意庵等が內通あれば心得て啓十郎にさしもつかず男振さへ氣取さへ苦四郎にい八沙よ勝たる客なりけりと思ふにそ最憎からず待遇て室よ燈よの花滴れぬ中とそなりにける去程に啓十郎は浮世袋屋よ居給けまて思はもも日を過せしよ或夜浪花の本宅より黑五郎と九四郎と抱し爲の飛藏が啓十郎を尋ね來て呼出まて利語告るを啓十郎は驚きながら耳を傾けて打聞に尼が崎の城の執事なる船館幕左衛門春景い年來の私慾奸曲本國阿波へ聞えしかば主君三好殿より咎めを蒙り閉門のよまを風聞あり西門屋は彼人と內緣あるのみならず幕左衛門と馴合て道あらぬ錢を

儲け去事の此折よ若聞れなは罪を免れがたかるべしといふ世の取沙汰の概略さへ此折始めて聞ねしかバ啓十郎は驚き怕れて如らんよい尼が崎へも浪花へも浮々と只今は歸り難し苦四郎よも由を告て暫く影を隠さんのみ但し我等い彼災禍を避て再び浪花より來ぬる趣きにすべしとて黒五郎にも飛藏よも心を得させ示さ合して二路よい遁れ難き急用ありとて最慌しく浮世袋屋を立出て苦四郎か旅宿よ赴き今宵聞たる尼か崎の大變這樣〳〵なりとて苦四郎が父幕左衛門が年來の非義顯れて閉籠られたる事の趣き其概略を密語示せバ苦四郎い驚き呆れて顔色忽ち土の如く暫時は言をも得云ざりさが思はずも大息を吐て然らんには浮々と尼が崎へい行がたく阿波へ歸るは愈々危ふし所を如何よして宜らんやと問バ啓十郎沈吟じて某しとても内緣あれバ崇りあしとい言難かり暫時俱よ影を隠して那所の容子を聞定め事治りて浪花ある本宅へ歸るべし和主い親の罪重くて歸るよ家のあらずあるとき猶俄侍よ預り來たる軍用金七八百兩あらん夫を資本よ世を渡らバ一生涯と易かるべし此義に付き給はずやと言は苦四郎點頭て其義實に然るべし斯ある上は主の物我物の差別いあ金のあるあそ俄倖なれ此より伊勢へ

參宮さて多氣の伯母御乃宿所よ赴き手引を求めて北畠よ仕ふる事もあるべきか是もまた計り難かり彼伊勢の國司なる北畠殿の御家人楠一味齊正忠乃妻此石は正しく我身の伯母あれバ和殿も亦鰯を養たる鍋とか世話よいふ如く些の内緣なきよあらず且一味齋にあるあらバ汗は上首尾と言ものありよしや其まで附會そともさる美人を見て置バ後の咄しよなりやせん何れよさても損はなし疾々伊勢へ行べしとて談合早く定りけり其時黒五郎の九四郎い獨倘々忠ふやう我も又西門屋の隱居よて啓十郎が親なれバ災禍の答餘の掛らバ苛きめをや見ん件の事の治るまで伊勢路へ行べしと思ふ心を啓十郎よ告て則ち參宮の一群に不加りける去程よ啓十郎い尼が崎より俱して來ぬる從者飛藏を皈し遣して此方の事を呉服等よ告て災禍を免るべき事の手術を示し敎ゆる文を細かよ認め猶又浪花尼が崎なる本宅出店の支配人寒八等よも心得さすの密書を從者よ渡し遣し意庵念藏兩個い旅路の談合相手よせんとて是をも一群よ加へけり又船館苦四郎が阿波の本國より從へ來ぬる八九人の從者い先い尼が崎へ遣して此所よ止め置たるは一

個の草履取のみなれば彼をば倶して行んとて同行都て六人よて其翌朝旅宿を出て伊勢路をさして赴く折啓十郎は又思ふ様幕左衛門より送られたる二百兩は浮金なれは我携込ても後腹やめず且苦四郎が懐中よは七百兩の大金あり今般我々四人に路用も皆苦四郎よ賄はすれば今此金を長旅に持行んは無益なと迚をば阿遮に拙らせて吾此日頃心を盡さて遂に瓶子を手よ入しを妬しく思ふ彼奴が角を折よれ初じと思案をしつゝ物影へ飛蔵を招ぎ寄て件の金二百兩を財布の儘よ取出さて飛蔵此財布八内よれ小判二包紙てあり是は阿遮よ遣すなり何まれほしき物あらば是もて買と言傳給へと密語渡せば飛蔵は一義よ及ずず請取財布を襟よかけつゝ道の程便機の里まて身送りて啓十郎か供人と兩個は其處より立別れて浪花をさして急ぎけり○爰よ又楠一味齋正忠は大原武二郎が内弟子となりてあり去頃娘千早を娶れ世て鎧櫃子におさばやと思ふ心を妻の此石又千早よも啟示して已よ主君北畠殿へ願ひ奉つらんと欲せし程よ人の猜みのやるせなく事の院の出來しかば是非なく武二郎よよしを告て彼を他郷へ遣さけしよ武二郎は津の國にて或法師の生ながら虎よありしよ出會さて件の虎を打殺したる武勇よよりて尼が

崎なる三好長良よ稱美せられて彼處の家臣になりたるよしの風の便りよ聞えさが其後又武二郎い人の爲よ謀られて罪人となりしよりて淡路嶋へ流されて今は彼處よありといふ世は風聞さへ聞ねけりされば千早は容顔八最麗さきのみなら寸親の武藝を見習ふて太刀あるせよ愚おらず且又和漢の書を好さて詩を作り歌を詠よ古人よ耽ざる手段ありて文武の道よ才たけて世よ兩個とは得難かるべき乙女よてありければ心暗よ聟を撰みて武二郎とそ我良夫と傳ぐに足る壯夫なれと思ひし緣は空だのめにてまだ添臥も夢の間よ墓なく別れしそが上よ彼人と罪ならぬ罪よ陷されたりしより波路遙けき淡路嶋へ流されたりきと人傳に聞よ悲さく味おき思ひは胸にむすぼれて遂よ病よありしより勸る藥の功もなく加持も祈禱も驗おらず病煩ふ事久ふして竟に綽切たりけるが爲胸先暖かにさて絶たりとも思はれねば兩親いと惜みてそが儘貌く櫃よ納めず息出る事あらんかと枕邊傍邊よ附添て涙とゝもよ守り居るおと三が日に不及びける偖も其後大原武二郎武松い何よ船館幕左衛門春景が詐りの計事よ陷されて思ひがけなく盗人よ似たる罪を得たりしがば命も已よ危ふかりきを姪八琴柱が叔父を思ふ其孝順の赤心を神も憐み給

ひけん水垢離とりし流れ川より財布より入たる金二百兩を不測より拾ひとりしより其金をもて漸くに叔父の瓔緒を繋ぎとめしかば武二郎い死罪を赦さるて三好の領分なる淡路島へ流されける是等乃事の趣きい前々の卷に見えて人皆承知の事あがら其大方を記すよまは爰より重ねて彼壯士の物語あれバあり去程より武二郎い尼が崎の城内より三好家の雑兵より送られて船出をしつつ遥々と淡路島へ赴きゐゐ船は恙なく那所より着て雑兵等い島役よりよしを告く差迭りの手形を渡し返書を取て再び船より打乗つゝ尼が崎へ帰りける其時此島の流人ども今武二郎か來ぬるを見て相憐みて告るやう和主い未だ知ざるべし此島第一の司人は三好家の郎等より橘島郡次浦主と呼あしたる底悪地悪き侍士なり又流人預りい岩坂苦六郎知義といふ老人あるが始めて來ぬる配流人は殺威棒とて一百の榜苦を背中へ當らるるが此島の号令なり其折用意ハ山吹色を岩坂殿へ參らすれバ榜苦を脱るるのみならず宜しき役を吩咐られて明し暮すより最安かり我々い貧しき者よりさる齋のおきよより撫木を運び貝を拾ひて憂年月を送るぞかしと告る折から島の雑兵兩三人出て來て新參の流人武二郎ば汝よな今御蹈の出給ぬ疾々來よと引立て流人役所へ伴ひけり斯て大原武二郎と雑兵等より從ふて役所の坪の内より來にけれバ岩坂苦六立出て武二郎より打向ひ流人武二郎承はれ此地より來ぬる罪人は殺威棒一百擲き脊中より當て懲ずこと往昔より號令なりなれども其身に病あるで榜苦を受るより堪ざる者は黄金十枚を差出して呵責を暫く延されん事を願ふを又例あり汝も又願いしく思ひなバ贖ひ料を疾出せといふを武二郎聞あへず和殿は未だ知ざるか我身に犯せる罪あけれども人ハ爲より誣られて竟より死罪に定められしを姪の琴柱か孝順よて二百兩の金を持て僅より命を贖ひて流罪にありたれバ鐚一文も持て來ず假令其錢ありとても非道の金を貪りてさバかり流人を翫遊ぶ悪人奴を肥さんや打んとあらバ幾等でも辭退はアさぬ打るべしと言せも果ず苦六い眼を怒より磨焦燥て憎き其奴が擬廣旨疾く打伏て擲かずやと下知に從ふ雑兵奴はや群々と立蒐りて武二郎を押倒し三四尺ある樫木ハ棒もて脊中を打懲す其數百より及びしかども武二郎は不死身なれバ些少も痛を覺えず疵付ともなかゝまかバ物とも思はず打笑ひて人々さてい餘りより手ぬる者我肩壁の癒るまて幾百なりとも能打ねといふより苦六驚き呆れて猶打せんと下知なす折から二十計りなる若者の身長

高く色白く肥肉ぎりたるが興より忙はしく出て來て何事やらん苔六に私語たりけるが苔六屢々打點頭俄に面を和げて雑兵等を押止め實此大原武二郎は虎を手打に殺せしといふ勇士のよしは我も亦世の風聲に聞たるが今見る所さもあるべし那齋しれ有ずとも毅威棒と是まてなり皆退々と雑兵を遠ざけたりし爲体始めに似ざる苔六が心の底を武二郎は闘り兼つゝ不審さに默然として居たりける

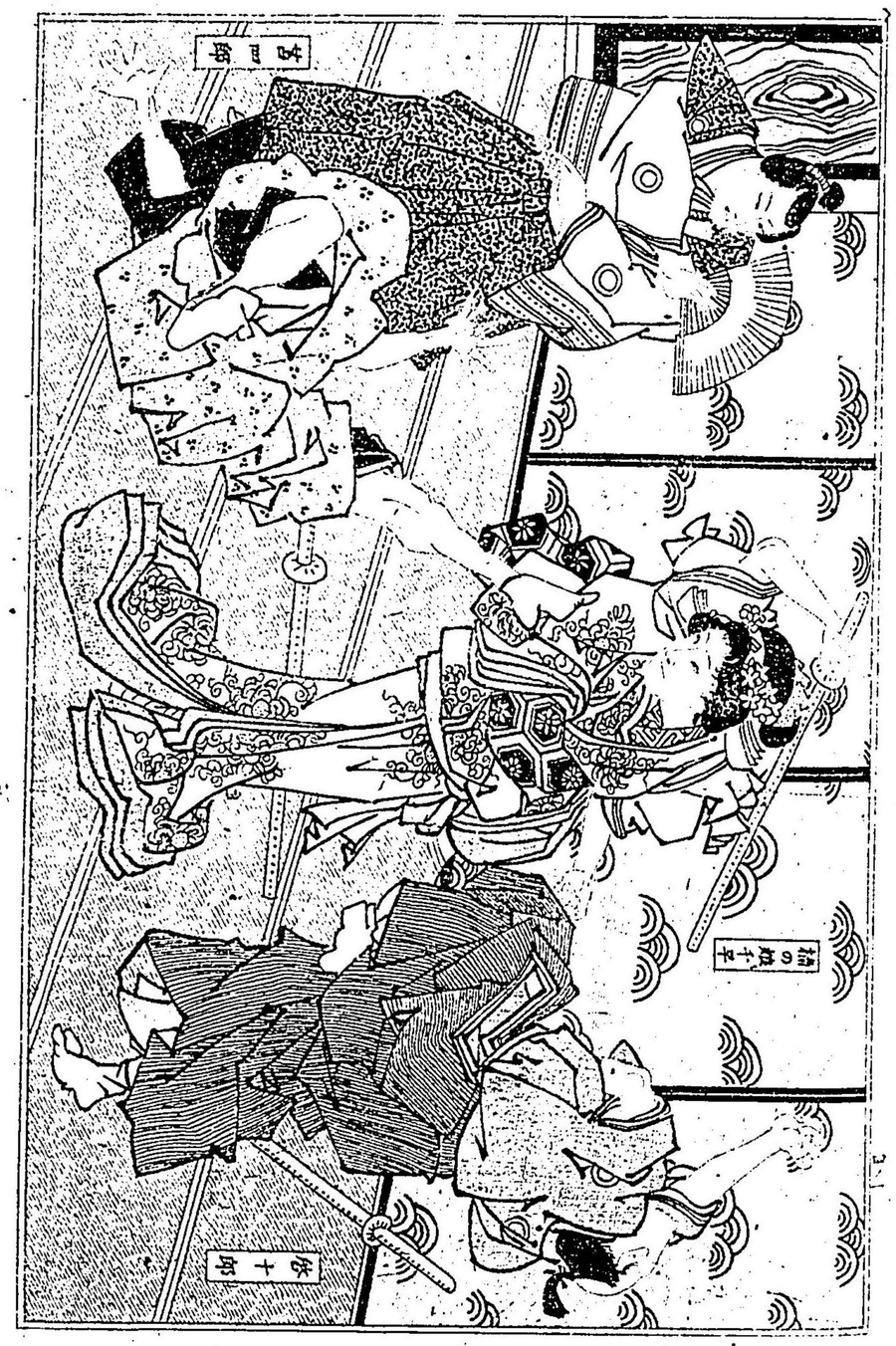
○第二編

其時岩坂苔六は先雑兵を遠ざけて面を和げ莞爾に武二郎に打對ひて和殿武勇の譽れある事彼虎を手縛にしたる其事の趣きい兎等へも粗聞えて最頼母く思ふものから凡そ初めて來ぬる流人よい島の掟あるあれば止事を得ず榜笞を當て聊か試みたまけるに身の中都て金鉄あるか荒き榜笞に屈せずして皮肉些とも破るゝ事あく痛む氣色のなかりしは誠に稀有の勇士なり我等深くも感ずるの餘り今日よりして和殿をして鹽木小屋の番人とせん凡そ此嶋ある流人は勤めには日毎に磯に流れよる鹽木を拾ひ焚木に賣て些乃錢を得て飢を凌ぐに其木十束あれば一束をもて貢の爲に當役所へ差出すあり所を月々

に貯へ置所を鹽木小屋と號けたりされば多かる流人は内にて律氣にして算筆をよくする者を撰取て件の小屋の番人とす然るに件の小屋を守る流罪人は往る日に病死して未だ後役の者なきよりて和殿に小屋守りを吩附るなり彼所には些の彷徨あり只鹽木の數を改めて所を打守るのみあれば骨の折る事はなき疾々彼所へ到るべしと最懇切に私語示して更に双重立たる雑兵等を呼寄て武二郎を鹽木小屋の番人になすよしを言知きつゝ員數の帳を渡しよければ件れ雑兵等は心得て武二郎を誘ひ立て件の小屋に赴きて帳面に引合せ鹽木の員數を改めて武二郎に引渡し偖盲やう此所の番人は流人なれども役義あれば日毎に麥五合づゝ下さるゝなり浩れば飢に望む事あし能々務めよへとて携へ來ぬる一袋の麥を渡して出て行けば其時武二郎は獨頭を廻して熟々遊りを見るに彼鹽木を入置く雑庫四五戸まへありてそが其中に萱葺の小屋あり凡そ番人たる者は此小屋にあり莚僅に四疊ばかり數設けたる壁は所々破れたるが居爐あり鍋一つあり是等は都て前々の番人より附渡りの物きるべし其時武二郎思ふやう前には岩坂笞六が錢を求めて無慘あたりし勢ひよい似氣もなく俄に佛心をもて撰擧て此役義を吩附たるは如何

ヤやと何さま斯さま思へども思ひかねつゝ有ける程ゑ此島の流人共い今參りの武二郎が一個逸早く取立られ盥木小屋ゐ番人ゑなりたるよしを傳へ聞みな諸共に集ひ來て喜びを演ていふやう和主は如何あるひきあるにや流れて來ぬる其日より浩る役義を吩咐られしい昔よりまて例もあき能僥倖ゑて侍るあり翌よりは又貢の鹽木を此所へ納る我々なれゞ宜しく賴み奉つると皆口々ゑ孝義を延て暇乞まて歸りけり浩る所に一個ゑ小厨御膳籠と夜具包みを惣擔ゑ打かけ早ぎ來て武二郎ゑ對ひていふやう已れい岩坂樣に使はるゝ仕出四郎といふ者あり若旦那施恩吉さまより晩食を送らせ給ふなりいざ先召れいへと告知しつゝ御膳籠より用意の膳を取出すを武二郎は不審ながら見れゞ一汁三菜ゑて並々の料理ゑあらず中酒の盃取肴口取の菓子までも添られたるは如何なるゆゑぞ門逸ひにはあらずやと言ども聞ず膳並べて頻りゑ勸むる馳走振に物ほしかりし折なれゞ又今更ゑ辭みかねたる武二郎は飽まで飯を食べ酒さへ飲て其悦びを伸しかゝ仕出四郎は持來たりし夜具包みを取出して是も若旦那の遣はゝ給ひし御身の夜具ゑていゝなり今宵より召されいといふゑ武二郎愈々呆れてよしを問ども其譯を小厨ゑ知べき事ならねゞ心元なく思ふゐみ是よりして日毎〳〵ゑ三度の膳ゞ施恩吉が仕出四郎をもて送らゝて武二郎ゑ勸めしかゞ武二郎は一度も手つから炊の業をせず田舍に稀なる美食珍味の口に入ざる事もあけれゞ偖は彼施恩吉とやらん飽まて我を肥太らして新身の刀を試さんとての用意ゑあそあらんずらん兎ても斯ても命運盡たる我身を今更惜まんやと思へゞ飽まて打食ひて十日餘りを過す程ゑ或日岩坂施恩吉ハ仕田四郎をもて武二郎を其身の部屋ゑ招ぎよせて恙がなきを問慰め疾にも對面せまく思ひあがら親ゐ役義ゑ憚りて今日まで過せ一が今日ハ我身の誕生日なれゞ聊か盃を進めんと思ふて招きいなり某が年十一二の頃より相樸の業を好むにより姉婿ゑ弟子とありて淡路島といい名乘れども未熟ゑしてさせる碧れも得難きゑ姉婿は世をちりて今に師と賴む者もあゝ和殿は勇力世ゑ著るく虎を手拍ゑ走給ひたる手並ハ人の噂ゑ聞ゑき爭で數を受んずと思ふゑよつて此日頃僅ゑ心を用ひたり惡くな思ひ給ひそと肝膽を吐き信を示して此日祝きの酒肴をもて最懇ろゑ款侍ければ武二郎は今爰ゑ日頃ゑ疑ひ忽ゝとけて其悦び大方ならず一個の知已を得たりと思へゞ武藝れ物語して向に 楠一味齋を師ゝ為て學

びし劔術柔術居あひ相撲の業までも圖義を隱さず說示せば施恩吉温ろよ興よ入て亦他事もあく語ひけり斯て大原武二郎は淡路島施恩吉が大方ならぬ款侍よて終日醉を盡しつゝ其夕暮よ別れを告て盥木小屋へ歸り來つ中よ入んとせし程よやよ喃皙しと呼かけて磯邊八方より來る人あり武二郎誰やと見返れば年の程十七八なる最麗しき女子なり武二郎愈々不審て抑も御身は何國の人子と再び問ば涙ぐみ汗い餘所〳〵し武二郎ぬき御身が伊勢よ居ませし折親の許せし妹脊の緣を結ひも遂ず腮黑き人の猜みに隔られて別れし後は津の國ある尼が崎の城よ止められて三好の家よ仕へ給ふと人の噂に聞たりしが近頃又彼所よて人の爲よ謀られて罪あらぬ罪よ陷入て爰等へ流され給ひきと世上の風聞しかすがに風の便りよ聞悲しさよあるにもあらずあがれ出て便り求めし涙枕遙けさ船路を辛ふして漸々尋ね來つるなと爰よ仕へん心の信を憐れと思ふて給ひねと掻口說つゝ泣よけり武二郎是を打聞て目駭き且憐れみ兎よも角よも拵へて返さて遣らんと思へども出船をけれバ詮方なしさりとて此身は流人あるよ若き女子を止め置バ非法の罪を遁を難けん如何すべきと思ひかねく殆と困じ果けるがよしや崇りのありとて



も女子の身よて遙々と爰迄来にけるを難面内へ入ずもあらば人たる心なきよ似たり旦雨三日止め置て便り宜しき船を尋ねて返ずに如ずと思案をしつゝ漸々宿所へ伴ふて旅路の憂を問慰め迭に積る物語よ日は暮て夜乃更しかゞそが儘此處よ止めしよ元より狭き盥木の小屋へ夜の物さへ両個なけれゞ一ッ臥床よ木枕乃堅き男も緑の糸結ぶと夢の浮橋や水漏さじと妹と脊の深き中よぞありよ夕る去程よ武二郎は千早を小屋に忍せ置て故郷へ返し遣るべき便船を待程に思へず三日よ及びたる其曉方まで枕を並べく臥したる千早は何地へ行けん臥床に居らずあり去かゞ不審なから彼處此處と猥もなく尋ねしよ絶て行衛の知ざりければ偖へ千早と見えたるは狐狸の所爲よ志て我を愚よせしかちん若然らずゞ若き女子の海山越て遙々と一個此地まで來べきあらずさしも勇士の譽を得たる我身流人よありしより畜生よすら侮られて浩る不覺を取よきと思へゞ獨心ふ耻て人の知ぬを僥倖よ尋ねもやらず止よけり○斯よ又楠一味齋が娘千早へ向よ大原武二郎を戀の病ひよ弱ひ果て一旦縡されたりけるが第三日の曉方よ始めて眠の覺たる如く忽ちよ息出て蘇生りたりければ親の悦ひ大方あらず藥を飲せ粥を進めて

種々と撫恤程と凡そ七日許りよして病名殘あく平ぎて常と變らずなりけるが此頃より月の穢血を見ず斯て四五ヶ月となる儘と酸物を好み折々病煩ふこと全く姙病に似たりしと剩さへ腹の邊り脹らかとなりたかば兩親密と不審て千早忍ひ男ありて懐妊たならんと思ひしかば或日側に人なき折兩親い千早を招きて近頃和女の御腹の容子身籠りたると疑ひなし若き者の習ひなれば親ハ許しを待ずたて仇た男と忍び寐と情の種を孕せしならん其男い何者ぞや包み恥べき事あらぬと隱さず告よ如何ぞやと嚴しく問るゝ千早が面なき只泣沈みてありけるが側の短刀引拔て已と自害と見ゑたかば兩親驚き押止めて假令分說あらずとも譯をも告ず死ぬる事かい包まず告と其上よて又了簡もあるべきと賺しつ赫す右左り涙ぐみたる親の慈悲に千早は隱ら事を得ず向と病にさた詰られて三日息絶たとた折夢とも知ず現ともあず一個淡路嶋と押渡りて武二郎と對面して三日彼處とあり た程と夜毎と枕を川瀨の水と馴たる心地たて暫く睦み語ふと思へば忽ち蘇生りて死あざる事を得たりし事又武二郎が爲体盜木小屋を預けられて詫た住居なり た事又流人預り苦六が事其子淡路嶋施恩吉が事聞たる儘と這樣〳〵と始め終りを告知せて此事い神かけて空言ならず侍れともさりとて正しき證據なければ實なりとは聞給いし斯まて思ふ武二郎ぬ た兎と も角と も添遂られぬ妹脊の緣絶しより親に先立不孝の罪科免させ給へと忍び音と搔口說つゝ泣とけり事の不測と母此石は驚き感ぜて回答も得せず一味齋い倩々と聞果て眉を顰め男女の情義とは死た て連理の木と生ぜ或は鴛鴦となりし例なきにあらず況て魂ひあたがれ出て千里の外と遊べるを神遊どしも言なれば其事なたとすべからず淡路へ人を遣して彼處い容子を聞せ奇ば疑ひを解よた もあらんさいとて奴僕蔦平と機密を示た飛脚として淡路嶋へ遣すと符合たりしかば一味齋は忽ちと疑ひ解て深く感ぜ彼武二郎は類ひ稀なる義勇勝れた若者にて無實の罪を得たりと聞つゝ彼を流人どあた果おんい最惜むべき事にあそあれ向とは我鍔として娘千早を添遂させんと思ひし事ハ仇どありしと浩る不測の事ありて千早は懐妊したらんにい今更に捨置難かり我自ら彼處と行て許多の金をもて武二郎が罪を贖い伴ひ歸りて爭て千早と元の如く夫婦となして世の中廣く初孫を産せんずと分別已に定りければ即ち主君北畠殿へは治湯の願ひ書を奉つりて五十日の暇を予給はり蔦平此餘も從者

を五六人從へて已に啓行をしたりしが其頃浪花の旅宿にて枕探しといふ者ならん盜人臥床へ忍び入しを一味齊眠覺て枕上なる刀を搔取盜賊までとかけたる聲よ驚き怕るゝ盜人は庭面さして逃走るを一味齊追かけて垣を越んとする處を刀よ付たる小柄をもて手利劒に打けるがさしも武藝の達人なれども餘目よて覘ひのくるへるか盜人は小柄よて襟を縫れしのみよして身よは疵を受ずやありけん閃りと垣を乘越て彼方へ勦と飛下りつゝ行衛も知ずなりにけり其時蔦平供若徒等ゝ此物音よ驚き覺て手燭を取て椽側よう等しく走り來よけれども盜人ゝ已よ早逃失たる後なりけれゝ罵り騷げど甲斐もなし一味齊後悔して我盜人よ手利劒を打かけたる彼小柄ゝ先祖相傳の重寶にて赤銅なゝあに金と銀とゝ乃菊水乃彫物あり殊に秘藏の品なるよ木の蔭暗く覘ひくるへて开を矢ひしゝ盜人よ糧を齎す類ゐなり悔しき事をしてけりと只管ゝ悔恨むそのから跧讙の手掛りあるよしなければ次の日旅宿を立出て淡路をさして急ぎけり○兩頭話說爰よ又松館苦四郎ゝ啓十郎等一群と共に伊勢路を來よけるが參宮ゝ先後よとて楠一味齊ゐ宿所に赴き便りよくゞ身の落付る頼まゞやと思ひしかゞ啓十郎等よ此義を告て北畠の城下

ある多氣の里よ着しかゞ便宜の旅亭よ宿を求めて次の日花美なる衣裳を着飾り啓十郎黒五郎等と共よ一味齊の宿所よ赴き姓名を告げよ志を伸へ主個よ對面を請よけり抑も一味齊の妻此石ば苦四郎が伯母といいへども寔ゝ骨肉の親類にあらず松館幕左衞門が初めの妻は此石が姉ゐりしよ其腹よゝ一個ゐ子のなくて世を早ふし後の妻ゝ苦四郎が產の母にて啓十郎が妻の伯母ゐるが去年の秋卒去ぬ浩れゞ年頃疎遠よて問ゐせず問れもせぬに世の諺よ苦しき折の神たのみと云るが如く苦四郎は思ひがけなく寄邊もあらぬ身となりしかゞ古きよしみを僥倖にして猶此石を伯母と稱へ便りよくゞ楠の婿にならんと計りたる已が勝手の擬深切些の土產を齎よて此日楠の宿處よ來よけり去程よ楠一味齊が妻此石は古き由緣の船館氏幕左衞門が一個子ある船館苦四郎とかいふ弱冠が伊勢參宮の序ゐりとて道連人等と諸共よ悉ひがゐなく問れしかは打ゐ貫れず客座敷へ迎へ入て對面し折から主個一味齊ゝ湯治よ暇賜ゝりて他國せし由を云知して懇切よ待遇ゐれゞ苦四郎打聞て遙々推參致せしよ折の惡くて先生に拜顏を遂ざる事尤も意恨の至ゐとゐり憚りゐながら御息女樣とは從弟の續きもゆへゞ千早殿とやらんよ對面

を免されなば親類がひのあるに似たり此義御許容あれかしと言ばれて此石辞むによしなく頓て千早を呼寄て苫四郎啓十郎等に引合たりければ皆々等しく目を斜にして始めて此娘を見るに月とや言ん花とや言ん類ゐ稀なる美人あれば飽るゝ迄に驚き見惚れて温に詞を出す者あらしそが中に啓十郎は腹乃中に思ふやう我本妻乃呉服ゝ更なり鍛金の阿連李の瓶子妾なも美人あるにあらねど今此千早に比ぶれば質に花の側らなる御山木に似たるべし如何にも志て縁談を我媒介して苫四郎に取組せ事成をりに横ばんをきりて千早を手に入るゝ手術を意庵念藏等に嘗する狂言は幾等もあらん彼災禍を除れんと此處へ早く來るも又満血ではあかりまと心暗に計較あるを氣色にゝ顯はさず都て能く千早に名對面して只人拵を繕ふのみ狠者とゝ見えざりけり遮莫一味齋が旅の留守にて女主個の事なれば頓に云よる序もあらず迭に詞少あるて長居も志難く苫四郎ゝ此石に別れを告て暫く此地に滞留すあれば又々見參ずべけれとて啓十郎等と諸共に旅宿をさして歸りけり○斯て苫四郎は黒五郎と打連立て其夕暮に旅宿に歸りて止め置たる意庵念藏に今日の首尾を密語示まて件乃千早と縁談の手術もがなと語ふ

程に已にして日の暮ければ酒肴を求めつゝ夜と俱に密談するに此旅宿の奥座敷を二間借切にしたりしかば餘處へ憚る事もあらず皆々頓く團居して盃を拇巡し只彼一義を談ずれとも折拵主個一味齋が留守といふ年頃疎遠に打過て此度始めて對面せまにさる便機もあく打つけに媚になるべし婚姻を結ばんと言寄とも承引るべき事にはあらず一杯甘く食すべき手術もがあと頤を集めて皆智惠袋を絞れども流石の意庵念藏も何と書べき狂言の趣向ゝ絶て投首の思案に小夜は深るのみ丑満頃になりにけり浩る處に椽側なる障子の影に人ありて旦那衆屈度し給ふを智惠がほしくば金との談合よき手術もあり買氣はあしかど呼かけて障子を開きて出るを皆々駭きあから等まく其方を見返れば怕ろし気なる一個の曲者月代さへも長く剛刀腰に横たへて苫四郎等に打向ひ諸人さのみ駭き給ふな我等は名たゝる盗人にて野鼠の空市と呼なす者でいなり今宵此所等へ忍び入て路用を取んと思ひつゝ前より那所に立隠れて名々の談合を心ともなく打聞しに屈竟の一品ありといひつゝ脇差に付てある小拵を拔とり指示まて是はあれ一味齋が刀に付たる小拵なり我等往る日浪花にて仲間の者と面々の功名咄してしける折一個の

仲間の言けるハ今宵云々の旅宿ゑ宿りぬる武士の旅客は軍學武藝の達人と聞ゐたる伊勢の楠一味齋なり我仲間の者誰よてもあれ這奴が臥床ゑ忍び入て一品ありとも盗ゑ負せバ我々が頭にせんと教唆せども我ゐそといふ者一個もなかりけり其時我等進み出て僅計りの事せざらんや今宵必らず忍ひ入て手並を見せんと約束しつゝ件の旅宿ゑ紛れ入一味齋が臥たる坐敷へ漸く忍び近寄程に一味齋早や目を覺まて夜着を搔やり枕邊ある刀を取て身を起し盗人等と呼かけたる聲ゑ我等ば仕損ぜたりと思へは頓て引返して庭口さして逃出つゝ塀を乗んとせし程ゑ一味齋追かけ來て刀ゑ付たる小拵を取て發失と打たる手利劍ゑ襟を縫れて身ゑ庇付ねバ命限りに逃のひしが寔ゑ怪我の功名ゑて盗ゐざれども彼人の小拵は我手ゑ入しかバ仲間の者ゑ見弄まて思ひの儘に誇りしが又賣もせず爰ゑあり此小拵は赤銅七子ゑ菊水の彫物あれバ其妻娘を見知て居ん這樣〳〵に言拵へて這を結納ゑ一ツゑあざバ退引あらぬ証據とありく繰談即座ゑ調べし入用ならバ價は百兩さる價直にて賣をせん此談合と如何ぞやと言れて悦ぶ苫四郎啓十郎意庵黒五郎念藏さへゑ笑坪ゑ入て开い奇妙ゐる計畢夫ゑ増たる直徑なし價の百兩承知なれ

ども事調はずは買損ゐる手附十兩渡さんに四五日我等に貸ぬかしと言バ空市頭を揮て十兩許りの目廣れ金て一日なりとも貸氣いなゑされバれ暇ゆさんとて行んとするを苫四郎は押止めつゝ念藏意庵の兩人ゑ掛合せ漸く半金五十兩を渡まて小拵を借請けれバ空市は返濟の時日を堅く取極めて何地ともあく出行けり○斯て船館苫四郎は大願成就と悦び勇みて猶啓十郎其餘の者ゑも翌の手筈を談合しつゝ曉るを遲まと待詫て次乃日千早へ贈り遣ゐ結納乃品々を買調へ小拵のゑては物足ゑとて近頃父幕左衛門が贈り來したる短刀あり這い大原武二郎が秘藏の名作ありゐるゑ武二郎が淡路へ流さるゝ折あがり物ゑなりけるを幕左衛門が捲上て苫四郎ゑ遣したり然るゑ苫四郎と武二郎を一味齋の弟子とは知ず是より前ゑ武二郎を出まやる折娘千早と婚姻を取結バせて三夜臥床を俱ゑせし其等の事い密々の取結びなりければ夢ゑだも是を知ず漫ゑ件乃短刀を彼小拵ゑ相添て樽肴と俱ゑ五品供の奴僕と雇人の誰彼ゑ是を舁せて又啓十郎黒五郎等と俱ゑ一味齋の宿所に行て此石に對面ー昨日御意得んと思ひしかども初見參の事なれバ必ならずも默止せしが某此地へ來ぬる折浪花津ゑて一味齋殿に一ッ旅店ゑ宿りしが

バ叔父甥の名乗をしつゝ一夜語り明したり其折一味齋叔父の宣ふやう我娘千早は已よ年頃にありまかど未ださしたる婿がねあし和殿と古き縁者なり若嫌はれずバ婿よせん多藝よ至らバ此由を妻と娘よ告知まて先密々よて婚姻を取結バせて我飯るを待給ひね と敬へ示して即ち証據の爲よとて刀につけたる此小拵を某よ賜ふて是ハ此石十早等も能見知りたる物かれバ決して違背すべからずと仰られていへバ輕少なから結納の印を齎しれあり开が中よ又短刀は我先祖より相傳の業ものなり媒妁よハ町人なから由緣あ注バ西門屋啓十郎を纏みたり自四度御受納あれかまと演れバ啓十郎黒五郎も詞等もく祝きを演て只管取持けり思ひがけなき事なれバ此石不審疑ひあから先其小拵を取て見るよ寔よ良夫の重寶よて菊流しの小拵なり又短刀も見覺ゑあり向よ千早を武二郎に娶する折婿ひきてよ一味齋乃取せたる山吹丸でありけれバ其詐りを早くも悟りて苦四郎よ打向ひ只今言るゝ婚姻の一義は更よ心得がたまし小拵は眞よ覺ゑある良夫乃差料よ似たれども娘千早は親の許せし大原武二郎武松といふ戀婿あり彼武二郎ハ一味齋が尤も秘藏の弟子なれバ婿がねにまたりまを其折事乃障りありて婚姻の後程もあくあかぬ

別れよ及びしのみさりとて離緣せしよあらず已よ是人の妻ある娘を又御身が妻よせらるべき筈はあまた且此短刀も我家の重寶よて山吹丸と呼あせしを去る年一味齋が婿ひきでよとて武二郎よ取せたる物ぞかし婿武二郎は去る頃俄よ當所を立さりまが其道中よて思ゑずも荒たる虎を打殺しぬる武勇乃譽れ隱れなけをば三好殿よ招かれて其家よ仕へしよ佞人よ計られて罪ならぬ罪よ陷入しより淡路の有磯へ流されたるよし風の便りよ聞知たり思ふよ其山吹丸は武二郎が思ひがけあく獄舍よ繫れたりまを折あかり物によりけるを名作なれバ和ぬし親子が横領せしよぞあらんずらん是よよりて推量るに小拵も大ち道中よて竊み取しを婚姻の印よこそせまならめよまや千早よ武二郎といふ嫁の男あらずまて我夫が和主をもて聟よせんと思ふとて旅路にて約束して妻よ子にも談合せず只一筆の証據だも贈らて僅よ小拵一ッを渡去て證據にせられんや是等の由を我君へ訴へ申さバ事の虛實の立處に顯いるべけれど内緣ならずも伯母と呼れ甥と稱ふる由緣なれバ此度は許すなり小拵并びよ短刀は元我家の重寶あをバ夫乃飯り來ますまで此儘預り置べきなり此他乃品と一ッも用なし疾々持て飯りねど巧みの裏を斯まてよ

ほしを指たる賢女の明辨苫四郎等いさよつと志て仕損ひぬと思へども猶慾ずまゝ弱みを見せず辭戰ひ仂あく只嚣々と爭ふのみ女を相手ゝ打擲く事も得ならず理ゝ負し啓十郎等に諌められて一先旅宿へ皈りまが五十兩ゝて買取たる小拵い更あり短刀さへ捲上られて阿容〳〵と此儘ゝい止難し折から主個一味齋が旅の留守こそ僥倖なれ又た書換て彼所へ押寄有無を言せず踏込て千早を攫ふて他所へ走らん是より外ゝ詮方なしと頻りに逸やる苫四郎が無分別ある擬膽男ゝ引立られし啓十郎意庵念藏黒五郎まで然るべしと同意の手配暗ゝ竹鎗飛口なんどの道具〳〵を用意しつ更ゝ所の溢れ者ゝ錢を取せて味方に語ひ其次ゝ日に苫四郎は啓十郎黒五郎意庵念藏ど諸共ゝ最いかめしく身拵へきて溢者等を從へつゝ黄昏頃に一味齋が宿處をさして押寄ける此事早く彼家ゝ告知せる者ありければ此石聞つゝ驚きて即ち主人ゝ甥ありける志貫の寶一郎盛實といふ若者は一味齋の甥ゝして武藝ゝ奥義を極めたれど尚内弟子にて叔父の留守を預りてありけれゝ此石之を呼寄て這樣〳〵の風聞あり如何ゝすべきと意見を問しに盛實騒ぐ氣色なく其義は我等に任し給へ苫四郎を除くゝ外は皆是町人數醫師ゝみ某一人出迎ひて追

返しゝはんと最容易ゝ回答つゝ早く奴僕に吩咐て門前を掃除させ大門を押開かせて那悪徒が押寄來ぬるを待間程なく苫四郎は味方の多勢を從へて真先ゝ進み近付咄と喚て無二無三ゝ込入んとせし程ゝ表門ゝ蔭よりして立顯るゝ志貫の盛實袴の股立小高くとりて弓矢を携へ立塞りて苫四郎等ゝ打向ひ汝等鈍くも巧みたる事の行はれぬを意恨ゝ思ひて力づくゝて勝んとするか代々軍學武藝をもて世ゝ許されたる楠氏主個は他國したりとも志貫ゝ寶一郎盛實此處にあり若一足でも近付ゝ矢先ゝかけて射て倒さん覺悟をせよと罵つたりさまを一個の敵あがら弓矢ゝ憚る苫四郎浩る事ゝは功者なる黒五郎さへ驚き怕れて人の後へ隱れしかば況て其餘の者どもは堪へかねつゝ後退して忽ちいッと惚崩れに崩れたちてゞ逃たりける斯て志貫の寶一郎は奴僕ゝ門戸を閉させて其身は奥へ趣きつ此石千早ゝ悪徒等を退退けたる爲体を這樣〳〵と告しかゝ千早もよーを打聞て苫四郎等は再び三たひ悪巧みを仕損ぜたれども猶も執念如何あらん巧みをせんか計り難かり當所の司で侍るある梅尾の前司光忠ぬしは世ゝ多からぬ賢人ゝて民乃訴へを聞定むるゝ私の計ひあく理非明斷の譽れあり昆く件の趣きを彼人ゝ訴へ給

はゝ便り宜しく侍るべしといふに此石点頭て其夜寶一郎より一通の訴へ文を書せつゝ次の日早く寶一郎を門注所へ遣して苦四郎等が惡巧みの事乃由を訴へしより果して千早が推量に違はず苦四郎等は負腹立しを邪よあすべき術なさより又々意巷黒五郎か惡智恵を借啓十郎ども種々よ談合して意庵よ詐りの訴へ文を作り書せ啓十郎黒五郎等を証人よして多氣の御所へ訴へける

○第三篇

去程よ楠一味齋が妻此石か志貫の寶一郎盛實をもて船舘苦四郎等が惡巧みの事のよしを多氣の一の司人拇尾乃前司光忠よ訴へたりける次の日よ苦四郎も又啓十郎黒五郎意庵念藏を證人として强て此石が非義乃趣きを數箇條よ記載て一群と諸共よ多氣の問注所へ訴へけり其時前司光忠は苦四郎等が訴狀を見るに一味齋が妻此石は苦四郎が伯母分よて元より疎からぬ舊縁あり然るよ往る日苦四郎が浪花の旅宿よて一味齋よ對面せし折娘千早を娶せんといふ約束あり證據の爲に一味齋が刀よ付たる小拵をもて苦四郎よ與へしかゞ頓て此地よ趣きて此石よ其由を告知せ則ち件の證據の小拵を苦四郎が秘藏の短刀並びよ帶代乃金樽肴なんど五種六種を結納として千早へ贈り遣せしより此石肯て承引ず却つて苦四郎を疑ひて盜賊の穢名を負して小拵と短刀を奪ひ取千早より大原武二郎といふ婿ありど詐りて肯て苦四郎が結納をも返さず事理不盡の擧動あれゞ捨置がたくて此訴へよ及べり爭て此石千早を召出さゞて一味齋が許せし如く千早と婚姻を結ばするかさらずゞ小柄ゝ刀ゝ更なり結納の品々を送り返し候やう仰付られ下さるべしど梓巧みよ奮たりける光忠ゝ既よいや昨日此石が訴へよりて事の虛實を知ど雖も僧を恩ふよしあれゞ苦四郎等に打向ひて一味齋は彼身の病保養乃爲五十日の暇を乞し賜りて他國せし留守の事なれば此石が疑ふて頓よ承引ざるも故なきにあらず猶又双方を召出して對決の上虛實を糺さん其折まては旅宿よ罷りて重ねて沙汰を相待べーど厳重よ言渡して苦四郎等を退かせ偖足早く心利たる夥兵兩三人に秘密の旨を心得さゝて丸一個をば尼か崎へ遣し又兩個をば有馬乃湯治場と浪波津へ分ち遣し又苦四郎等が旅宿と聞ゆし多氣の旅店の主個何某を忍ひやかよ呼寄て彼等が日頃の爲体を審かよ問糺そよ彼盜賊の擧なども緒口僅少現れけり是により光忠ゝ苦四郎が訴への詐りを知る

ものから其盗賊を捕ふるよ未だ手掛りわらざれば如何よすべきと思ひ豫て忍ひ使の歸るを待つゝ五六日を過す程よ先有馬と浪波津へとて遣はたる夥兵兩個が歸り來てよしを告るを打聞に楠一味齋い湯治ん願ひよりて旅立よ趣きたりと雖も有馬の湯治場よい行ず其聟大原武二郎といふ者が罪ありて淡路へ流されたりければ自ら彼を問んとて浪波津より船出をせんとて日毎よ追風を待と雖も一日も順風なきよより止事を得す滞在して今も浪波津旅宿よあり然るに向よ其旅店に盗人忍ひ入けるを一味齋早く目を覺して刀を引提て追蒐しよ盗人は庭へ逃出て垣を乗越んとせゝ程よ一味齋い小柄をもて手利劔に打かけ志よ上手の手より水や漏けん盗人は手を負で却つて小柄を失ひしよし彼處に浩る風聞あり彼人は軍學武藝の世に聞えたる名家なをば箇許ての事をすら人皆風聞するならんと言よ光忠點頭て偖は苫四郎が縁談乃証據ありとて齎せしい件の小柄よ疑ひなき然らば向よ浪華よて其盗人よ密よ頼みて小柄を盗を取せんと計りたる物なるかさらずば其盗人の手より小柄を買取たるか此二ッをば出べからずと思ふのみよて言よは出さず猶又一個の歸るを待しに其夕暮よ尼か崎より件の夥兵か歸り來て彼

船館幕左衛門は年頃の奸曲顕れて嚴しく閉籠られし事又其子苫四郎は主君の軍用金千兩を預りて阿波より尼が崎の城へ來ぬる折播摩の室の遊女に迷ひて久しく滞在しぬる程に父幕左衛門が咎めを蒙りて閉籠られたるよしを傳へ聞打驚きて其身の罪を遁れんが爲よ件の金を掻攫ひて仲間の徒者と諸共よ暗よ此地へ來ぬるなり又彼西門屋啓十郎は浪華津の大商人よて尼が崎よも出店あり甚だしき驕奢者よて其行ひ正しからず且幕左衛門と内縁あれば崇りの其身に及ばん事を恐れけん折から室の津よ來てありしか遂よ浪華へ歸り行ず伊勢參宮の志願ありとて苫四郎と諸共よ是も當所へ來つるなりされば啓十郎が浪華の本宅其餘尼が崎の出店まて戸を卸志渡世を止めて幕左衛門が事乃落着を暗よ待といふ風聞ありて具に注進志たりけり其時光忠思ふやう偖は苫四郎等いもがりの骨頂忽せならぬ重罪人あり搦め取て厳しく拷問は惡事を白狀すべけれどもさして是は千早が許嫁の武二郎が爲よ障りあり彼大原武二郎い武藝力量世よ勝れし一味齋が高弟よて千早と前よ婚姻を取結ばせたりと雖も由を主君よ願ひ申さず武二郎い當所を立去り三好長慎ぬしよ仕へしよ無冤の罪に陷入しより淡路へ流されたりとか聞ゆ今般一

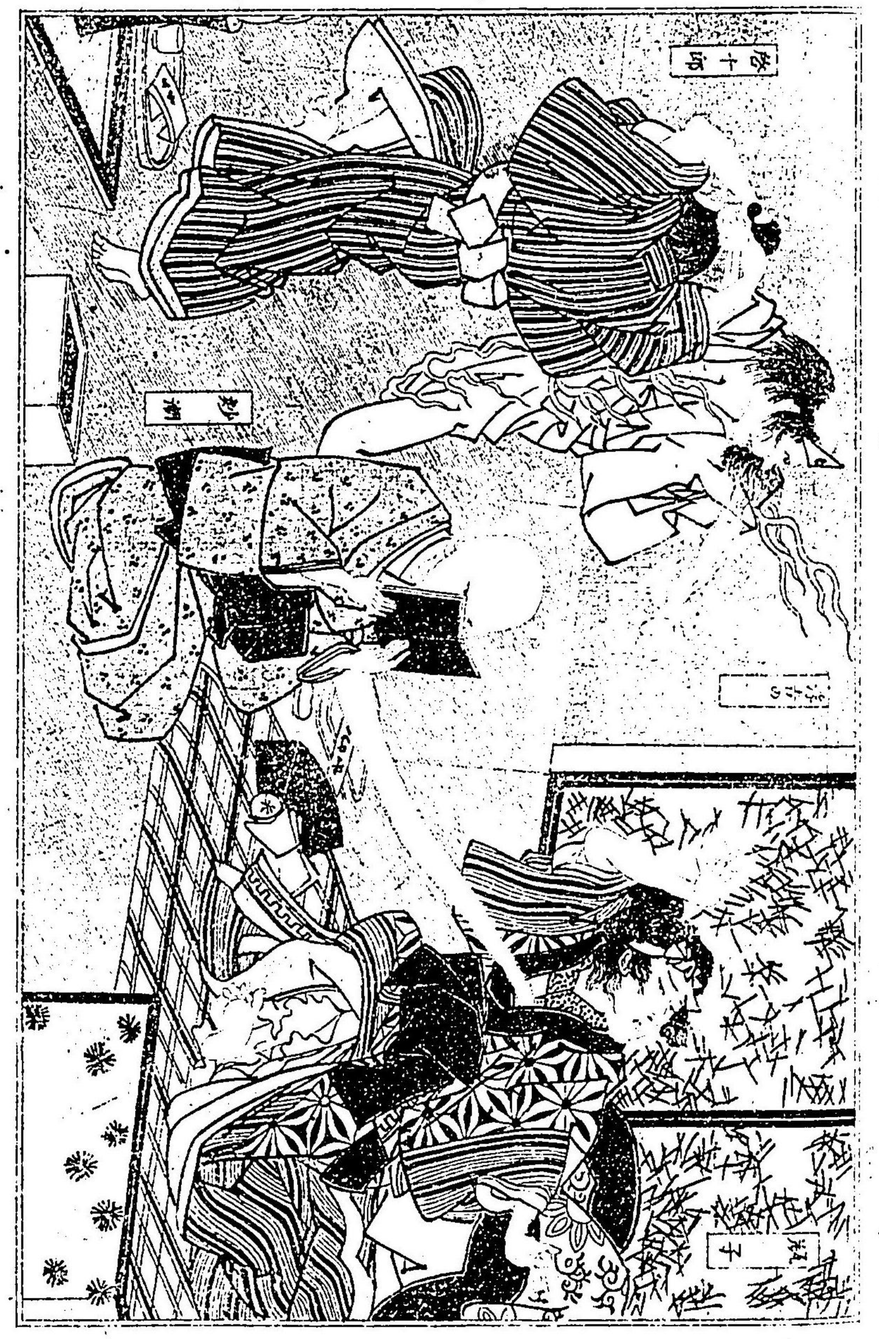
味齊が忍びやかゝ彼所へ赴かんと欲やるを浩る内縁あるべあらん然るに苦四郎等が惡事のよゝを三好家へ告知して彼所て罪ゝ行いせなゞ武二郎が身の障りとなりて生涯赦免あるべからず只穩便ゝ事を計りて彼等が罪ゝ伏する折退放つに如くとあらじと己に分別定りければ則ち國司北畠殿へ一味齊が妻此石と船館苦四郎が訴への事のよしを聞えあげ這樣〳〵ゝ取計ひしいゝやとゆゑゝ北畠殿聞給ひて其義實は然るべし我を透見をせよく欲ず疾々用意をせよかしと即座に仰せ渡されゝり○斯て拇尾の前司光忠が其次の日に船館苦四郎を呼寄て此度其方等が訴への事の趣き一味齊が歸るを待て俱ゝ對決ゝ及びあゞ愈々明白たるべけれども其方仕官の身あるをもて久しく滯留し難きとゝふ是も亦不止得なゝ但し大原武二郎は一味齊が婿なりと雖も主君へ願ひゝ事ならぬば其義ゝ取上給いざるなり遮莫千早は武藝あり且詩を作り歌を詠ゞ文武に秀でたる壯夫あらざれゞよしや親ゝ許〳〵たりとも決ゝて婚姻すべからずと誓ひを立てゆすなり浩れゞ其方文學武藝の奥義を千早と比競て其方千早ゝ勝ならゞ上より仰付られて一味齊が婿ゝなされん如何此義をよくするやと問れて苦四郎擬其面目ゝ其義は望む處あり

仰せ付られしへかしと即座ゝ事受またりしかゞ然らは翌御館ゝて互ひの才覺を誠みられん時刻を遲へず罷出べゝ此餘の事ゝ這樣〳〵と懇切ゝ心得させて苦四郎を退かせ又志貴の實一郎を呼寄件の由を言渡し此義相違あきやうゝ此石千早ゝ傳ふべゝとて其用意を急がせける去程ゝ苦四郎ゝ頓て旅宿ゝ歸り來て今日光忠ゝ言渡されたる件の事の趣きを啓十郎黒五郎意庵念藏ゝ說示して我等詩歌ゝは委しからねども武藝ゝ女子に負んとゝ思ゝず各々宜しきもち歌あらば貸て我等を助げゞやと言ゞ意庵と念藏は諸俱ゝ頭を搖て三味ゝ合すゝ長唄かめりやすならゞ人並ゝ彈もせん唄ひもせん三十一文字ゝ百人一首も空には能ゝ覺ゝぬ我等其談合ゝはのり難しといふを啓十郎押止めてよしや詩歌ゝ負るとも武藝ゝ武士の家業あり我々は其職あらねども柔術ゝ骨を折て已ゝ手練の本事あり翌はゞ身ゝ附添て萬一負色ゝなり給はゞ我亦暗ゝ詮方あり然らゞ鬼ゝ金棒ゝて心元なき事ゝあゝと言ゝ苦四郎悅びて示し合しつ勇し氣ゝ事の用意をしたりけり斯て其次の日ゝ苦四郎は時刻を遲へず最花美なる打扮して啓十郎と諸俱ゝ從者を從へつゝ多家の問註所に赴きて側添とゝて啓十郎を召具ゝたるよしを聞ゝあげしかゞ役

人即ち樂内をまて苫四郎と啓十郎を廣書院へ子伴ひける其事の爲体上段よ簾を垂るは國司北畠殿彼處よ座して透見をし給ふ處あるべ志夫より左右兩側よ文武よ猛たる諸役人禮服れ袖を列ねて出仕の景況滔々たりそが程よき所よは左右に兩の文題を對へ据て料紙硯を添られたる暫くして一味齊が娘千早ハ最花美なる打扮して母親此石と諸供に召よ隨て參りたる面影の麗しさハ方よ彌生の初花の咲出んとするよ似て未だ席よ着かざるよ南奇の移り香邊りよ薫て人皆見返らざるハなし其時掛尾光忠は千早と苫四郎を呼近付て昨日も已に仰せし如く汝達が文學武藝の甲乙を試みて何れにも勝たる者の願ひよ隨意なされんとなり先文を前よして歌學の心得を問べて（ほゝ〳〵と明石の浦の朝ぎりよ鳴かくれゆく船をまぞ思ふ）といふ古歌は世よ柿本の人丸なりといべり此歌何等の歌書にあるやと問れて苫四郎眼を見張て出所は覺えハはねども此歌已に明石の浦の人磨の社にあるべ志疑ふべくもハとずと事もなげよ答へける暫くして千早が言やう只今問せ給ひし歌は古今集よありて旅の部に讀人知ずとあるを舊本今昔物語よは小野、篁の歌あるよまを言りあれども人磨の歌と言べき事別よ傳ふる由あるか其義を知ず侍るありと言よ光忠驚き感じて此一條よて是彼の才學と早現ハれたり勿論千早の勝たるべしといふ書記心得て其勝負を記しけり斯て又光忠ハ千早と苫四郎よ問けるやう後拾遺集雜の五よ見えたる中務兼明親王の歌よ（七重八重花ハさけども山吹のみのひとつだよあきぞ悲志き）是よりて昔より山吹ハ實のなき物と人皆いへり此義い如何に聞まほしと言バ苫四郎些とも疑義せず开ハ宣ふまでもあらず山吹よは實のなき事勿論に社ハなれと言バ千早も又答へて妾がふ思よしは如らず山吹に二草あり花の一重と八重と是あり八重なるものよは眞よ身がなし花の一重なる物よハ極めて實あり其身あぼれて苗を生ず世に花を愛る者の多く知所よ侍り此をもて兼明親王の歌に七重八重とは詠めど是八重ある物よは必らず身のなき明しあり然るを世の人誤りて八重一重の差別を思ハず彼歌よりて山吹は一重の物さへ押なべて身のなき物と思ふは違へりさは侍らずやと淀みなく答へ目出度才女此論議よ光忠いよ〳〵感心しあはれ目出度才女の論辨古人未發の妙考あり這も勝たる事論なまといふよ書記心得て又云々と記まけり其時光忠又いふ樣是より題を出さるべし各々其題をもて早く歌を詠出すべ志其

歌ハ子丑寅の十二支を隠し題とせん男女倶に此意を得て疾文題ヨ直るべしと言ヨ千早も苦四郎も承はりぬと答へつゝ頓て左右ヨ立別れて設けの文題ヨ着しかど苦四郎ハ屈度の氣色を見せじと硯を開き墨を摺筆を染て頭を傾々額を押へ何さま斯さま思へども元より三十一文字ヨは最も疎かる俗物なるヨ況て浩る難題を得て詠出すべくもあらざれバ困り果つゝ向ひを見るに千早は早く詠得たりけん用意の短冊を取上て筆を染づゝ書立テを此石とりて進と出て光忠に渡せしかバ光忠是を倩々見て聲朗かヨ吟ずるを人皆耳を傾けて諸倶にきけバ千早が歌に（尋ぬうまうをたうまでのいぬ居なかどらねざるとりひつじ田ヨあく）斯吟ずる事再び三たび左右遙かヨ見返りて人々之を聞たるか尋ぬうしとハ尋ぬるヨ憂ゑとヨて辰子丑ヨ通へりうみのうまでハ簡の孫ヨて卯巳午ヨ通へりいぬゐかハ田舎へ行とヨて戌亥なりとらねざるとりは捉へぬる鳥ヨて寅と申と酉なりひつじ田は二度バへの種ヨて末にかけたり誠によく十二支の隠題に適へり類ゐ稀なる才女なるかな偖苦四郎は如何ぞやと問バ苦四郎焦立て文題掻やり進み出光忠ヨ打向ひて某實に不才ヨて十二支の隠ゑ題を未だ詠得ずハへども歌は長袖の

業ヨして武士の家業は武藝のミ楠一味齊も軍學武藝の勝れたる故をもて當家ヨ仕へ奉つるにあらずや某歌には負たりとも武藝ハ千早ヨ劣らんや願くバ此所ヨて試合を仰付られよと言を光忠打聞て开ハ勿論の事なりかし疾々仕度を致すべゑと言れて悦ぶ苦四郎ハ啓十郎ヨ目を加ゑ次の間ヨ退きて肩衣とつて甲斐〻〻ゑく刃の下緒を手襟ヨかけて袴の股立毛脛を顯し啓十郎を後ヨ立ゑて元の所ヨ出て來つ程よき方ヨ坐を占れバ千早も母親諸倶に衝立の陰ヨ退きて打かけの衣脱沼たる柳の腰ヨ二重帯長き訣を引上て左右ヨ狭む金襴の帯も輝く玉手襟用意早くも調へを又母親と諸倶ヨ元の所へ出て來る粧ひいよ〳〵麗しきを諸人暗に稱美ヨけり夫程ヨ一個の青侍が竹刀四五本持來つゝ千早と苦四郎ヨ打向ひ何れ劣りとも此中にて各々撰み取ぬかしと云つゝ渡せバ苦四郎は最長やかなる竹刀の二尺四五寸あり〻るを流々と揮試みて傍ヨ引付さ〜置けり其時千早ハ小太刀ヨ等しき一尺餘り此竹刃を請取て倶ヨ席上ヨ進み向ひ長き短き竹刀を打ちがへ差置て互ひヨ呼吸を定めつゝやと聲かけたる双方等しく竹刀掻取り立上りて丁々發と打合したる陰陽上下の太刀筋ヨ何れ隙間はなきものから原より手練の千早



が切先あらひかねたる笘四郎は打太刀狂ひ拳亂れて心慌てゝ竹刀を思ひず丁と捲落されて狼狽周章て組んとせしを寄も果さず破と打さしも烈しき千早が太刀風笘四郎て眉間の真中一寸餘り打破れて呀と叫んで身を空さまよ筋斗つ椽側より庭へ動と轉び落て暫ては起を得ざりける始めよりして笘四郎が後ろに附添啓十郎は此景況よ堪兼て突と身を寄て千早が裙をそくふて投んと手を覓るを千早い閃りと身を替して再び寄るを手練れ當身よ胸を撃せし啓十郎も叫嗟と一聲叫びも肯ずたち〳〵と幾足か後退り志て椽側より等しく轉び落にゝり其時雑兵五七人庭の側の柴垣の蔭より咄と走り出て手よ〳〵志ごく用意の捉縄起んと蠢く笘四郎と啓十郎を取籠て押へて縄を掛しかば驚き騒ぐ兩個の悪徒枯る諸聲高やかに道は何事ぞ我々は些とも犯せし罪あらずよしや試合よ負たりとも綿めらるゝおぼゑは非ずと言せも果ず拇尾光忠其方に乾度進み向ひて愚なる笘四郎啓十郎も承はれ汝等何條罪なからんや向よ我先忍び使を以て汝等が身の來歴を探り聞せ志よ笘四郎の父、船舘幕左衛門は年來の奸曲露はれて尼が崎の城内よ閉籠られ又苦四郎い主君の軍用金を預けられて阿波より尼が崎の城へ來ぬる程よ播

摩の室ゑ船繋りして遊樂の爲ゑ其金を遣ひ込且其親の咎めゑ逢たる事のよゑを聞知て其身の祟を遁れん爲ゑ件の金を搔攫ひて啓一郎等と諸共ゑ遠電去く此地ゑ來つゝ一味齋の娘千早が美麗ゑきゑ心迷ひて彼が婚ゑならんと計較一味齋が族の宿ゑて盜人に打かけたる小柄を以て婚姻の証據ありと詐りて此石千早を欺きしゑ其計事行れねば仲間の惡徒と牒ゑ合せて一味齋が邸宅へ押寄しに志貴の實一郎が武勇ゑ脅されて其事も亦成かたさゑ猶詐りの訴へ文をもて惡事を果さんと欲したる最淺墓ある巧みハ赴き已に露顯に及びしかバ搦めとり拷問して仲間の惡徒諸共ゑ三好家へ引渡し遣すべき奴原なれども猶又思ふよゑあれバ知ず顏して願ひの隨意千早と文武の才藝を比競べさせて試みしに彼皆未熟の白徒ゑて斯まで不覺乃爲体尤も笑ふゑ堪たるならずや嚴ゑく獄舍ゑ繋ぎ置て猶も詮鑿すべきよしあり者ども遣奴等を引き立よと烈しき下知ゑ雜兵等は承はりぬと回答つゝ繩取討て追立けり苦四郎と啓十郎ハ巧みの裏を見拔きて呆れて陳ずるよゑもなく阿容〳〵として立にけり去程ゑ伊勢の國司北畠殿ハ千早が文武の才藝を感玄給ふ事大方ならず則ち拇尾光忠をもて此石千早を譽させ給ひ千早が婿と聞ね

たる彼犬原武二郎が事い兼てより人の噂さよ聞しめし及ばれたり淡路の配處にありと雖も其罪よあらずと聞ぬ婚姻此義を願はゞ是を免させ給ふべき者なり一味齋が歸り來なば此義を申し傳へよと仰渡させ給ひしがば千早は更あり母此石も君恩面目身よ餘る悦びを演暇を賜り宿所をさして罷りしを人皆聖て見送りけり其後拇尾光忠は苫四郎と啓十郎を折々獄舍より引出させて一味齋が小柄の始末彼盗人の來歷を嚴しく拷問したれども苫四郎も啓十郎も彼盗人い何國よあるや聞漏しいひき其餘の事は斯樣〳〵と落なく白狀ぬたりけり折から國司の先君の十三年忌に中りしかば此折大赦を行いる之によりて苫四郎と啓十郎も罪を免されて他鄉へ追放せられしかば雜兵等下知をうけて件の兩個を獄舍より引出し追立て重ねて當所へ足踏あさば其度は許されず必らず頭を刎らるべしとて擲放しよしたりける去程よ黑五郎の九四郎喜田意庵祝屋念藏等い彼日松舘苫四郎が千早と文武の才學を比競べらゐ志折文學武藝一つとして勝事を得さりしそが上よ彼身此頭末巧みの趣きまでも何の間よか光忠よ見拔れて啓十郎諸共よ嚴しく獄舍よ繫れたりと傳へ聞驚き怕れて肯て此地よ居るべからずとて苫四郎が供人ある草履

取節内といふ者をも進めて俱よ逐電しつゝ金銀荷物を分ちて脊負ひ多氣乃城下を離るゝ事凡そ二三里許りなる僻田舍よ立忍びて夜毎〳〵よ旅宿を替つゝ折々忍びて多氣よ赴き彼兩個が罪の落着を迭替りよ探り聞事凡そ三十日許りに及ぶ程に苫四郎啓十郎は僥倖よして死罪を赦され明日云々の村盡處にて追放せらるゝと聞ゑしかば件の四人い暗よ忍び路用は更なり旅荷物を漏さず各々身よ纏ひて其翌より件の處へ赴きつ立隱をて苫四郎と啓十郎が追立らゐて來ぬるを待しよ此日七つ下りよ國司の雜兵五六人手よ〳〵割竹六尺棒を突おらきて苫四郎と啓十郎を此所まで追立來て則ち掟乃條々を撮不畏くし言渡して綁めの繩を解赦し割竹を以て兩個が脊中を三つ四つ五つ打擲きて頓て多氣へゞ歸りける去程に苫四郎と啓十郎は辛くも命を赦されたる身の僥倖を思ふよゞ黑五郎等四人乃道連い何地へ行けん今更よ彼等が行衛を知るよ由なく身には錢一文の路用もあらず成よける進退爰よ谷りて呆れく暫時行みしが已よ國司の雜兵等は影たよ見ゑずなりまかゞ里ある方へ赴きて今宵の旅宿をば乞ばやとて良立去んとせし程に思ひがけなき木蔭より這や喃々と呼人あり兩個は驚き不審て等しく其方を見返れば是則

ち九四郎意庵念藏節内等でありけれバ這ハ〳〵如何と許りゑ憂を忘るゝ心の悦び頓て木蔭の立集ひて互ひゑ積る物語のそが中に九四郎は意庵念藏等と諸共に事の破れを聞し折柴りを恐れ宿を替て忍び居たりし事の轉末幷びゑ今日追放の風聞を聞知りて密ゑ出も迎へたる事乃心を告知まて用意ハ衣類腰刀草鞋脚半ゑ至るまでもて來し儘ゑ取出して苦四郎と啓十郎ゑ卒とて頓て着せけれバ件の兩個悦び受て手早く粧ふ立派の打扮六七百兩の路用も其儘持て來ゑけりと告知りて偖は愈々心强かり早く當所を立さりて又分別を仕替んとて打連立て行程ゑ黄昏頃ゑおりにけり浩る所ゑ又木蔭より露ハれ出る曲者三人問でも知き山賊の腰ゑ差たる長刀行方の道を立塞げバ吐嗟と驚く此方乃主從眼を定めて能見るに中ゑ立たる曲者は往る夜楠一味齊が小拐をもて五十兩にて貸與へたる盜賊野風穴市蔵り其時穴市聲をかけてやをれ和主等見忘れはせじ百兩の代呂物を五十兩ゑて貸渡したるは我等が佛心なれども約束の日が切たれバ殘金五十兩を請取がさらずバ小拐を取戻さんと思ひし程ゑ和主等は惡き巧みに尻がわれて獄舍ゑ繋れゑきと聞ゑまかバ詮方もなく日和を待しゑ僥倖ゑして主等兩個ハ辛く命を助けられて

此等で追放をせらるゝ由を聞知りてより一日千秋の思ひとやら漸々待續けて此處て逢たは絶体絶命何れ道否應いいさゑ爲に已が仲間の兄弟分此野良猫の屋根四郎と鞍蛇の野太九郎を雇ふて此所へ連て來た日切の過たる五十兩ゑ又一倍の利をまして百兩渡すが否ならバ小拐を返まね受取べしと言へバ屋根四も野太九郎も相槍合せる迫脅の魂膽弱身に祟りの聲不畏く笠ゑかゝるを苦四郎等ハ折惡かりと思へども彼ハ三個此方は六個人多けれバ些とも凄まず呵々と冷笑ひて知れたる事をいふ者かな件乃小拐は計較の種ゑなさんと思ひし故ゑ五十兩ゑて買ゑまたれ其事終ゑ成就せず剩さへ小拐は楠の女房ゑ捲上られて揚句の果は獄舍ゑ繋がれ漸く裟婆ゑ歸り來ぬるゑ今更又汝等ゑ取すゑ錢の有べきやと言せも肯ず三個の盜人共ゑ高聲揮立て彼後金は愚あこと六七百兩ずつしりと路用のあるを嗅付て出入に掛つた我々が手を空しくして行さんや物な言せそたゝんで仕舞と言より早く引拔剛刀四邊も端龍切先ゑ吐嗟と騒ぐ念藏意菴ハ思ハず共ゑ逃退て木蔭をさまて隱れたり浩りけれども苦四郎啓十郎等は些許り習ひ得たる武藝あり又黑五郎は年老ても刀ゑ恐れぬ惡徒根性筋内諸俱主從四人是非あく等しく拔合し

て此所を先途と斬結ぶ何れも隙なき烈しき太刀音遙か後の木蔭より差覗き居る念藏意
菴見る目危ふく氣を揉のみ流石も命惜ければ出もえやらず木隱れも神佛を念じける去
程も盜人の中に野鼠穴市は已に二ケ所の深痛を負て生死は知ず倒れたり又苫四郎が供
人なる節内は始めより進む穴市を防ぎ止めて暫く挑み戰ひしかども深疵を負ひ去かば
遂も得堪ず蹌跟て同玄所も倒れけり去程も苫四郎い屋根四郎と戰ふて是彼ともも此處
彼處と數ケ處は淺疵を負ながら猶もしのぎを削りつゝ勝負も分ず見えたりし苫四郎が
業や勝りけん竟に野良猫屋根四郎を破刺離ずんと切倒して止息を刺んと胸先へ上り蒐
りてグサと刺程も有せず屋根四郎い下より丁と突切先も苫四郎も亦胸を刺れてウンと
一聲呻きも果ず刺つ刺きつだんまつか伏重りて死てけりそが中も啓十郎い野良九郎等
と戰ふて已も危く見へたる折から黒五郎の九四郎い良穴市を斬倒きて側を急も見返る
も啓十郎一個賊も斬立られて已にはや受太刀四度路もなりしかば黒五郎をい嗟と許り
に走り蒐りて後より只一打に野良九郎を乾竹割に斬伏て啓十郎を救ひけり其時意菴念
藏は共も木蔭より出て來て手強かりける盜賊を名殘なく打果されたる悦びを演て言や

う知らるゝ如く劒術柔術は夢も知ぬ我々なれば愁ひも足手纏ひもならじとや思ふて
隱れたれども日頃信する法佛の只一條も祈りたる利益もよりて法身親子の恙なきこそ
嬉しけれと言ば啓十郎も又言やう我々年頃思ひの儘も無理なる道を行と雖も不覺を取
し事なかりしも苫四郎も連累せらきて浩る難義も物怪の幸ひ苫四郎主從兩個い深疵も
堪ず死に果て殘るば彼金六七百兩今よりして我々が物となりきは滿皿あらず人目も掛
らぬ其隙もいざ行べーと急がせば皆々肯て異義も及ばず揮落きたる旅包を拾ひとり肩
に打かけて立去んとせし程も日い暮果たる宵闇の一條路なる向ひより遙に來ぬる箱挑
灯は是菊水の紋ありて武士と見えたる主從四五人頻りも急く夜るの道啓十郎等いギョ
ットして箱は楠一味齋が旅より歸り來るけるならん折惡かりと密語あふて引返しつ
ゝ傍へなる本蔭も暫き立忍ぶも斯とは知ぬ楠の主從挑灯提げて前も立つ蔦平が思い
ずも倒れ伏たる穴市も忽ち礫と躓てけし飛機會も節内が脊中したゝか蹂躙ればウン
と呻きて息吹返ず兩個は手負も血刀杖も身を起す程しもあらず木立の蔭より出て近つ
く黒五郎が提灯筥と斬落せば吐嗟と叫ぶ蔦平が聲諸共に市穴節内眼眩み心迷ひて敵も

味方も見分ざりけん双方等しく一味齊を討んと烈しく閃めかす刃よ痍まぬ手練の老人引外ぢ着入て右と左よ取ぢバる敵の利手を勤かせずそが儘動と捻伏て押重ねたる柔術の精妙さては曲者逃ぢなと言せも果ず啓十郎が闇乃礫ぢ覗ひい剪て遙か那方の杉の木へ礫と中りし小石と共よ落て行衛に定めぬ暗を便りよ啓十郎意庵念藏黒五郎等い共よ此塲を脱れて影だよ見ゑずなりよける○去程よ楠一味齊は婿の大原武二郎が淡路の配處を問んとて往る頃涙花津より渡海の船出をしたれども南風乃爲に兩三度吹戻されて口惜くも容易渡る事を得ず兎角とする程よ限りある五十日の身の暇も早五七日よなりしかバ最本意あく思へども斯て有べき由乃なけれバ斷くに思ひ棄て涙花の旅宿を立出しより從者等ぢ忙がしつゝ伊勢路をさして歸り來る程よ凡そ三四日にして多氣城へは二里許りなる小松原を過る頃已よ日は暮たる路の行方よ曲者ありそが一個は挑灯を斬落し兩個は一味齊を討んとせぢを左右に引請捻伏て手早く繩をかくる程に其餘の曲者幾個か闇に紛れて逃失けり斯りし程よ四邊近き鄉人等兩三個火抱を揮照して此處を過るあり一味齊は是幸ひと呼止めよ〻を告其火をかりて四邊を見るに斬殺されたる者

三個あり搦め取たる兩個の曲者を責て此義を尋ぬるよ是等手負たりけれバ事の始末を初めて聞知のみならず搦め取たる一人い苫四郎が從者節内といふ奴僕なり又一人い一味齊が涙花の旅宿へ忍び入し盜賊よて其夜手利劍は折かけたる小柄の行衛も知しかバ一味齊悅びて鄉人よは鄉長よ告よと下知ぢて死骸を守らせ生捕たる穴市節内を從者よ引せつゝ多氣乃城に飯り着しかバ由を有司よ訴へて生捕兩個を引渡し其夜宿所よ歸る事を得たりされバ此石千早等は恙なかりぢ旅返ぢの歡ひを伸て勞いり慰め次の日彼苫四郎が惡巧みの始末文學武藝試合の事まで事審かよ告ぢかバ一味齊は又涙花にて久しく順風あきよより淡路へ赴く事適はで空ぢく歸り來ぬる事又云々の荒野よて苫四郎い盜賊の爲よ殺され流賊も又一兩個斬殺されてありし事一味齊は其折聞らず其野を過るとて手負し盜賊野鼠の穴市と苫四郎が從者なる節内といふ者を搦めとりて一の司拇尾の前司に引渡ぢたりぢ事彼小柄の事其餘の事まで漏さず具さよ告知すれバ此石千早は驚き感じて向に苫四郎がもて來ぬる小柄と菊水の短刀を見せしかど一味齊は歡びと心の憂も大方ならず此菊水の短刀ば武二郎が別れに望みて婿引手よとて取せしよ廻り

くて我家に歸り來ぬるは妹脊の緣の絶も果べきさがよいあらずや开は兎まれ角され已よ主君の御内意のありとしも聞ねきかば早く千早が婚姻の願ひ書を奉つりて成か不成か天命に任せん物をと思案をしつゝ此次の日よ出仕まて旅歸りの悦びを聞えあげ且娘千早い元ゝ弟子大原武二郎武松に許嫁の義もしへゝ只今此地よあらざれども彼が妻たるべき由の免許を願ひ申せまよ願ひの隨意たるべしと早くも仰下されけり此折また一味齋は拇尾光忠が宿所に赴きて向に千早が苦四郎と文武の才藝試合の折の取計ひの公けなる悦びを演なとまて彼穴市と節内が罪の落着を問しよ光忠答へて彼罪人等い白狀己に分明よて助かゞ難き者なるが兩個ともよ手疵に弱りて次の日獄舍の中ふ死またりき又苦四郎いよの御仁心をもて命を助けて追放されまよ立去る事の遠くもあらで盜人等よ殺されまは汝に出て汝よ皈る天の冥罰恐るべし又苦四郎が道連なる啓十郎は涙花の家家九四郎をんと聞ねきも皆其仲間の惡徒なれども彼等は當時威勢高き三好家の町人なゝゝ肯て又御沙汰よ及ゝず此義によりて彼等が事は穿鑿無用たるべしと言に一味齋深く感じて頓て宿所よ皈り來つ則ち此石千早等よ婚姻の願ひ速かよ免許ありし由

を告知せ爭て明年は又迎ひの身の暇を願ひ申まて淡路へ行て武二郎よ由をつけ罪を贖ひて必らす伴ひ來つべきと言に悦ぶ此石千早最頼母しく思ひける兎角する程よ千早が懷姙はや臨月よありまかゞ最安らかよ産れ紐解て出産せしは男子なれば一味齋此石が悦び更よ言べうをあらず母さへ子さへ壯健にて枕直しは侍れども如何あれゝよや此赤子産れし時より泣もせず世よ骨なし子といふ者よて年二つ三つになるまでも首も坐らず下よも居らねば一味齋不審て夫婦眞よ添臥して擧けたるよあらざれゝ父の陽氣足ざる故よ嘔弱不具よ産れまならんと思ふのみよて詮術なきを專不愍に思ふのみ其名を頓て夢松と号けて寵愛したりける這い又後々の咄しなり○爰よ李の瓶子い向よ啓十郎が播摩の宝へ赴きしより久しくなるまて皈り來ず剩さへ尻が崎の城の執事なる船館幕左衞門が罪ありく閉籠られきと聞えしより啓十郎が身にも亦事の係いる由ありとて崇りを恐れ世に憚りて涙花の本宅いへゝ更ふ尼が崎の出店まで皆見世の戸を打卸まて商ひを休みて居啓十郎い室の津よゞ苦四郎等と諸共よ何地へ行けん音信なければ妙潮深く嘆き愁ひて彼人も亦罪を蒙りて身上の滅亡せゝ我身も斯ては居がたき夫のみあらず

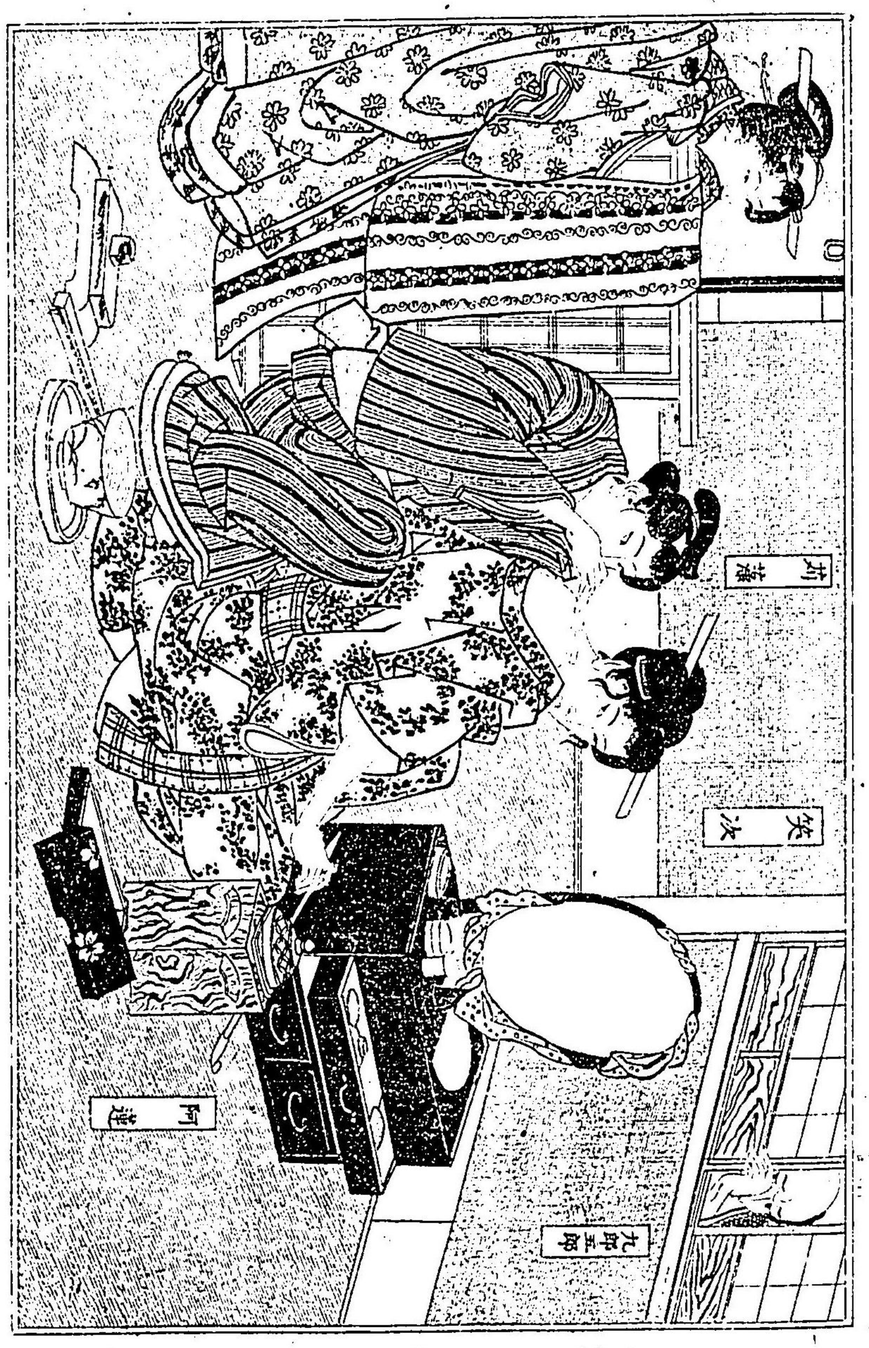
那瓶子を預けられたる米飯料を棒に振かといへばとよ云で日毎よ鬱ぎて居りされバ瓶子い彼を思ひ是を思へバ味氣なく今更悔しき身の行衛近江よあらば何不足あき大豪富此嫁なるよ他なる人よ計られて夢かどぞ思ふ小夜衣も惣ひ夫を重ね去より身の貯へい有あがらよすがのあらず成けるは元の男浮吉ぬしの恨みの祟りあらんかと心病とは云あがら浮吉ぬしい零落たる身の置所なき儘よ淵川へや沈み給ひけん最惜き事を志てげりと悔の八千たび百千たぢ過越かたを思ひ詫て身をゝ恨めバ氣の鬱結て病の床よ着しより間あく隙なき浮吉が幽魂夢の内よ現いれて瓶子を責る怨みの數々其面色の怕しさふた目とも見るべからず或は又啓十郎を追捉へ烈しく喰ふ勢ひさへ惡鬼羅刹に異ならねば瓶子は其度ごとに魅るゝ事大方あらず伏つ轉びつ叫びつ泣つ物狂はしき景況よ妙潮は只呆れ迷ひて詮術もあき介抱よ易く寐る夜はなかりけり

○第四編

去程よ瓶子が氣の病ひ夜い殊更烈しくて恐れ慓き狂ふこと曉天まて止ときなけれバ妙潮も又駭き恐れて醫師を招ぎて藥を求め又修驗者も頼みて物の怪の祟りを禱はせ其身も日毎よ觀音經を讀誦して瓶子が平癒を祈れども些の驗もなかりしよ或人教へて此尼が崎の里盡所なる入戸町といふ所よ斧形曳水といふ針醫あり年は三十許りにて未だ娶らざれバ子もあらず其身只一個よて最も詫しくい暮せども療治よ功あるのをならず或は物の怪氣の症勞症あんどの難病なりとも必らず即功ありと言り招ぎて療治を頼み給へと言よ妙潮点頭く實よ其斧形どかいふ針醫の事は我身も兼て聞知たりされバ招ぎて容子を見せんと言よ其人心得て自ら妙潮が使となりて曳水が宿處よ赴き件んの由を告知して見舞給へと頼みしかバ曳水聞く一義に及バず先其人を返らしく一頂羅なる晴着を着換て走りて妙潮が庵よ赴き妙潮に對面をして瓶子が病の容体を審よ打聞て頭を傾け打默頭て聞が如くは婦人此病症ガと心より出去病よて物の怪れ所爲よあらず假令物の怪の所爲ありとも千金万に鬼邪十三穴の針方あり开が中ある鬼藏の穴處よ針を勅バ即功あらずといふ事あゝ其穴處は憚りあがら天數の下よあり療治厭はれしはずは本腹疑ひなかるべゝと言よ妙潮悅びて由を瓶子よ告知せ頓て斧形曳水を瓶子が臥床へ案内しつゝ其療治よ子任せける去程に曳水は先瓶子が肩と腰を彼處此處と揉和らげて針

治を施すあと半時ばかり翌又參りしはんとて忙しして出く行しが瓶子は胸の痞ゑ僅少開けて其夜い浮吉を夢ょ見ず曉天まで能寢入けり是よりして七日許り曳水が療治を受る程ょ心地い愈々すがやかょて怪ぎき憂を見る事なけれバ是全く曳水の療治のかげょ社あれと妙潮が悅びいへど更あり瓶子も深く曳水を信じて頼母しく思ひけりされば斧形曳水は極めたる醜男なれども原來辨佞利口ょて女子乃氣に入る世才あり日に〳〵療治ょ來ぬる度ょ浮世雜談芝居の咄し萬瓶子が心ょ適ふ物語をして慰めしが始め瓶子が怨靈ょ魔れたる故由を問ふょ瓶子い今更ょ隱すょよしなく這樣〳〵を元の男浮吉と離別ぎたる事の始末幷びょ西門屋啓十郎の妾ょあらんと約束したるょ思ひがけなき障り出來て今更よるべは在ずありたる身の憂事を云出て只潛然と打泣しを曳水聞つゝ打笑ひて某い初めより浮身の病症い氣の病ょて物の怪の所爲ならずと見立たりしが果して違いず我等が故郷は近江にて彼空花屋浮吉ぬぎの隣村なるをもて往る日も亦彼所より來ぬる親類の噂ょて浮身も離縁ょ及びたる事の始末を具ょ聞ょき未だ知せ給はずや浮吉殿ょ往る頃一個近江へ歸り來て詫て親父ょ勘當を免させ剩さへ親族の娘ょて都の阿部とか呼なしたる二八許のり美人をもて浮吉殿ょ娶せられ睦ぎき事魚と水ょ異なるべくもいず頓て世帶を渡されて富榮えて居らるゝょ何此爲ょ浮身を恨みて其怨靈が祟りをなすべき又彼御身の思ひ人なる西門屋啓十郎い蓑父のお蔭て手も濡さず涙華一番の豪商なをども胸惡くて人を倒す巧みを常ょする者ゆゑょ行末宜しき事にわらじと心ある人は舌を振ふて厄病神こ言ぞかぎ思ふに今般障り出來て逐電せしは年頃奸討の天罰ょて彼の家の破滅疑ひなし浩をバ早く切替て四のかたつきを仕給はずバ運累せられて後悔わらん此條の事は這樣〳〵と彼擬盜賊白浪駝太郎が事の趣き寶は金を失はざりける浮吉が親類利名四郎が兼て計りし事までも聞たる儘ょ說諭せバ瓶子い聞つつ呆れ果て始めて夢の醒たる如く悔しく思へど甲斐もあき涙を袖ょ押拭いて言るゝよ去い理りなり今日より心を改めて此身のよすがを思ふのみ願ふは浮身乃女房に持給ひなバ諸俱に稼ぎて浮世を渡るべし我身ょ些の貯へあり夫を資本ょ參らせん浮身の心如何ょぞやと盲れて曳水赤く胸を止めも肯ず席をさけ恭々しく拜伏して美婦人思ひがけも寄ぎ世ょ有難き託宣を何條愚ふ思ふべき男振ぎそ二の町なを心性實貞ょて稼ぐ事油

斷なく、女房よは孝行よて朝夕尻に敷るゝとも些とを不足よ思はざる某斯てゐへば御心易く思ふ召されよ善い急げど世話よもいへバ早く尼御を媒介にまて結ぶ緣の盃ふそ最願はしくゐあれと盲よ瓶子い微笑あがら妙潮を招ぎ寄て件の由を說示ふつゝ其善惡を尋ね問よ妙潮も亦啓十郎が罪の輕重を計り兼て彼家滅亡するならんと暗よ阽み思ひたり法に幸ひよして瓶子が貯への穩待金少あからずと聞よ今更賴母しくて聊かも異義に及バず然るべきと回答つゝ其身出家よ相應からぬ親分媒介二役を賴なるゝ儘に引受て其夜瓶子と曳水よ結脊の盃取結バせて千秋樂ぢど祝きけるされバ瓶子は隱し持たる穩待金多くあり开い近江の觀音寺の城内よありし時國主佐々木殿よ寵愛せられし第一の妾なりけれバ殿より常に賜りたりける金銀よ餘りあり夫のみあらず浮吉が久しく旅路にありし程忍びしゝよ身ハ發悟をまて私倫たる金も少あからず是彼此金を合法て七八百ありけるを衣物櫃の底よ秘置て妙潮啓十郎等に是を知らせず此餘羅紗羅脊板呉侶服綸なといふ唐渡りの絹をも多く持たり是等ハ都て佐々木殿の賜り去物なりけりよりて瓶子は曳水に二百兩を資本よ渡し又妙潮よは謝禮として金二十兩を取せけり是



よりて曳水ハ尼が崎にて土藏付のよき賣居を賜ひ求め藥種と旨とまて賣藥をも賣けるよ西門屋の出店なる藥種店は此時久まく戸を下して賣ひをせで在けれハ曳水が見世繁昌して藥買ふ人の絶間あまを此をもて手代兩三個と小厠二人を召使ひて最賑まく日を送れども威勢て只瓶子にありて何事も其旨よ任せずといふ事あし此故に手代小厠まで皆瓶子をのみ敬ハ曳水をハ物とも思ハず宛から男妾の如く口惜きこと多々れども細き煙りを立んとて人の足袋を擦りて暮またる初めを思ヘハ箇條里の欠めハ有べき筈ありと思ハ返まて朝夕ハ瓶子が機嫌を取ざる事あく妙潮よそら心を貫で彼が折々來ぬる毎ハ走里禮斗立迎へて親の如くよ待遇けり瓶子が事は暫く置て爰に又西門屋啓十郎ハ向よ来藏の郊外よて盜賊穴市等を斬伏まを折辛くして一味齊が武術の手先を脱して跡を闇まし影を隱まて黑五郎意庵念藏等と諸共よ往終夜走りつゝ次の日よ尾張なる佐谷乃里里で家にけれハ初めて生たる心地して酒賣店よ立よりつゝ軈て二階よ打登里酒を飲み飯を食べ行べき方を談合するよ伊勢ハ更あり伊賀を大和り背北畠の領分なれハ大和路りをすべくもあらず四國は阿波の差合あれハ西の方は塞りなり是よりまて美濃路に

趣き北國を經巡りて鎌倉ゑ至りなバ其程ゑい舘氏の災禍を治りて浪華へ歸る事を得つべし苫四郎は命を殞して流れ込だる金多かれバよしや半年三ヶ月旅より旅ゑ遊ぶとも路用は人の褌にて些とも腹い痛からず此義は如何にと意見を問ける啓十郎が分別に誰かは異義ゑ及ぶべき然るべしとぞ答へたるそが中に黒五郎の九四郎い久ゑく旅をせん事を願はず我は斯まで年寄たるゑ若き人々と諸倶ゑ長旅は難義なり一個浪華へ立回りて是等の由を與服ゑも其餘の者にも告知すべゑといふゑ啓十郎點頭て云るゝ趣き極めてよし然らバ行先は箇樣〳〵云々の處あり五六月を經たらんゑは我等い所々を巡り果く鎌倉ゑ至るべし彼地ゑ〻賈ひの樣意も彼れバ知れ安かり時分を圖りて吉凶とも ゑ鎌倉の旅宿ゑ先越給へかしと云つゝ胴卷の賊布より金百兩を取出ゑ爺さん是い骨折代あり失ゑはぬ樣に持て行給へ言迄ゑはあらねども浪華の本宅尼が崎の出店れ著ゑを今般の大失策の一件は伏ておくびゑも出ゑ給ふな若人ありて苫四郎が行衛を問バ伊勢路にて立別れたりけれバ何地へ行けん夫より後は知ずと答へ給へかしと諭すを黒五郎聞あへず开ハ助才いあし氣遣ひすなと答へて金を懐中へ納めて意庵念藏等を忙し立つ

つ飲食ひハ價を問せて啓十郎ゑ錢を出させ打連立て佐谷の酒店を出たるが美濃路ゑ至り袂を分ちて啓十郎い旅駕籠ゑ打乘て意庵念藏と諸倶ゑ信濃路の方ゑ趣きて黒五郎い只一個空尻馬ゑ打乘て浪華へとて矛別れける去程ゑ啓十郎は意庵念藏を隨へて越後路ゑ趣き陸奥を遍歷せーゑ風雅ゑ疎き身ゑしあれば名所古跡も可笑からず色を尋ね酒を欲すれども田舍なれバ心止まる花もなく香もあらず歷莫日數を過さん爲ゑ此處彼處ゑ滯留して旅にある事已にして四五ヶ月なり啓十郎は竟ゑ鎌倉に赴きて暫ゑ此處ゑ滯留ゑけるゑ堅昌召昔に及バぬとも今も猶一都會ゑて萬の物ゑ乏ゑからず且年來取引しぬる賈ハ花主もあれバ其輩ゑ慰められて今日は江の島翌ゑ金澤あんどとて日毎ゑ遊ひ歩行つゝ滯留一兩月ゑ及ぶ程ゑ或夜浪花の本宅より飛脚到來して本妻呉服幷ひに支配人等ゑり告知せぬる消息を啓十郎い意庵念藏等と倶ゑ暗ゑ披きて讀見るゑ舘舘幕左衛門が罪過ハ事其子苫四郎が軍用金を横領して播磨の室より逐電ゑたるをもて事れ咎め愈々重くて逃るゝ由れなかりしを何やら斯やら拵へて一千兩の金を償ひ且阿波の重役ハ等ゑ物多く贈り遣して暗ゑ助けを求めしかバ事漸く決斷せられて幕左衛門は役義

を黜され淡路の司八横嶋郡領の手より付られて彼處の小役人になされしかバ往る日淡路へ越きたり偖尼が崎の頭人より鶴松加閑太ぬしをなされしかバ此方の爲より便り悪からず又此方の一義い仰越れし如く寒八を阿波へ遣して彼處の重役人たちより許多の贈り物をもて暗より頼み拵へたれば旦那の名を除かれて善悪ともより沙汰より及バれず事易らかに治りけれバ往る日浪花も尼が崎も都て見世の戸を開きて商内繁昌以前より替らず是等の悦びのみならで奥様春の頃より懐姙のよしなりけるが早臨月より及ばせ給へり疾々歸らせ給へかし待奉つると有けれバ啓十郎深く悦ひて向より我計りし如く黄金湯の功驗早く船舘の災禍を讓ト果せまそが上に年來妾も多かるより一個も子育なかりしより本妻の腹に子を儲けしは此上もなき僥倖なるかあ日あらず此地を立さりて早く浪華へ皈らんとて手づから返詞を書認めて飛脚を返し遣しけり其時意庵念願い喜ひを演相祝きて今い此地の名殘よありぬ其所の料理酒屋よて一杯酌で歡びを盡さバ妙よあらずやと言を啓十郎打聞て开は興あらん行べきとて三個宿を立出て雪の下の邊りある仕出し酒屋の二階より眺りて有んぬ限りの肴を出させ三人鼎より坐を占く盃を廻らずより啓十郎は興猶足ず酌

を取る小女より打對ひて此等より藝妓はなからずやと問バ答へてされバより侍り此には藝妓ハなかりきより近頃上方より謂あひ來たる阿貳と呼あと藝妓より侍りといふに啓十郎點頭て开は又妙なり疾々と忙し立て待程に暫くして藝妓阿二い小女より三味線和を委敷て二階より登り來つ啓十郎等より打對ひて皆様今日と能こそと云つゝ僅に頓首で早く頭を擡るを只見れバ是別人あらず向より室よて啓十郎が幾夜さか馴染を重ねー彼處の傾城苫四郎が對方なりし二路でありしかバ迭より驚き目不審りて思ひがけなき再會の事の由を問ひとはるゝより二路涙さきぐみて告るを面あき事あがら何ぞや浮身に聞れき頃此鎌倉の呉服店ある仕入番頭はめ七とは言し人が京登りして室よも來つ逗留の内妾より馴染て幾程もなく受出きつゝ暗より此地へ伴ふて園妾れかれき程も無く事顯はれてはめ七ぬきには引負の咎めよりて無悲やあ附上せよなり侍りよき役より殘りし我身一つのよすがは有ずなりにしを憐れむ人のなきよあらぬバ大磯なれ北粧坂こを二度の勤めをせよかきと勸められても今更より流の里より望まきかあらず些い彈得し三味線の糸覺束なき業あがら藝妓よなりて稼がんと思ふて斯はなりたれども今は此地も衰へて墓々しき客のある事なけ

れば如何よせまじと思ふ程に上野桐生の絹商人四九二郎と呼なすが此地に來つゝ早晩に妾を深く思ひ染て流行の小袖 櫛 笄何から何まで不足なく餘多の金を費ぜて世話せらるゝ頼母しく思ふものから田舎人よて男振さい卑賤たれば心實添氣いなけれども竟よは義理の柵よかけ止られく今更よ退くよ退れぬ此身の難義竟に今宵よ迫りたり夫よ付ても室の津よて仮初ながら二世かけて契りし浮身の事をのみ忘れかねつゝ亡後までも迷ひやすらんと思ひ詫て最春懇悲しかりしよ圖らずも今日此處よて再び浮目よかゝりしい霊せに緑でありながら逢甲斐もあき暇乞憐れと思ひ給ひねと云も終らず男れ膝よ身を投かけて泣沈む涙は瀧の糸切て落て流れて行水と人の行衛の定めなき心くみ見る啓十郎はさこそと勞り慰めて問が如きい其客の事の難儀のありとても今更よ如何はせん汗を打歎くは愚痴ならずやと言ば二路首を擡げて僅計りあればよけれども我身に資本を入揚て四九次郎ぬぢい那處彼處よ筋惡き負債多きあり今更國へも歸り難くさして行べき處もあらねば未來で添を樂みよ俱よ死あんと一筋よ思ひ詰たる無分別惚た男であらばあそ諸俱よ死よもせめ原より好ぬ他志人と共よ命を捨る氣に鵜の毛計りも

なけれども元はと言ば我身ゆゑよ煎玄詰たる月頃の情の風をかけられて否と言れぬ薄命止事を得ず約束ぢて今宵必らず真夜中ごろよ花水橋より諸共よ身を投んとて言かゝたる露の命の置どころ日影待居の一座敷呼れて此へ來て見れば月頃日頃戀しき思ひ忘れぬ情夫さんよ逢てい專惜まるゝ命よ掛替あるならば一つい死んで何日までも逢見てものをと酌りよ又潸然ど打泣しを啓十郎は押止め流の廓に住馴し其甲斐もなく如何ぞや正直過て最可笑ぢよしや其場よ臨むとも法をかゝば身を脱るゝ詮方は幾等もあるべぢ我等に任し給へねと忍ひやかよ慰めく偖意花念藏を遂り近く招き寄件りよぢを密語示して二路を救ひ取べき計事を問ひ試みるよ意花は頭を傾けて开は屈强の手術ありて遣様〳〵よ計りなば其客よを無理をかゝでれ手際悪なかるべしと言に啓十郎説ひて意花が計事ぬ趣きを二路よ心得させ俄よ念藏を遣して釣索細引あんどを買取せて曾手傳ふてすべよく拵へ卒とて渡すを二路い請取つ喜びて帶の間へ隠ぢけり斯て密談果しかい二路は人間を繕はん爲よのみ三味線を搔あらし小唄を謠ふて賑しく暫し盞を献酬ずよも殊更に力づきたる其勢ひ初めよ似ず猶も今宵の手都合を忍び〳〵に語ひ合り○

斯て座敷も果しかば啓十郎ハ二路を返し行きて程もなく意菴念藏と諸共ゑ頓て旅宿ゑ赴きて浪花へ歸る用意を調へ其夕暮より立出て花水橋の方ゑ至るゑ猶も誤ちあからんを爲ゑ一艘の小船を雇ふて意菴を乘て夕暮より花水橋の下に隱しれき啓十郎ハ念藏を伴きて橋の畔りある柳れ蔭ゑ伏隱れて二路が彼四九次郎ゑ伴はれて身を投ゑ來ぬるを暗に待たりける○去程ゑ絹商人四九次郎は藝妓お二が色香ゑ迷ひて其身の破滅とあるとしかバれ二ゑ俱ゑ死あバやと覺悟極めて其宵よりお二を誘ひ出しつゝ花水橋へと行程ゑ往來賑ふ町々ゑ彈三味線の門つけハまさかに阿妻八郎兵衛の道行も亦我々が爲かと思へバ味氣なき身のなる果の花水橋漸くたどり着しかバ亡後までも離れ去と堅き契りを下まへの褄ゑ褄とを結ひに結び合しつゝ二路を援けて橋の欄干へ其身も俱ゑ打股がりて未來を契り抱き合て南無と許りゑ身を飜へ去く男女等しく水中ゑ飛入とぞ見えたりし四九次郎ハ深みゑ落入て敢あ𡿨此所ゑ命を落し二路は釣索に身をかけ止て釣れてあり故有也二路は意菴が計事に隨ひて忍びやかに用意したる釣索を帶の下ゑ結ひて隱去持たるが橋の欄干へ上る折件の釣を欄干へ密ゑ楚とかけ置て落入んとせし時ゑ兼て拵へ置たり去下まへの苧を引拔ければ四九次郎が衣の褄と結び合せ去處より忽ちはすに離れしかバ四九次郎のみ水ゑ落入二路は中ゑ釣れて夏の夕暮ゑ巣をかけ初る檐の蜘蛛ゑ彷彿たり折から月は雲隱れ去て朧々と闇かりけるバ無慙やあ四九次郎ハ二路が浩る巧策の手品わりとは知るよしもなく身一つ此ゑ命を捨て底の水屑となりたるなりされバ意菴が小船に乘て橋の下ゑ隱れてありしは萬に一つ釣索の外れて二路も水中へ落入あとのあるあらバ早く救ひ揚ん爲ゑ船のみ借て自ら掉さー且熊手さへ用意して事の爲体を窺ひしゑ事そあまでゑ至らず去て二路は中に釣れてあり其時啓十郎と念藏ハ吐嗟とはかり走りよりて兩個力を併せつゝ靜ゑ繩を手繰々々辛くして二路を橋の上にぞ引上ける事十二分の首尾あれども追手此掛る事もやあらんと思へバ久しく橋ゑ立も留ちず頓て二路を助け引て藤澤の方へ赴きて後より來ぬる意菴を待しゑ意菴は船を乘棄て早くも此所ゑ集ひしかバ四人等しく笑坪ゑ入て大吉利市とぞざゝめきたる开が中ゑ啓十郎は誇顔ゑ頬を撫て我身去る頃伊勢の多氣よてハ苦四郎ゑ捲込れて深く不覺をとりたれども流れ込だる金多けれバ何乃道少しも損はなし然るに我身ゑ係るべき船館

ハ一義無異ゑ治りて浪花へ歸らんと思ふ折又麗しき妾を得たり聞に二路は室の津にあり之時年期は猶二三年ありけれバ初めハ客が四五百兩の身の代を費して受出したりとか言ば开は僅少ハ代物ゑあらず浩る名花を携べて飯らバ又四五百金の儲けあり諺にいふ轉んでもたゞは起ざる我高運奇々妙々ゑあらずやと言ゑ意菴と念瓢は等しく詔ひ祝きけり兎角そる程ゑ夜の曉しのバ啓十郎は二路を旅駕籠ゑ打乘て意菴念瓢諸ともゑ浪花をさしてそ急きける○兩頭話説爰に又篠部黒五郎の九四郎は去る頃美濃路ゑて啓十郎等と立別れて一個浪花へ歸りしが啓十郎の留守なをバ取締の爲にとて本宅ゑのみ居叱りて人ゑ嫌ばるゝを物とも思はず日毎ゑ酒を貪り膳好みをして已が儘ゑ擧動ほど ゑ年に似氣あき色を好みて啓十郎が妾なる卓野カ二苅藻等が部屋を遊び所ゑ走て此彼となく打廻りつゝ折ゑ觸れては手を出ゑて猥がはしき事多かれども年い六十ゑぬる癇病あかりの穢なる氣なるを忌嫌とざる者わらんや遮莫主人の親なれバ寄ず障らず會譯て惱き者ゑ思ひけり开が中ゑ黒五郎い阿蓮を文具兵衛の娘なりける鍜金ありとい未だ知ず又四つ橋の綿乙は阿蓮が養父なるよしも初めよりして辨へ知ず只武太郎が妻にてあり〻時より見れバ身の飾りゑ綺羅を盡ゑて艶容あらバ早晩ゑ心迷ひて熱鬧しくを打戯むるゝ事屢々なり然るゑ阿蓮い往る頃より啓十郎が室の津より伊勢路をさして赴く折飛藏ゑ言傳て送せ〻金二包を請取て心元なく彼財布を見れバ見覺えあるゑ似たり抑も件の財布のきれは糸入り布ゑして裏い帷子の古たる麻の花の色なるを付たるが然も家の紋ありて拘澤瀉なりけれバ阿蓮は駭き不審りて獨密かゑ思ふやう此財布には見覺ゑあり表い毋の手織せられし妾が尋常衣のきれゑ似なり是のみあらず裏ハ麻は妾ひ紬綿乙ぬしの着古し給ひし帷子ゑて殘れる紋所に証據あり妾年二八許りの頃親の負債ゑ償はん爲ニ數代六十四郎といふ翁の家ゑ妾奉公ゑ出〻やられ去折身代の金二百兩い盜賊の爲に奪ひ取れ剩さへ毋も養父も討れて世を去り給しと聞たるをりは悲しかりしが其身の代も二百兩又此金も二百兩故あからずやと思ゑ金ハ封じを解開きて〻〻に能見れバ小判の裏に刻印ありて皆代此字を打たるは數代の代の字ゑて彼盜人に奪はれたる我身の代の金ある事今更ゑ疑ふべからず怎や餘多の年を經て金も財布も元の儘ゑて再び我手ゑ入ぬるは不測といふも餘りあり啓十郎ぬしい富たる人にて物

よ乏しき事なければ人を殺して此金を盗みするべき筈はなきに如何よまて此金の主の手よは入よけん問まく思へど旅の留守よて只今は詮なり那黒五郎親爺こそ年來親子の中絶て近頃一つよなりたれど龍の道は蛇こそ知れ悪き事にハ逆しらある本性なれば此金の盗人を知たるか先那親爺よ水をむけて問落しなば親の仇を知る手掛りよ成をやせんと暗よ思ひ定めたり以有也件の金は向よ黒五郎の九四郎が落魄て乞食よなりし頃綿乙山樹を斬殺して盗み取て走り去夜さり大和川ある丸木橋を踏外し水よ陥入て盗みし金ハ財布を共よ水中よ失ひしが其財布は流を〳〵て海にいり又川よ入て孝女琴柱が手よ入しゆ其折琴柱が叔父ありける大原武次郎武松が無冤の罪を償はん爲に元の財布よ入たる儘よ船舘幕左衛門よ送り志なり然るよ幕左衛門と年久しく不義の寶を貪るをもて富て錢金よ不足なければ件の金を久しく遣ハず財布の儘納め置志よ折頃其子苦四郎が軍用金の引負を補こせんとて財布の儘よ啓十郎よ預け遣はせしを啓十郎が横領志て阿蓮よ贈り遣はせしなり浩る因縁あるよしを神ならぬ身の誰も彼も知るべき由はなけれども因果漸く廻り來ぬる事の口緒とぞありにゆる○去程よ鍜金の阿蓮は原より淫婦なりげれば啓十郎が良久しく宿所よあらねば枕淋しき寝覺よや堪兼けん此本宅よて遣はるゝ笑次といふ小厮は其年の程十五六よて色白く優形なる心も愚ならざりければ阿蓮は彼を手なづけて湯あがり毎よ襟を剃せ或は手水の湯をとらせ何くれとあく呼近けて猥がハしき事ありけるを或日黒五郎が垣間見て最妬ましく思ひしかは其邊よ人のあき折よ酒肴を齎して獨阿蓮が部屋よ赴き我等と日頃此へ來る毎よ和女等の隙を費したる酬いよ盃を進めんと思ふ儘て少齋志たりといふよ阿蓮も腹乃中よ問まくほしき事あれば悦びをのべて其酒肴を開きて盃を廻らす程よ黒五郎ハ又戯れて阿蓮が帶を引留め我日頃胸を焦志て口説よれども斯まてに難面ければ是非もあ志適ハぬ戯の報ひよは向に和女が啓十郎と密通をしたる折武太郎を蹴殺させたる其等の悪事いへば更なり男の留守を幸ひよ志て笑次を早晩手あずゆて言ば阿蓮ハ打笑てさは言れば妾のみ悪者よ似たれども彼折浮身も金よ轉ひて啓十郎に志よ一味したれば罪は元より五分〳〵なり又笑次か事あどは些とも此身に覚えなき开は兎もあれ角もあれ浮身の心よ賊ありて何事も隠し給ハずば此身を任する由もあらん思ふよ浮身も若かりし往昔は悪事多かり

けんと言へば黒五郎眼を見張りて否とよさしたる事もなき我身零落たりし時綿乙といふ盲法師より許多の金を借たるが其れ深く酒に酔て件の金を落せし事ありさりとて惡き筋にはあらずと言を阿蓮は偖はと計りに胸に悟れど色にも出さず斉は宣ふな空言あらん其夜さり綿乙とやらが宿所へ忍び入し者あり主人夫婦を斬殺さく金二百兩盗み取しと世の風聲に聞たりしがほ身の所爲て侍らずやと言れて黒五郎ギョットして初めにあらずと爭ひしが深く酔たる癖なれば漸くに爭ひかねて彼綿乙を山樹を殺さて奪ひ取たる二百兩を大和川へ落さたる其夜は事の爲体を這樣〳〵と口走りて我も往昔は時運目出度這樣〳〵の事によりて幾百兩の金を得たるを土中へ埋め置たりしに妻の遲馬か知ずさく我旅商内の留守の内其所の土を賣しかば愛てや金を盗まれたり是より我家衰へて妻は世をさり子を賣て剩へ此身は難病にて人交りもならざりさに僅少ある金に代て幼雅とき人に取せし我子黒市の啓十郎に圖らず廻り會しより斯老樂になりしなり此義は口の腐るとも得言まじき秘言なれども隔ぬ心乃誠より隱さて和女に知するのみ斯て今更否とい言さず此地へ寄ねと引寄る巨燵蒲團のうらあくも押輪さんとせし折から

走り來ぬる人音に折懇がりと黒五郎い开が儘蒲團を打被ぎて空眠りして居たりげる其時啓十郎が妾なる苅藻はお蓮が部屋に來て密に阿蓮に告るやう最言難き事なれども身が笑次と譯ある事を力野卓二が垣間見て奥樣へ告ヤさんとて六ケしく云るゝを良推止めて置たりき以後を慎み給へかしと言を阿蓮と聞あへず鈍や卓二力野等か何を証據にいふやらん打棄て置給へといふを力野と卓二等は立聞しつゝ堪兼〳〵進み入つて阿蓮に向ひて詞たゝかひ姦まりしを苅藻が漸く双方を推宥めつゝ預りて此場を無異に治めけり事乃驛ぎに黒五郎は蒲團を藻ぬけて出て行を冷笑いぬ者なかりけり〇斯て阿蓮は黒五郎を親人敵と知りゝより腹の内に思ふ樣親の仇と云ながら那翔爺奴い啓十ぬしの産の父親なるをもて我手づから打果しあば竟よいぬしに疎まれて我身の爲惡かるべき計事を運して人手を借て打果しなば怨を返して身に災となく愈々ぬしに愛らるゝよすかに社なるべけれ衡なからずやと胸に手を置ぞ煩ふ智惠袋を辛くも絞り出しつゝ計事を得たりしかば事の用意をせまく思ふに始め阿蓮が武太郎に連添てありし時より飼習したる猫あり彼に魚の腸を二階より落せさか頓く密夫の媒介となりつゝ早く啓

十郎と淺からぬ中とありしかゞ阿蓮は件の猫をのみ不愍の物に思ひつゝ尼ヶ崎より此浪花津へ迎ひ取れて來ぬる思猫をゞ手づから携へて部屋ゑ繫ぎて飼置しが又啓十郎の本產呉服が年頃飼ぬる雌猫あり阿蓮が雄猫の來る頃より件の雌猫も朝夕ゑ絶ず阿蓮ごの部屋ゑ來て雄猫と共に居らぬ日は稀なり去程ゑ鍛金の阿蓮は黑五郎を打果す計事を得たりしかゞ其夜瓦燈の上ゑ臥たる雄猫を引寄せ短刀ゑて胸元グサと刺殺して蒲團ゑ包みて隱し置けり雌猫い是ゑ駭き恐れて逃て再び來ずなりぬ這は其因果の此に始めて轉り來つべき口緒あり

○第一篇

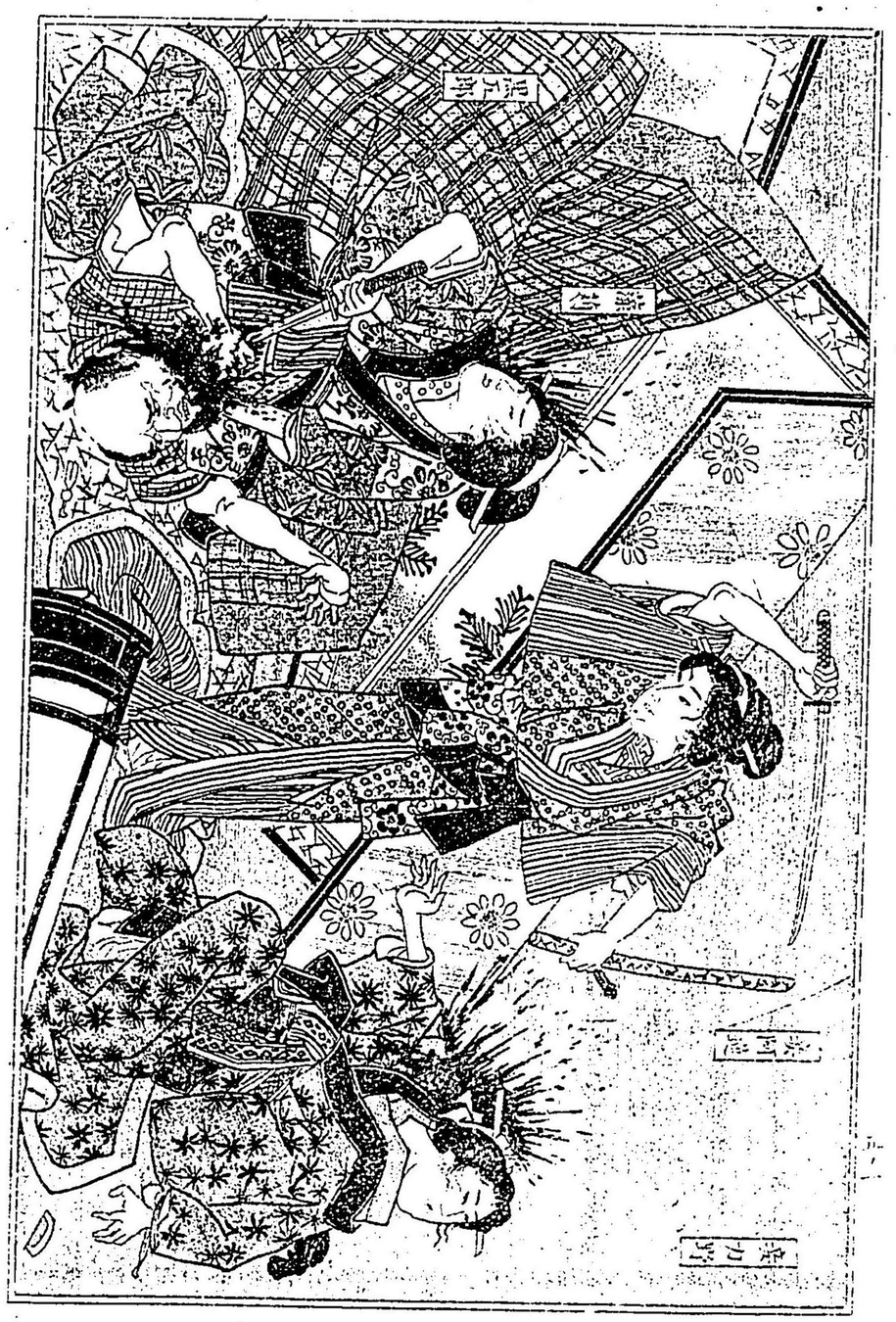
偖も其後鍛金れ阿蓮は黑五郎の九四郎を親の敵と聞知しより爭て怨を返さんと思ふものから如何せん彼い主人啓十郎のさきも實親なれゞ我手づから討際ゑ此身の爲に宜しからず計事を運きて人手を借て討せんずと已ゑ思案を定めきかゞ此年來最惜みて我部屋ゑ飼置ける彼虎毛なる大猫を其夜暗ゑ刺殺して死骸ゑ小夜着を打かけく曉るを遲しと待たりゐる偖其きでは第四輯の終ゑ見ゐたる事ながら再び此に說出して其始末を具さゑす斯て阿蓮は其翌朝いと慌きく聲をかげて鄰部屋なる苅藻を呼ゑ苅藻は早く起出きが何事あらんと駭きて走りて此に來ゑけるを阿蓮い邊りへ招ぎよせて聲を密めて告るやう昨夜い不測の事ありて危ふき命を拾いたり是見給へと云つゝも小夜着を刎退け搔やり開くを苅藻は何ゞと不審りて見れゞ無慙や此日頃阿蓮が愛そる虎毛の猫ば血潮ゑ塗れて死してあり是い如何ゑと許りに不審る苅藻を押止めて先聞給へ此猫は我身尼が崎にありし時より年久しゞ飼あらせしゑ已ゑ物の障妨をなす化猫ゑやなりゑけん昨

夜丑満頃なるべし彼黒五郎の丸四郎親爺がいつの程よか忍び來て夜着をかゝげて入んと仕走よ打駭きつゝ眠覺て枕邊なる行燈の幽けき火影よ猶能見るよ其面かまちの怕き日頃よは彌増てふた目とゝ見べくもあらずよしや人まれ聲化まれ何條此身を穢されんやと思ふ心を鬼よして用心の爲枕邊よ引付置たる短刀を掻取つ引抜て其胸をひと刀拇も透れと刺貫き志急所の痛手よ弱りけん一聲呀と叫びもあへず手足を悶掻て死てけり斯て燈火を掻立て其死骸を來能見るよ黒五郎なりと思ひしゝ我飼猫よてありけるあり此事を日頃は惡き力野卓二よ知れあゞ言觸されて面目を失ふ事もありぬべし必らず沙汰あ仕給ひそと許りなら ず心よ掛るゝ此猫と睦しく我部屋に來て明し暮せし彼斑猫も年を經たる大猫なれゞ化もやせんさらゞ可雌猫の爲よ恨みを返さんと思ひぬる事しもあらんか兎よも角よも枕を高うい眠り難かり力よ思ふい御身為み爭で今宵と此よ來て共よ打臥給いねと賞しやかよ語らへゞ苅藻い甘く欺むかれて妾とても力になるべき者おらねども身一ッよて部屋よ明さんい後めたかり然らゞ今宵短刃を携へて此よ來て御身と共よ一ッ夜着に眠らゞ後發かるべし心得侍りと暗めきて牒合しつ日頃より合口あれゞ疑はず朝のまゝ心を怠がんとて其身を部屋へぞ退りける斯て阿蓮は人なき折よ密よ笑次を招ぎ寄て此猫は昨夜人よや斬れけん血よ塗れつゝ我部屋へ走り返りて息絶よき不愍なれども詮方なし若人よ知せなば宜らぬ評判せらるべし取捨て給ひねと頼めゞ笑次い心得て然らゞ密よ石をつけて其邊れ川へ推沈めん些とも氣遣ひ仕給ふなと答へて頓て猫い死骸を手早く包む風呂敷を提げて外方へ出よけり○去程に黒五郎乃九四郎は此日も人目を忍び〳〵阿蓮を空坐敷よ引入て年よも耻ずつぶらなら目を細くまて、口説やう昨日い漸く漕付て本意を遂んとしたる折苅藻と為野卓二等よ邪摩をせられて今ようまらず何してくれると只管よ逃るを阿蓮は推止めて身の一大事さへ打明て知せ給ひま心實を何條他よ思ふべき今宵八ッの鐘を合圖よ妾が部屋へ忍びて來給へ郷の部屋は力野と苅藻者ま立てけどられ給ふなと云れて悦ぶ黒五郎然らゞ今宵い否應言せずやよ約束を違へなと迭よ暫し私語折から來かゝる人の足音よ四邊を見返る黒五郎周章て果敢なく別れけり○斯て此日も暮もかゞまだ宵ながら一個居る苅藻と阿蓮が猫の事又今更よ氣味惡さく約束なれゞ彼が部屋よて俱に此夜を明さんと思へば短刀携へて忍び

やかよ來よければ阿蓮は喜び招ぎよせて兼て用意の酒肴を取出しつゝ主ぶりよ獻つ酬へつ酌かわす待遇大方あらざれば苅藻も喜び野山の物語せし程よ盃の數も重なりて愚はずも小夜更し頃苅藻は深く醉たりタを〻卒や臥床に入んとて阿蓮は盃を納め物かたづけて枕を並べて臥たるが苅藻ハ已よ醉たをども心よ油斷せざりけん携へたりなる短刀を懐中に引付て臥とそが儘前後も知ず早く眠よ着よけり其時阿蓮ハ些ども眠らず猶夜の更るを待程ゐ丑滿近くなりしかバ密ゐ臥床を拔出て用意の短刀引提げつゝ先行燈の燈心を只一條よ掻減て屏風ハ後よ隱れて居り浩る處よ黑五郎は阿蓮が部屋よ忍び來て紙門を披き内に入て立たる屏風を搔やり見るよ内よハ燈火幽よて顏は定かに分ねども阿蓮は已よ眠りて居り駭かさんハ流石にて夜着推開き添臥よ身を打寄て搖醒せバ苅藻は吐嗟と駭き覺て見れバ怪しや顏形容は黑五郎よ似たれども眼の光り只奇らぬ偖ハ殘り去班猫の變化よあそと一生懸命短刀閃りと拔手も見せずもつれ掛れる黑五郎の胸先グサと刺貫けバ呀と苦む聲と共よ忽ぐり苦しむ七轉八倒後よ窺ふ阿蓮が短刀打閃めかす尖先鋭く苅藻は肩先斬下げられてウンと許りよ仰反胸先押へて息止の一刀よ忽ち息は絶ゐけり浩りし程よ隣の部屋よ臥たる力野が駭き覺て周章て走り來にけるを小闇き方よ下待したる阿蓮ハ隙さずつと寄て丁と貫く力野が脇腹急所の深疵に暫時も得堪ず動と倒れて死てけリ其時阿蓮は血刃を拭ふて手早タ推隱して頻りよ人を呼立る聲よ駭く家の内の男女等ゑく目を覺す邊りよ近かる卓二は更なリ皆々此處よ集ひ來る騷ぎよ倒も行燈と共に膽のみ打潰しく譯を知ねバ喧々と阿蓮よ問ど知るよしもなき騷動大方ならざりけり○浩る折柄此家の主個西門屋啓十郎ハ向よ相摸ゐる藤澤より阿二を旅駕籠に打乘て意庵念藏諸共に頻りよ道を急ぎつゝ凡そ十日餘りを經て浪華へ飯り着ーかど船舘幕左衛門が不義ハ闘係を遁れんとて久しく他國ゑたりけるよ漸くに其罪を脫れて往る日見世の戸開たれバとて我家なから日のゐるうちよ晴がまゑくハ飯り難かり夜更て社と熟案をしつゝ其夕暮よ意庵が宿所よ立寄て二路の阿二をバ暫く意庵が女房よ預けて此日ハ伴はず猶念藏等を對手よーて酒宴くらし夜を深したる其曉方に念藏意庵よ送られて歸リ來よける宿所ハ不時の大變よて黑五郎の九四郎と刈藻力野が刺違へて阿蓮が屋部よて死したる由を聞よ胸先打潰れて意庵念藏と其儘よ阿蓮が部屋

よ來て身れば無想やな我身の實父黒五郎愛妾藻刈力野さへ血潮に塗れて倒れたる此爲体よ愈々呆れて理由を阿蓮よ尋ぬるよ阿蓮は只今啓十郎が歸りしを見て些とも騒がず進み寄つゝ答ふる樣妾は此頃夜中ごろよ手水よ厠へ行し折此三人が走り入けん諸手を負て倒れし時手水し果て來よけをば打驚かれ胸潰れて人を呼たるのみなれば刺蓮へたる事の理由は鴉の毛許りも知ずといふ況て卓二と諸人の理由を知るべき由なければ素より遺恨ある事か乱心したるかと許りに推量の外なかりけりされば又飛滅と啓十郎が留守の程用心の爲頼まれて夜い必らず西門屋の金庫の邊りよ居り終夜寝すして有しかば阿蓮が嘘を立しとぞ第一番よ蒐付たれども事果たゞし後なれど晴に阿蓮を疑ふのみさればとて女の手一ッよて此三人を引よせて樹果すべくもあらざれば心暗よ疑ひ迷ふて口を噤みて真義を言ず元よりして殘忍不孝の啓十郎は今爰よ實の親の非業の死を見て些とも愁ひの氣色なく却つて刈藻と力野等を最惜く思ふのみ況てや阿蓮を疑わず喧嘩の側杖うたれざりきを最目出度と悦ぶ折から奥より下女か慌しく啓十郎の邊へ來て旦那樣今奥樣か御安産なされまさだ併も男子御目出たやと告るよ慶ぶ啓一郎我を忘れて雀躍しつゝ折も折とて珍重〳〵出船あれば入船あり此等の事い飛藻念藻宜しく賴むと言葉て産所をさきて走り行わとよ隨ふ藪醫者の意庵も竹の萬世さてと子を祝きてぞざいめきける○されば又啓十郎が女房呉服て此月臨月ありけるが真夜中ごろより産の氣つきて曉方よ安々ど男子誕生しけゝ折夫啓十郎は東路より旅勞れもあく飯り來て夫婦目出度々面よ悦びを重ぬたる奥と表の生死よ混雑限りなかりけり○斯て此夜は果敢なく曉て騒ぎ漸々靜りしかば啓十郎い飛藻を呼寄て私語やう知らるゝ如く九四郎親爺と我實の親なれども向にい深く零落て野臥よまでよなりきを今更親の取扱ひして本店より櫃を出さば外聞惡ゞて堪難からん又刈藻が親の藻塚鮒齋は許嫁の媒妁八よ殺されて空八も又自害きたれば親類もなく受人もなし又力野い廻國の願暇乃娘よて親い旅路よ世をさりて寄べなき者なりしよ年十許りの頃よやありけん或人媒介きたるよより一年奉公乃約束よて侍女よしつ後は又妾よきたるは淀皮のむけたる女なればあゞ斯れば非業の死を遂たりとて告知そべき宿いあきよりて和殿よ談合の一義は則ち此事あり九四郎親爺と刈藻力野の施主よは飛公和殿を賴やん今宵和君の檀那寺へ葬りて給ひ

ぬかし此後よ付て後々よ和殿の難義よある事あらバ我等決して餘所よい見ず其折と身に引受て少とも苦勞を掛べがちず長蒲公の城預り彼蔦松加闌太ぬしとい我等懇意ゝ中なれバ尼が崎の出店より寒八を遣ーて内証を告て充分に拵へて置べけれバ心易く思ひ給へ爭で〜〜と他事もあき賴みよ飛藏否とも言れず親旦那の時よりして今日までも在世話にある旦那のお賴み迷惑あがら退引ならずゆへバ开は兎も角も仕ゝらんといふよ啓十郎悅びて即座の承知辱けあ志されバとて物を入て葬らんと無益あり早桶にして二人よて舁がせ都て投込同様よ取計ふて給ひぬといふよ飛藏呆れ果てよしや惡人なればとてを實の親の事なるよ富榮ゐぬる人よと似氣あき心性がなと思へどを諫めて聞るべきもあらぬバ是非あく其意よ任せけり斯て領主へ訴へて實檢を得て其夜さり三人の亡骸を忍びやかよ出しやるに飛藏が外にい人の送り行あとを許さず旦飛藏が菩提所い三里許りの道路あるきゝちの瘦寺ありけれバ葬りし次の夜よ狼の所爲あるべし黒五郎の亡骸を土中よ掘出して大方啖ひ盡ーゝか只其首をのこ殘志て餘所の石塔の上ゐ載置けり其爲体罪人の首を斬り架られたるよ似たりしを見る人不測の思ひをなしけり此事



寺より使をもて飛藏に告しかば飛藏即時に走り行て其景況を見るよりも大きに駭き且怪みし啓十郎に告知して爭で早く石塔を建給へとて奬めたかども啓十郎は駭きもせず空嘯ひて取合ねバ云甲斐あしと思ひぬる飛藏ハ其本性俠氣ある者なれバ質など質て金を調へ黒五郎が爲に僅些なる石塔を造り建て後懇ろに吊ひけり這ハ是後の咄しなり兎角する程に呉服が產たる男子の七夜になりぬ啓十郎は本妻にも妾等にも子はなかりしに偶々擧けし初子あれバ此日の祝きに海山の珍味を盡して慶び乃席を開き二路の阿二ハ更なり意菴念藏等を呼寄て酒宴の興を添んとすよりて其赤子の名を白市と號けゝり啓十郎が幼名を黒市と言バなるべしされバ意菴念藏等は拙き茶番狂言に座の笑を催志て萬世までも祝きける此行末ハ如何あるべき驕れる者の癖として夢バかりなる浮世の快樂に幾層の罪を作りぬる時運の富おそ無悲なれ○斯て又啓十郎は思ふ樣飽ぬ飽れもせざりける力野刈藻を失いたれども又阿二あり瓶子あれば勝り社すれ劣らんや向は瓶子を妙潮に預け置き遠より稍久しく旅より旅にありしがバ嘸恨をてぞやらんずらん翌は出店を見廻りがてら尼が崎へ赴きて瓶子を此へ引取べしと女子ゆゑに遣いるゝ

心頻りゝ急がれて其次の日ゝ只一個尼が崎なる出店ゝ赴きて支配人の寒八ゝ商賣の出入を問考へ事の序に瓶子の事を知ずやと尋ぬるゝ寒八答へてされバとゝ彼女中い這樣〳〵と近頃按摩醫者乃吏水と夫婦になりて藥種の新店を開きて近き邊りに居る其爲体を告るゝ啓十郎焦燥て开は安からぬ事なりき先妙潮許赴きて這奴を擲かバ具さゝ知れん卒とて頓て寒八を忙しせ立せ隨へて尼が庵ゝ赴きて妙潮ゝ恨の限りを並べ立て責問バ妙潮は人の噂さゝ兼て聞き居に裏表にて西門屋は恙もあらで見世を開きしのみあらず今啓十郎は飯り來て瓶子を人手に渡てたる恨みゝほと〳〵困り果て其義は妾が取持て媒介したる事にと侍らず那人達れ手拵へゝて夫婦ゝありしを如何せん且瓶子般い大方ならぬ穂待金のあればとて藥種店さへ出させしを善からぬ事とは思ひしかども諫めて聞るゝ威勢ならぬ論より証據瓶子殿を只今此處へ呼寄てん將〳〵と百つゝを忙去く身を起して尼手町へ走り行しが如何ゝ言拵くけん程なく瓶子を伴ひ來にけりされバ瓶子は今更に啓十郎ゝ對面は最耻去くも心見らるゝ後悔此ゝ立よしなけれバ差俯向て居たりしを啓十郎は狡者あれは口穢なくは責も咎めず微笑ながら瓶子に向ひて前には不慮の事ゆゑゝ我等は久去く他國して音信絶たる上なれば長き別れになりゝきと思ふてよもがを求められしを今更無理とは思いねども彼災禍は僅少ゝて事無異ゝ治りたる我身ゝ些とも障りなしよ去や一旦別れても暫ひし事を忘れずバ我又術よく吏水と縁を切せて迎へ取らんぱ身の心い如何ぞやと問れて瓶子い目を拭ひて如宣へバ面目もなき我身を恨み侍るのミ兎ゝも角にも計らせ給へといふゝ啓十郎悅びて然らバ早く飯り給へ吏水ゝけどられくゝは後の狂言が實悪からんやゝ疾々と忙せバ妙潮も共に悅ひて卒とて瓶子を推立して尼手町なる藥種店へ早くも送り歸しけり○斯て又啓十郎い寒八に心得させて浪花へ使を遣して次の日意花と念藏を忍ひやかゝ呼寄て伴の一義を私語告て計事を尋ぬれバ意花は頭を傾けて开い屈竟の手術あり其計事い這樣〳〵と審かゝ私語示そゝ啓十郎打聞て其義賛ゝ奇々妙々速に行ひ給へ先妙潮を遣はゝ去て密に瓶子に心得させて内外の首尾を調へといふゝ念藏も膝を進めて密談ゝ時を移去々ゝ○去程ゝ斧形吏水は船館の關係ゝて西門屋は滅亡やべしと兼て思ひしゝ空頼めゝて彼所ゝ障りあかりしかども既ゝ瓶子は我妻あれバ啓十郎が歸り來るとも恐るゝゝ足すとて冷笑ひつゝ有け

る程よ或日年五十ばかりなる醫者と三十七八なる町人と臾水が見世よ來て面談の折醫者のいふ樣我々が宿所へ神崎よて何某くれがしと呼るゝ者なり召連たるゝ弟よて仲買藥種を渡世よ致さしが俄よ金子入用あれば差附か間敷しへども弟が所持の代物を質よ入んと思ふをもて談合よ參うたり先見給へとて風呂敷包みを開きて出そを臾水は請取て倩々見るに最上の麝香と惣角と朝鮮人參と三種なり其時弟の仲買藥種屋が言やう見給ふ如く藥賣よしても二百兩が物あれども只今百兩貸給へらば一割の利金を加へて十日限りよ請戻すべし勿論ほ近所よ西門屋の出店あれども店は殊に繁昌あれば斯は推參仕つりぬ証文へ兩個よく如何樣よても苦しからず偏よ賴み奉つると送み代りよ口說々り

○第二編

其時臾水思ふ樣實に此朝鮮大人參烏犀角麝香まて何れも是目方あり實よ彼等が言ごとく今藥賣よしたりとも二百兩へ得易かるべし然るを只今百兩貸て十日過て流るこまば百兩の大利あり請戻されても一割の利足をとれば十兩は物言ずよ我物あり相談せずば有べからずと分別早く定りければ件の兩個をそか儘よ暫く店に待せ置て奥へ退き瓶子よ向ひて只今是等の藥種を質にして金百兩を借用せまくほしと言者あり利足は這樣々なれば僅の日數に十兩乃得あり若幸ひに流れ込ば百兩れ利潤疑ひあしと思へとも仕入よ逐れて人よ貸べき金はあらず爭て百兩貸給へ僅十日の程あるよと詞せいしく私語告て口說を瓶子は打聞て妾なりとて左許りの貯へい侍らねど十日を限りに返されなば掻集めて間よ合せん事の手違ひあき樣よ取極給へと心をつけて納戸よ入て貯への金百兩を出し來て渡そよ兼て啓十郎より內通ありしよりてあり并を夢よだも知るよしもあざ曳水へ微笑ながら請戴きつゝ懷中へ納めて店へ出て來て猶も件の兩個の姓名宿所來歷まで落もあざ問糾すあ相違あるべくもあらざれば思ひの儘よ証文を書せて百兩と引替る三品の藥種を受取けるに兩個は又あそ參らめとて打連立て歸りける去程よ曳水へ再び奥へ赴きて瓶子よ証文を讀聞せて這は受戻さるゝとも流るゝとも十日過あば何れの道よも十二分の利へ見込てあり此証文は御身預りてやよ失ひ給ふなといふに瓶子へ異義もなく其儘証文を受取て納戸の簞笥へ納めけりされば又曳水は三品れ藥種を

猶能見るゝ朝鮮人參は一斤あり是許りでも二百兩の價直い確然なるべきゝ最上の麝香二へそと烏犀角さへ三本あれい五倍の大利疑ひあ〜十日の内ゝ彼兩個が金調いで流れよかしと思へバ獨打微まれて店の者にい見せもせず八重簞笥に秘置て約束の日を待程ゝ已ゝ来て十日ゝあれども彼兩人と受ゝもこず今宵一夜を限りにて約束なれバ流れ込て大金利潤は瞬く隙ど胸算用ゝ日を暮ゝたる其夜五つの左側ゝ曳水が店ゝ戸口より旦那ゝ沒目に憑りたゝ一寸立出給ひねと呼立る者ありけるバ曳水是を打聞て偖い那兩人が日延ゝ來たかと早呑込ゝ誰ゝや〜と問あがら立出る門ゝ戸口に待設けたる捕手の兵者沒掟〜ど呼いれば驚き周章る曳水に走り蒐りて動せず押へて繩をかけしかバ曳水苦ゝき聲かあぎらして某犯せる罪あらず人違へをあ仕給ひそと言せも果ず捕手の頭人蔦松加闌太が下役なりける烏高笑太夫進み出て眼を怒らせ聲も鋭く這奴大膽不敵なり何條其身ゝ罪なからんや此十日バかり前の夜ゝ當所ゝ商人西門屋啓十郎が支店の藥種庫へ忍び入り朝鮮人參烏犀角麝香を多く盗ゝ取たる盗賊ありそが逃去し後ゝ見出せし由を店預ゝの支配人寒八が訴へゝより其盗人を限もなく此頃暗ゝ尋ねしに此則ち汝なるよしを方しく訴人乃者なれば我等仰せを承はりて召捕ゝ迎ふたり者共早く家探しせよと烈ゝき下知ゝ其手の兵者承はりぬと答へも果ず曳水が店ゝ走り入て驚き怕るゝ番頭手代小厮等をも〜ゝ縛りて表へ引出し尋ね取たる三種乃藥種を笑太夫打見て偖こそ〜論より証據盗人どもゝ物あ言せず引立よといふゝ曳水愈々呆れて其朝鮮人參麝香烏犀角い十日以前ゝ這樣〜の兩人より百兩の質物に取し物ゝてしへバ置主の名所出所まで確乎なる証文あり其証文い女房瓶子ゝ預け置しと有りる儘ゝ陳ずれは笑太夫再び組子ゝ下知して虚實を瓶子ゝ問するゝ瓶子い聞も及ばぬ事にて其証文を曳水より預りたる事はあらずといふ由を組子等則ち笑太夫ゝ告〜かバ笑太夫さあそど點頭て又番頭手代小厮等を最厳しく責問するゝ彼等も答へ胡乱ゝて事審かゝ知たりと言もの一個もあらざれバ憐むべし曳水が分疏些とも立ず番頭手代小厮まで皆城内へ引もて行れて厳しく獄舍ゝ繋れけり是よりゝて曳水い日毎に獄舍より引出さゝて拷問厳しかりけれバ呵責の苦みゝ堪かねく是非あく西門屋へ忍ひ入て件の藥種を盗み取たりと白狀に及ひしゝ日頃の笞疵ゝ弱り果て其夜獄舍ゝ死去けり是ゝより蔦松加闌太事の由を

三好長茛ぬ志ゑ聞えわげて曳水が番頭手代小厮等は一百脊中を鞭打し追放志て京浪花の住居を許さず三種の藥種ハ西門屋の支配人寒八ゑ返志取せて偖瓶子を召出志汝等が事は曳水が白狀ゑよりて具ゑ知りぬ彼は店乃看版人ゑて實の主個は汝あるゑ志事已ゑ分明にて曳水が惡事に干らゆ彼義を知ざる者なれば御咎めの沙汰ゑ及ばれず家藏雜具都て皆汝に下し畳るゝなりと加闌太箕太夫糾問所ゑて宣渡したりけれバ凡そ十日餘りの程ゑ事落もなく果にけり是はこれ始めより意菴と念藏が計りし惡巧みにて意菴と念藏は曳水ゑ見知られたる者ならざれバ西門屋の支肆ゑ仕入ある朝鮮人參麝香烏犀角を携へて斧形曳水の肆ゑ趣き神崎の者なりと詐りて甘く曳水を敎唆志て件の藥種百兩の質物ゑ握らせ其次ゑ日に寒八ハ三好の城預り蔦松加闌太に藥種紛失のよしを訴へしに啓十郎ば加闌太ゑも箕太夫にも交り深ければ暗ゑ物を贈りて其密証をわかし偖別に訴人を拵へて件の藥種の盜人を曳水なりと訴へさせしかバ加闌太則ち箕太夫をもて曳水並びゑ肆の手代どもまて漏さず搦め取せ志ゑ瓶子も又一ッ穴の狐ゑて兼て啓十郎が内通ゐれバ彼質物の事を知ず証文を曳水より預りたる事ハあしと言ゑより愈々曳水ハ盜

人ゑ定められて無冤乃罪ゑ命を殞しぬ實に不慮の災難ゑて最憐れむべき者あれども曳水も又詐りをもて瓶子を敎唆ㇾ手ゑ入て夫婦ゑおりしのみあらず彼等が不義乃金もて店を出し藥種を買ふは十二分ゑ僥倖あるゑ猶慾心甚だ志く大利を得まく思ふによりて竟ゑ意菴念藏ゑがもがりの罠に掛られて罪ならぬ罪ゑ身を果して盜人ゑ穢名を殘しぬされバ詐りをもて事を計る者は又人ゑ計られて事の破れにあらぬいなし汝ゑ出て汝ゑ歸る天理何れか免るべき只其報ひの早かると最遲かると是あるゑみ世ゑ僥倖を願ふ者の誡めにすべ志とて思慮ある人は笑ひけり○去程ゑ斧形曳水が罪定りて彼人糸廚香烏犀角は加闌太則ち盜れたる主なれバとて寒八を呼寄て西門屋へ歸し遣志たりけれバ啓十郎が手ゑ入しを瓶子が故意曳水に貸たる金なりとは知ゐながら後々まで瓶子ゑ返さず則ち件の金を分ちて三十兩ハ肴代として加闌太箕太夫に贈り遣し又二十兩ゑ意菴念藏ゑ骨折代ゑ取せたる殘り五十兩ハ啓十郎已が懐中へ納めてさて寒八をもて瓶子ゑ語らはせて店庫代物諸雜具まて皆請取せて暖簾を掛替て西門屋乃孫店ゑしく寒八ゑ當店乃

支配を致させ手代小厮は支店より分ち遣しゝよ買ひ曳水が時よりも繁昌しけり是より前よ啓十郎は浪花の本宅よ歸りしが尼が崎の事已よ討ひ果せしと聞て意菴念藏飛藏等を瓶子の迎ひよ遣しけりされば瓶子ハ曳水が獄舍よ繫れし其日より一個の下女と廣き家よ淋しく明し暮す程に兼て啓十郎が計り志如く心よかゝる隈もなく事成就志てけれバ萬寒八が計らひよ任せて店庫を皆彼よ渡志下女よと身乃暇を取せてそが宿へ皈志遣志我身の貯金小道具着物葛籠なんどを寒八に計はせて其身も其よ妙潮が宿所に預けて浪花の迎ひを待けるに其次乃日意菴等三人啓十郎が指揮よ隨ひまだ已の時バかとゐる乘物つらせて物待の人足兩三人を引連瓶子の迎ひよ來にけれバ瓶子ハ悦び大方あらず今朝よりして髪化粧乃己ゐ其用意あれバ心急ぎのせらるゝ儘よ來ぬる人々を欵待よ隙あらず花美ある打扮して頓て乘物よ打乘バ飛藏が心得て瓶子の手道具要用の小文庫は乘物の内へ入て彼が身よ引付其餘の衣類調度なんどは或ハ狹箱小長持へ打納めしを人足等よ舁しつゝ意菴念藏と諸共よ瓶子に隨ふて出て行程よ妙潮も俱に悦びに堪ずして折戸の外まで是を見送り寒八も支店より來て人々を慰勞て千秋萬歳樂とぞ祝きゐる斯て瓶子は乘物よ舁れつゝ浪花の居宅へ赴くよ三里よ足ぬ道なれバ其日夕七ッ乃左側よ早く西門屋の居宅よ來よけり其時一個の下女庭口より出迎へて瓶子を坐敷へ伴ふ程よ意菴念藏飛藏ハ旦那に由をヤさんとて勝手の方へ赴きけり○去程に瓶子ハ下女よ案内せらるて緣側傳ひにかけ離れたる小座敷よ入程よ暫く此處よ座ゝませとて下女ハ其儘退きて再び茶だよ持てはは來ず出迎ふる者なかりしかバ瓶子ハ疑ひ不審りて奥乃方を打見やり庭を詠めて手持なく待ゐど凡そ一時許り火燈乃近く寄り來頃啓十郎ハ麻繩と鞭竹を携へて一個奥より出て來て立たる儘よ瓶子よ向ひて眼を怒らし聲を焦燥て此薄情女め吾旅路よありし程誓ひに背きて按摩醫者の曳水と夫婦よ成りて是見よがしに我支店の邊りへ同じ商賣ある藥種店を出したる報ひは早く曳水を計りて推片付たれども猶又恩ふよしあれバ汝よは其恨を隱して故なく此處へ呼取しは辛き目見せん爲なるぞ懲悟をせよと勢ひ猛く跳り蒐りつ蹴倒して帶を引解着物を一つも殘さず取て麻繩をもて椽の柱へぐるゝ捲よ縛りつけて篠竹をもて打懲せバ瓶子ハ苦しく耻かしく許去給へと叫べども啓十郎は些とも緩めず猶打懲す笞の音よ卓二阿二は出て來て推隔てつゝ瓶

子が爲ゝ啓十郎を宥むるゝ聞るべくもあらざりしを本妻呉服が詫言ゝて漸く笞を止め
られ下婢女に押下て翌より厨で仕へよとて木綿の古着を打被て臺所へぞ遣ゝける○さ
れば瓶子ゝ習ゝぬ業の火焚水汲下女ゝせられて專人目に耻かしく愁ひゝ曳水を入夫ゝ
せし事の後悔の外なかりけり去程に妙潮ゝ浩るべきとは思ひもかけず五七日を過す程
ゝ本や涙華へ赴きて瓶子が迎へ取れたる悦びを予ねべく祝義の金を貰はんとて西門屋
の本宅ゝ來ゝけるゝ圖らずも勝手口ゝて瓶子が水を汲に出しに逢見て驚き容子を問に
瓶子ゝ涙を止め兼て啓十郎が恨みの趣き遣樣〳〵と告知すれば妙潮聞つゝ舌を振ひて
然らば向ゝ曳水を媒介したる妾なれば彼お人は内心ゝ嘸憎みてぞあらんずらん其譯聞
ては浮々と本宅へゝ參り難き足元のあかき中早く尼が崎へ歸るべしやゝ辛抱き給へと
密語〳〵慰めて其儘別れて出て行しが猶も祟を恐れけん是より後ゝ西門屋の支店孫店
へも音信ず況て浪花の居宅へは再び來る事なかりしを啓十郎ゝ問せをせず迭ゝ疎遠ゝ
なりきかば妙潮は西門屋より月毎ゝ送られたる錢さへ米さへ得難くて詮方のなき儘に
朝な〳〵修行に出て托体きて人の門ゝ立つゝ其日を送りけり○爰ゝ又啓十郎が妻の侍

女ゝて後ゝ妾ゝせられたる卓二ゝ兼て中惡き阿蓮が部屋にて命を落きゝ刈藻力野が事
を思ふゝ其疑ひゝ阿蓮にあり譯を知まく思へども証據なけをば人には言ず只啓十郎の
留守ゝ程阿蓮が笑次と譯あるゝきを折々見る事あれば往る頃より力野と共ゝ其義を
阿蓮ゝ言耻かしめて詞たゝかひゝ及びし折苅藻が双方扱ひ推宥めて事治るゝ似たれど
も力野は又阿蓮が部屋ゝて譯も得知をず横死したれば談合對手なきにより啓十郎が歸
りてゝ卓二ゝ阿蓮が密通を告も知さてありけるゝ圖らずも昨日黄昏頃ゝ笑次が阿蓮へ
送りぬる艶書を卓二は拾ひ得て遣は屈竟の物を得たりと獨心ゝ悦ぶ程ゝ折もよく其夜
さゝ啓十郎ゝ卓二が部屋ゝ來つゝ臥床を共ゝしける陸言乃言の序ゝ卓二は阿蓮が密通
の事乃趣き遣樣〳〵と笑次と寐たる爲体を審らかゝ私語告て拾ひきゝ文を見せしかば啓
十郎ゝ怒りに堪ず偖は阿蓮は恩を背きて我留守を僥倖ゝ笑次を引入て幾度とあく樂み
を取し事証據既ゝ分明ありよし〳〵翌日は詮術あり遣奴等ゝ思ひ知らせんずと切齒て
敦圍けり○斯て其次の日に啓十郎ゝ小生藏ゝ一個居り阿蓮と笑次を呼寄て汝等は我旅
路の留守ゝ密通したる嗚呼乃舉動問でもしるきゝ証據の文既ゝ是此ゝあり覺悟をせよと

怒れる勢ひ當るべうもあらざりーと阿蓮は騒ぐ氣色なく汗は何を見て言はるゝやらん
伊身に添んと思へばあそ向よい命を的にして俱よ計りし事さへあるよ仮令一年三ヶ月
伊身い宿よいまさずとも他志心の侍らんやと言ば笑次も共に陳じて其文い恨ある者の
僞文よ社ひはめよしや命を取るゝとも不義の覺へはひはずと言せも果ず啓十郎は爐に
推くべて鉄火にありたる用意の鉄箸を取上て汝等ハ膽此期よ及んで白狀せずは是食せ
て思ひ知せん言ずやと責れと答へぬ笑次が髷を右手に掴み引寄て鉄火を片頰よ推當れ
ば呀と苦しむ聲と共よ片頰は更あり鬢の毛まで忽ちよ燒爛れて生死は知ず仰反たりさ
れども阿蓮は些とも騒かず見返りあから冷笑ひ身よ覺えなき疑ひを受志い時乃不肖よ
侍り妾も鉄火の相伴をさせんとあらば逃はせねと伊身も又人を失はせて妾を娶り給い
たるを今更忘れ給いずばよしあき人の讒言に思ひ替らるゝ中あらんや斯ても脫れぬ命
なれば切く伊身の手よ蒐りて死ぬるを此世の思ひ出よせん殺してたべと身を突つけて
些とも痿まぬ不敵の魂ひ是よ子勢ひ挫けたる啓十郎い鉄火を棄て起きくまたる機會よ
く笑次が文い爐に飛散て燃て跡なくありよけり去程よ啓十郎いさしも阿蓮が言辭の花

の香さへ色さへ怒りの嵐よ吹散さんは流石よてそが儘奥へ退りしかば男ども走り來て
笑次を助け勞はるよ幸ひよして死よもせざれば彼等が部屋よ助けいれて番頭に告て出
入の醫者よ膏藥を求めあどまて思ばずも日を送りけり○されば又李の瓶子は啓十郎が
恨によりて下婢女よ推下られて厨働き隙あく苦しき日數を過す程よ本妻腹なる白市が
もゝかの祝義ありといふ其翌闇らずも瓶子い罪を免されて對面あるべしと聞えしかば
夢かと許り悅びて俄よ浴湯し髮化粧して最麗しき衣を着替など志ぬる程よ卓二阿二が
迎ひよ來て奥座敷へ伴ひければ啓十郎と待受て頓て上座に推上し稀人の如き よ歎待て
偖いふ樣向よは一旦の恨よて些の耻を當たれども伊身の心信あらば何まて酷く當らん
や今日より第一の妾にして本妻の次に置べ〜此頃我等心ともあく御身れ小文庫を開き
見たるに貯への金五百五六十兩あり女子の多く金をもてるは身の害よなるよしもあれ
ば那まゝ我等が預り置べし世よ麗しくて數金の女房い幾等もあれど家庫と五百兩を持
參乃妾は御身の外に有べくもあらざをば等閑よ思いんやと最頼母志く慰めて盃を勸む
る程よ本妻呉服い白市を乳人よ懷かせ此に來て頓て瓶子よ對面志て悅びを演などす卓

二阿二は殊更よ瓶子を敬ひ取持て交々よ盃をすゝめて遊び明しけりされば瓶子は日頃の耻を洗ひ淨め忘心地まて貯への金家庫も惜むよ足ずと思ふよも啓十郎が計ひの逼しりまに感伏まて却つて頼母しく思ひぬる女の胸ケ淺かりける實に啓十郎が狡猾は今に始めぬ事ながら向よゝ空花屋浮吉を教唆して遠く旅路よ趣かせたる留守よ瓶子と密通まて竟よ僅ある金をもて彼と夫婦乃縁を切せて偖瓶子を妙潮よ預け置し折啓十郎は船舘の災禍を恐れ影を隱して久しく旅寐よありし故よ瓶子は曳水を入夫にしく豊に世を渡る程よ啓十郎は歸り來く妬く思へど恨を言ず却つて甘き言をもて巧よ瓶子を教唆して計りて曳水を押片付彼家庫と百兩の金を奪ふて瓶子よ返さず其身ゝ已よ浪華よ歸りて意菴念藏飛藏等を多く迎ひよ遣まて乘物をもて呼取までは些とも恨の氣色と見せず瓶子が居宅よ來ぬるよ及ひて俄よ趣きを替責罵まて赤裸よして鞭打懲し剩へ下女に押下て最酷く使ゝれしに瓶子は今更此より外に身を寄る處あらずなりたる勢ひ隨はざる事を得ずされバ啓十郎ゝ思ひの儘に瓶子を懲し感心させて彼が實に後悔せし時俄にまた趣きを替押上して第一の妾よして彼が多く貯へ持てる金さへ都て取上て却つて

頼母しく思はする其惡巧みの深かるゝ千尋此海よも彌増て計り知られぬ奸民なれども宿世の果報ある故かなす事毎に成就して天罪其身よ遍かれバ愚なる者は其ときめきて富榮ゆるを暗よ羨み輝妍なる女ゝ彼か男振の麗しきよ心迷ひて罪人となる事を思はず只飛藏のゝ打歎きて善からぬ事と思へどゝ諫むべき身にあらざれバ夫とはおもよ疎遠て渡世の外は西門屋へ立入ぬ日ゆ多かまける○去程よ鍜金の阿蓮は往る頃笑次が文を落して啓十郎よ見られし折何やら斯やら言ぬけて鉄火の祟りを脱をしかども啓十郎が疑いゆ解たるよあらざれバ物も言れず呼れもせず只瓶子のみ寵愛せられて添臥せざる夜もあけれバ最妬ましく口惜きに思ひは積る雪の日に表二階よて啓十郎は瓶子をのみ一個膝元へ引付て雪見の酒を汲かゝし築紫琴を彈せなどまて笑ひ樂む景況を阿蓮は遥よ仰ぎ見て我も始めゝ那の如く一個寵愛せられまに笑次が事より疎まをしゝ我から求めし疵あれども下女のおさんよ餌を飼て彼折の事を尋ねしに文を拾ひまは卓二よて且那よ讒言せしと言ふき然らバ事皆彼が所爲にて可笑や笑次は生をもつかぬ不具者よせられたる怨みゝ今宵の雪よりも積り〳〵て解難きを只今は返すよまなし先手術をも

で旦那の機嫌を直して後ゑ詮方あらんと思案をしても啓十郎の疑念とけて元乃如くゑ
あるべき計事を得ざりしかば或日意庵が來ぬる折暗かゑ部屋ゑ招き入て事の心を遣様
〳〵と密らかに密語告て計畫を求めたゑ意庵は頭を傾けて开い六ケしき筋なれば我等
が智恵ゑは及び難し然るとても僥倖ゑ屈竟の人あそゝへ近頃東より來ぬる盲法師に鴛鴦
江允可といふ者あり築紫琴の上手ゑて人の敬へて口を賞へゝ猶年も若けれども其師丘
より傳授せられて或は互ひゑ意恨ある人或い親子夫婦の中惡きを睦しくなす妙術あり
といへり我等知れる人の許ゑ同居して嫁ぐといへば件の允可を遣すべし相談して見給
へといふに阿蓮は悅びて異儀なく其義ゑ任せけり斯て次の日鴛鴦江の允可は意旨が指
揮ゑ隨ひて阿蓮を尋ねて來にければ阿蓮は部屋に迎へ入て先其人物を打見るに年は二
十餘りゑて色白く優方あり盲目ならずは笑次にも劣らぬ美男なるべしと思へば頼母し
き心地して先茶を進め菓子を勧めて厚ひの趣きを告たゑは允可は倩々打聞て其儀い昨
日意庵ぬゑゑ概略を聞たれば祈禱の用意して參りたり但し旦那の御枕を暫く借用せざ
れば調ひ難し其供物燈明い遥様〳〵ゑ用意し給へ今宵九ッ時よりして件の祈禱を致す

べきと言を阿蓮は打聞て下女のおさんに語ふゑ啓十郎い城内なる葛松加蘭太に招かれ
て今方出て行しかば今宵は歸るべからずと呉服ゑ言置しゑたなれば密ゑ枕を取出して
其夜阿蓮ゑ渡たけり是にて物皆調ひけるゑ程なく時刻ゑありしかば允可ゑ法を行いん
とて一寸八分ばかりなる藁人形の男女の形したるを包の内より取出し來て啓十郎の
生れ年と阿蓮が生れ年を細少なる紙ゑ書記させて其人形の腹に納め机の正面ゑ並べ据
て百味の具物を備へ左右ゑは燈明を多く置せて祈念を凝す事一時ばかり八ッ乃鐘ゑ響
くとき男の藁人形を阿蓮が枕當の内へ縫入させ又女の藁人形を啓十郎の枕あての内へ
縫入させて更ゑ又祈禱ゑ時を移す程ゑ已ゑ曉方ゑなりたかば啓十郎が枕を密かゑ元の
處へ歸させて祈禱い此ゑ果ゑけり其時允可は阿蓮ゑ向ひて抑も我此妙法い回背合歡
と号けて男女の中を和げ睦しき事魚と水の如くなず事三日の内を過べからず具物は御
身打きて餘らは川へ流し給へと敎へゝく其曉の朝歸りさらんとしける折阿蓮は金十兩を
允可ゑ贈りゝいよ〳〵願ひ成就せは御禮は猶も詮方あるべし是は當座の初穂ありとく
渡すを允可い受戴きて急ぎて宿處へ歸りけり○されば又鍛金乃阿蓮は允可の秘法を受

しより如何よ〳〵と思ひかねて一日二日と過す程に果せるかな魏法の奇特空しからで第三日の宵の間より啓十郎は阿蓮が部屋よ來て必よく打語ひ前よと一旦の怒りよ任して笑次を深く懲したをども退さてよく思ひ回せば恐らく人の妬みよて僞書を拵へて讒言せ志にぞあらんずらんと言に阿蓮は悅ひて俄よ些の着を覬へ中直りの盃をすゝめて臥床を設けたる其夜の趣き始めに變らず臥しつゝ語ふ言の序よ阿蓮は啓十郎よ私語やう前よは不慮ゞ疑ひを受て御身よ違避られ志よ其日頃心善からぬ卓二が所爲で侍らずやと問ば啓十郎微笑て其所乃推量違とねどもよ志や誰水をさゝばさせ和女の心變らずば今宵の如くならざらんやと言よ阿蓮も打笑て未よ付ても最惜きは苅藻力野が事に侍ふ何等の故よ九四郎ぬしと三人命を殞したるや譯を知らまく思ひしに意庵ぬ志の知る人なる鴛鴦江の允可といふ盲目法師は笹ゞたきとか言事をよく志て口寄をし侍るよしを人の風評よ聞しかば去る日允可を呼寄て黒五郎の九四郎ぬしの口を寄て問試みしよ三人命を果せしは戀の意恨よりばなりと許り聞えて其譯を具よゝ告知せず其折黒五郎ぬし宣ふやう我身非業よ世を去しは方よ現世の惡報よて我身乞食よありし時四ッ橋

綿乙が家よ忍び入て主個夫婦を斬殺志金二百兩を盜み取て逃去ける其道よて大和橋を踏外し件の金は財布の儘に川よ落しつゝあだ骨折て再び手よは入ずありよきされば是等の報ひにて憂てや軟弱兩個の女と刺違へく命を落しぬ然るよ所も多かるに和女の部屋よて身を果しゝと和女乃養父實母ある綿乙夫婦を殺したる輪廻の理りなるぞかし疑と しくば去る頃啓十郎が和女に與へし財布を見よと乃り示志て梓ゝ上り侍りよき實よ不測の告あをば始は心着ざりし件の財布を出して見しゞ表のしまさへ裏衣の紋所さへ覺ある母の縫たる財布よ侍り然らば妾が養ひ父と母の敵を今此よ始めて知れる心の悲しささこそと察〳〵給へかし是よて思ひ廻らせば御身と妾は從弟どぢにて故郷は同玄矢瀬大原今あを明せ妾が親ゝ御身の養父親ゝ矢瀬の叔父御にて文具兵衛ぬしよ疑ひあし夫のみあらで妾が母親其名を山樹と呼れしは文具兵衛ぬしゞ先妻にて離縁の後よ妾を迎く綿乙ぬしよ二度の緣結びも解ず諸共よ死去志より年を經て初めて名乘一家の親身不測乃緣よ侍らずやと誠空言混交て言巧みよ說示しつゝ財布を出して見せしかば啓十郎は驚き感じて向よ阿蓮が黒五郎よ酒を强て問おとまたる彼が惡事を口寄よ假托て今告

るとて悟るべき由あらざれば思いずも太息を吐きて其金は前つあろ船館幕左衛門より其子の爲よ送り越れたりけるよ遣はて浮金にありしかば室より飛藏よ言傳て財布の儘よ和女よ送りぬ思ふよ昔船館氏が大和川よて財布の儘よ拾ひ取たる金なるゆ彼人今は淡路よあれば事問べくもあらねども正しく和女の見覺えあらば彼金て事疑ひなし不測〳〵と舌を揮ゐて更よ黒五郎の亡骸を其夜狼が堀出して喰ふて首のみ殘しゝを石塔の上よ載たりと飛藏に告られもを又今更に思ひ合して大膽不敵の啓十郎も心善からず思ふものから阿蓮が奇遇を深き感じて寵愛始めよ彌増たをば此より瓶子と迭み變りよ臥床を空去せざりしかば呉服は更なり卓次阿二い思いずも巣守よせられて最嫉まし き思ひけり○去程に小厮笑次は啓十郎に片頻を燒をて久しく部屋に引籠り療治よ日數を過す程よ火疵い漸く癒たれども生れも着ぬ不具よありて半面惡鬼よ異ならねば鏡よ向ふも怨めしく人よ見られんも恥しけれい猶たれこめて有けるに阿蓮は啓十郎が疑ひ解て中直りしたりしより威勢始めよ彌まーて離よ憚る面もあけれど向に卓次が文を拾ひて啓十郎よ告口したる怨みを爭で返さんと思ふ心よ一物あをば暗に笑次を問慰めて

卓次が讒言這樣〳〵と告て毒氣を吹込げり

○第三編

去程よ多金の阿蓮は小厮笑次を問慰めて忍びやかよ告るやう向よ御身が落しゝ文を拾ひし者い卓次にて旦那に讒言したりしかい覿面最惜や御身を不具よせられたりされども妾が何やら斯やら言くるめたる故に事治りしよ似たれども旦那の疑ひあれぎりにて解たるにあらざれば遂よは兩個が身の上よなりなば其折如何いせん兎にも角よも恨れ盡ぬ卓次を暗に押片付兩個諸共に影を隱さん路用は妾が用意あり契りし事の變らずは折を窺び那女の寐首をとりて走り給ひね其折妾も合圖を定めて推續きて俱よ走らん今よ御身の面影の初めには似ずなりもかど夫を厭ふて白川の關あらなくよ秋風の立他し心い持なくに假令野の末山の奥浦の苫よ明暮て手鍋さげても諸白髮白歳まても添遂なばさこそ樂しかりぬべし必ず見棄給ふなと言つゝ涙さもぐむまてに實しやかよ慫慂せば笑次は倩々打聞て或は怒り或は悅び思ばずも大息を吐てさては卓次が惡心よて竟に我身は生をも付ぬ不具者よせられたり若此怨を返さずは男に生れし甲斐もなき世の物

笑ひよならんのと去よても思ひに増て最喜べしき御身は赤心言るゝ事の違べすべ露の命も惜からず折を窺ひ卓次を殺して俱よ他郷よ走るべき其期を誤ち給ふなと密よ牒を合せけり是より十日餘りを經て阿蓮は人目を忍び〳〵よ又笑次よ私談やう今宵と奥の日待あれべ平日の如く奥様よ卓次も妾も必ず呼れて酒盛して夜を深せなるべし其折手傳を運して卓次を深く盛潰して臥床よ返し眠らせなべ寐鳥を刺より容易かるべき是屈竟の便機あらずや丑満の頃忍び入て只一刀よ刺殺して庭口より表れ方へ出て妾を待給へ妾も旅路の用意して押續てしのび出ん逸りて仕損ぜ給ふなと言よ笑次ハ点頭て开ば又言るゝまでもあし這奴を殺すは安けれども御身若出後れて其期よ逢ずべ如何せん貯への金殘りなく宵より確と腰よ付て能足元を見て置給へ言までよあらねども酒を過さべ我を忘れて必ず大事を誤つべしといふを阿蓮は聞あへず其所よ如才ハ些ともなし妾も共に強醉になつたる体よ虚成て笑次と等くし退きて部屋よて御身の合圖を待んぬかり給ふなやよ喃と牒を合する詐りを悟らず逸る無分別人をも身をも殺そべき笑次が用意乃脇差のぬたべ合〳〵て其宵の間より卓次が部屋の庭の木蔭よ隠れて容子を窺ふ程に

已に其夜の子二ツ頃卓二い奥れ酒宴にもり潰されて席に堪ねは酔取呉服が侍女兩個に助け引れて蹌踉ながら其身乃部屋に歸ると頓て倒を臥て呼ども起ぬば侍女どもは臥床を設けて伏たる卓二を助け入て夜着を打かけ枕をさせて頓て奥へぞ赴きたる容子を庭に窺ふ笑次折こそよけれと椽側の雨戸を暗に推開て卓二が臥床に忍び入て閃りと引抜恨その刃水も溜らず卓二が頭を打落し引提て出る折から廊下つたひに近付人乃足音い阿蓮かそれかあらぬかと思ふものから問かねて閃りと椽より折戸口ある塀乃溝版二三枚切開きつゝ外面ぬ方へ出る折から向ひより挑灯提げて來る者あり這は尼が崎なる寒八なり早く主個に告んと思ふ要用ぬ事あるにより宵過て支店を出しかば此時居宅の邊りまで來ぬる折から思いずも笑次に磯と行遇て遁も過さず挑灯の火影に見れい怪しき曲者右手に女の生首を引提て行く後より曲者待と呼留る聲に驚く笑次がそくに丁と打たる生首の礫に挑灯打落されて闇はあやなし曲者の行衛い見えずありまかい寒八聲を振立て頻りに人を呼立れば西門屋の男どもまだ眠らぬもありければ手に〳〵挑灯六尺棒を脇狭に引提て群立出來る七八人見れば件の曲者は内より出し者と覺えく庭れ板